
おさなくあるもの

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おそれなくあるもの

【Zコード】

N5027C

【作者名】

シロクロ

【あらすじ】

ハクオロが少年だった場合を妄想した小説です。決してとれない仮面をつけた少年が怪我をして拾われた。記憶喪失でハクオロと名前をもらつた少年がその村に住みだすことから物語は始まります。

僕はハクオロ（前書き）

これは『うたわれるもの』の一次創作小説です。
テキトーに書いてたりするので「イメージが壊れた」や「こんなのが
じゃない！」などの精神被害を訴えられても責任は持てません。
自己責任でお読みください。

僕はハクオロ

「…んん?」

青年、というより少年にあたる男が目を開けると、少女がいた。
誰だろ?…といふかここ何処?

「大丈夫ですか?」

「…ここ、は…痛!?」

起き上がるうとすると体中が軋むよつて痛んだ。少年は思わずまた布団に倒れて唸り声をあげた。

「あぐう～～

「ま、まだ寝てなきや駄目ですよ。酷い怪我で倒れてたんですから。大丈夫ですから、寝ててください。」

少女は優しい手つきで少年に布団をかけ微笑んだ。
なんだろ?…凄く、体が重い。

「あ…りがとう…」

「…」
「あ…」

少年は目を閉じて眠りについた。

「ん…んん…。」

「！」

再び少年が目を開けると今度はさつきより幼い少女が酷く驚いた顔
でいた。

「…君は…?」

声をかけたがすぐに何処かへ走つて行つてしまつた。
何だつたんだろ?…

「あ…。」

また眠気が…お休みなさい…

、

。

そして少年はまた眠りにつくのだった。

「…あ？」

「あ、目が覚めたんですね。怪我の具合はどうですか？」

少年は起き上がり腕を回してからんーと伸びをした。

うん、まだよつと痛い氣もするけどばつちつだ。

「大分、良くなつたよ。ところで、なんで僕がここにいるの？怪我つて？」

「覚えてないんですか？」

「うん。」

「地震があつた日に、森であなたは凄い怪我で倒れていたんですよ。」

「全然、ピンと来ないけど、体中包帯だらけだし本当なんだろうな。」

「じゃあ、君は命の恩人だね。ありがと。看病までしてもらつちやつて悪いね」

少年がにっこり笑つて言つと少女はどこか慌てたように手をふり否定する。

「い、いえ…当たり前のことをしただけです。手当ても…私はおばあちゃんの手伝いをしただけですから。」

「そう？でも、やっぱり助けてくれたのには変わらないから、ありがとう。助かつたよ。」

「そんな…。えっと、私はエルルウです。あなたの名前は？」

「んー…？あれ？僕は…んん？あれ？」

何か全然わかんないといつか、名前どこいか…僕って何？人間？男？女？

「分からぬ」

「え？じゃあその変な仮面のことも？」

「え？仮面…？」

言われて少年が顔に手をあてるど、確かに固いものがあるのが確認できた。エルルウがすかさず鏡を持ってきた。

鏡を覗くと映つているのは顔の上半分を隠す鬼のよつた角のある白い仮面をつけた少年だ。

仮面により顔の造りや年齢はあやふやだが、背格好から少年が成人していないのが分かる。性別は先ほどからあるように男だ。

「… ていうか僕は本当、何歳？子供？大人？」

「ねえエルルウ、僕は何歳に見える？」

「えつと… 16、7歳？私とそんなに変わらなく見えます。身長も私よりちょっと高いし。」

「そりなんだ？でも僕…自分で言ひひとアレだけどなんか幼く見えない？」

「……はい。運ばれて寝ている時は普通に16、7と思つてたんですけど…今はもっと下に感じます。仮面してゐるのに、何ででしょう？」

霧岡氣？

とりあえず外そうしてと少年は手をかけるが

「ぐつ！？」

引いた瞬間、頭が割れるような激痛に思わず手を放した。落ち着いて今度は優しく外そうと試みるが…。

「ぐきぎきい！」

無理に外そうとすると頭がかきまわされるように、引き千切れように痛んだ。少年は諦めて手を放す

「つ、はあ…」

「もしかして、外れないんですか？」

「うん」

「じゃあ、ずっとそのままなんですか？」

考えたくない」とをちらつと言つて少年はあははと空氣をだしてみる。

「まあ、まあね。でもほら、つけたままでも生活に問題はないし…ん？」

少年はエルルウの耳に違和感を感じて視線を送る。

凄い今更だけど、エルルウ、動物の耳みたいなのがつけてる。アクセサリーかな？

エルルウは立ち上がりて何か食べる物を持って来ますと反転して部屋を出た。そして少年はそのお尻から生えてるものに仰天した。

尻尾もある！？揺れてるのは…歩いてるからだよね？

5分くらいたつとエルルウは戻ってきた。

「お待たせしました。ちょっと冷ますね。」

エルルウは少年の寝ている布団の隣に座り、お粥みたいな白いものをくくつてふーふーと息をふきかける。少年はちらりと尻尾を見る。

「あ…ありがとうございます。」

動いてる…確実に動いてるよ！

「はい、どうぞ。」

エルルウはスプーンを差し出す。病人とは言え甘えてると思いつつ少年はこの際なので甘えることにする。

「ん、美味しい。エルルウがつくったの？」

「はい。」

「エルルウは料理上手いんだね。手当てもできて…才色兼備？」

「そんな…大したことじやありませんよ。」

うお！尻尾が！尻尾がめちゃめちゃ振れる…？

エルルウが頬を染め、そしてそれに呼応するように勢いよく振れだした尻尾に、少年の目は釘付けだ。

「もう…次、いきますよ。」

エルルウはまたお粥をくくつてふーふーと息をふきかけだした。しかし少年にはこれ以上、好奇心を抑えられない。

「エルルウ、ちょっとといい？」

「え」

少年はエルルウの尻尾を優しく握つてみた。

あつたかくて柔らかい。…って本物！？

「はにゃあ！？…あ」

「え」

エルルウの壇に少年が顔をあげると、お粥の器が宙を舞っていた。
といふか、少年の顔に向かつて飛んできていた。

「あぎや あああああああ！」

避ける間もなく少年は頭からお粥をかぶつた。

「すすすみませんすみません！でも女の子の尻尾を勝手に触つ
ちゃ駄目ですよ……」

マジド、もうしなにから許してくださこエルルウさん。

「…ふう、酷い目にあつた。」

「な…だ、だから尻尾を触るからです。失礼でしょ！」

「『めんなさい。…まだ顔がヒリヒリするよ。』といふかその尻尾本
物？」

「尻尾に本物も偽物もありません！もつ！」

「ずいぶん元気な声じやつたが、具合はもつえんかえ？」

ふりふり怒るエルルウをどうなだめようかと少年が考えていると老
女がやってきた。そして老女にも耳と尻尾はある。
やつぱり僕の感覚がおかしいのかな？記憶ないし。

「あ、もしかしてエルルウの言つてたおばあ

「トウスクルさんと呼びな。」

「…はあ、えつど、助けていただきありがとうございました。」

「礼なら一人に言いな。献身的に世話をしどつたからのお。」

「二人？」

言われて入口をみると昨日かどつかは少年の記憶では分からぬが
見覚えのある少女がいた。

「アルルウ、ちゃんとご挨拶なさい。」

「……」

やはりと意のほか少女は何も言わずに逃げてしまった。

嫌われるのかな… つてそりゃいきなり家にあがりこまれていい気はないよね。

「「」ごめんなさい。今のは私の妹のアルルウです。人見知りが激しくて…。」

「いや、気にしないで。アルルワー！ありがとうねー！」

聞こえるかは分からぬ少年は叫んだ。伝わっていなければとでもた言えればいい話だ

「ほんで、お前さんの名前は？」

「分からないんですけど」

「そうなの、この人記憶がないみたいで… おばあちゃんの薬で何とかならないの？」

驚いた顔をしたトゥスクルにエルルウがそう問うが、トゥスクルは首を横に振る

「失った記憶を戻す薬なんてないんじゃよ。時がたつのを待つしかないのさ。なあに、そう悲観的にならんでも、そのうちひょっこり思い出すじゃろ？」「

「はあ」

別に悲観的にはなつてないけどね。為せば成る為せば成らぬ何事も。ま、成るように成るさ。てか知識はあるんだよね

「まあ名前がないなら… ハクオロ。記憶が戻るまでハクオロと名乗るとええ」

「え…？」

エルルウは驚いたようにトゥスクルを見たが少年 ハクオロは気づかずに頷いた

「分かりました」

「それと、そんな裸同然で動きまわるわけにもいかんじゃろ。エルルウ、服を用意しておあげ」

「うん」

ハクオロ、ハクオロね。まあいいか。にしても世話になりっぱなしで悪いなあ

「息子の服じや。少し大きこがうちには男物はそれしかないからね。
我慢せえ。」

アルルウに手伝つてもらい着た服は多少色々とだぼついていたが、
ひきずるほどでもない

「我慢なんてそんな…足元を折り返せばいい話です。ありがとうございます。」

その時、物音がして振り向くとアルルウがいた。ハクオロは声をかけようと口を開いたが

「違う。」

とだけ言つとアルルウはまた逃げてしまつた。

…何が？

「ふふ、きつとハクオロさんがお父さんの服を来てたから驚いたんですね。身長は違いますけどアルルウから見たらそう変わらないだろうし、きつと後ろ姿が似て見えたんじゃないでしょ？」

「ふうん…ところで君の両親は見ないけど？」

「お父さんは亡くなりました。お母さんもアルルウを産んすぐによ

…。」

「じめん。悪いこと聞いちやつたかな？」

「いいんです。昔の話ですから。……実は、ハクオロ、つてお父さんの名前なんです。」

「そうなんだ。」

「はい…あ、何だかしんみりしちやつてすみません。怪我も大分良くなつたみたいですし、少し外を歩いてみませんか？」

「うん。お願いしようかな。」

ハクオロは元気に笑うエルルウの頭を何となく撫でてやる。理由はなかつた。ただ漠然と頑張つてゐなあ、いい子だなあと思つて、何となく撫でてみたのだ。

「な、何ですか？」

エルルウは顔を赤くしながら、惑いの声をあげるがハクオロは気にせずにつっこり笑う。

「別に。行こつか。」

「はい！」

トウスクルさんが横でニヤリと笑っていたが、二人は気づかなかつた。

村に庄ひつ（前書き）

二次創作でかつ文才もなくテキトーなノリで書きます。
苦情は承れません。

それでもいいと言つの方のみどうぞ。

村に住もう

「ようエルル」

村を散策しだしてすぐに、大柄ないかにもオヤジな顔の男がエルルウに挨拶をしようとして、ハクオロを見ると固まつた。

「エルルウ、誰だこの妙な仮面男は？」

仮面男つて…もしかして僕？

「あ、テオロさん。誰つてほら、この間の時の」

「……ああ、村長んトコに担ぎこまれた。ふうん、仮面なんかつけて怪しげだが…大丈夫なのか？」

無遠慮にハクオロをテオロは見る。ハクオロとしては仮面は事実なので何とも言いようがない。

「もう、初対面でそんな言い方失礼じゃないですか。大丈夫ですよ。こう見えて意外と…えと、とにかく大丈夫です。」

こう見えても？意外と？で今之間は何…？

「そうか、いや悪かつたな。俺あテオロつてんだ。お前さんは？」

親しげに笑うテオロ。

「あ、ハクオロだよ。」

トウスクルには何となく敬語を使つたハクオロだつたが基本的に敬語はなしでいくつもりだ。というか相手がフランクな雰囲気なので尚更だつた。

「ハクオロだあ？」

急に胡散臭い者を見る目で見られたがエルルウが急いで説明する。

「あ、おばあちゃんがつけたの。この人記憶がないみたいで…。まあ、エルルウのお父さんと同じ名前つてすぐ分かるよね。エルルウとも親しいならそのお父さんとも親しいだろうし。エルルウの説明を聞くとテオロは急にぷつと吹き出し豪快に笑いだした。

「だーっはっはっはっ！」

「？」

「いや、災難だつてのに笑っちゃいかんな。でも記憶がなくなっちまつことがあるんだなあ。それじゃ、俺と同じ、オロがつく名前つてことは兄弟だな。よろしくなアンちゃん！」

がっしり肩を組まれハクオロは困惑しながらも相槌をうつ。

「う…うん。」

『アンちゃん』って…兄だよね?…びーみても僕のが年下だし。あ、でも若い人を総じて言つたりもするから問題ないのかな。

「俺のことはみんなと同じようにオヤジと呼んでくれや。親父のようく強く、たくましく、頼りになる、つてな。」

いちいちポーズをとるテオロの背後からやつてきた人物が肘でテオロをつついた。

「何言つてんだい。親父のように老け顔だからじゃないかい。」

「ぐつ…カアちゃん。」

やつてきたのはハクオロと同じくらいの背の女性だ。

「うちの宿六が騒がしくてすまないねえ。どれ…あんたが…男前、かどうか仮面をつけてちゃ分からぬねえ。エルルウと同じ年かい？」

「17歳だよ。」

と言つことにしておこいつ。子供に見られるのもなんか癪だし。

「そつかい。身長はいまいちだけどまあ17ならまだ背は伸びるだろうね。ま、とにかくエルルウ、この珍妙な…そうだね、珍男前にあたしのことも紹介しておくれよ。」

ちんと…誉められてるのかバカにされてるのか分からぬや。

「はい、この人はソポク姉さん。テオロさんの奥さんです。」

「姉さんといふことは…」

「あ、血は繋がつてませんよ。年上の人には大抵兄さんとか姉さんとか言つうんです。」

「村の人にはみんな家族みたいなもんだからね。」

「だがよ、俺は一度も兄さんと呼ばれたことねえんだけどな。」

頭をかいて言うテオロをソポクが肘でつついた。

「こつたこお前さんのゞいを取れば兄さんになるのさ。」

「ング」

「あはは、まあとにかく、一人ともよろしくね。」

「ところで、家のほうはもう治ったの?」

「あ…あと少しつてとこだ。まったく、突然揺れたと思つたら容赦なくヒトん家を倒していきやがつて。」

「だから建てる時に真面目にやれと言つたじやないか。それをあんたときたら、面白がつて変に組み立てたりして…うちだけだよ。あんな見事に倒れたのは。」

「わ、悪かつたよ。」

「あはは。でもあんな地震は久しぶりだつたね。」

「エルルウたちは大丈夫だつたかい? その時アルルウと苔や石いろを探つてたんでしょう?」

「うん。びつくりしたけど、出口の傍ですぐに逃げたから。それヨリソポク姉さん、『苔や石いろ』じゃなくてお薬の材料だつてば。その言い方だと、まるで苔や石いろを拾つのが好きみたいじやない。」

「あはは。何言つてんの。色々草や石を探るの好きなんだろう? その時のエルルウは目の輝きが違うじゃないか。」

「う…」

「どうしたんだい? 今まで気にしなかったのに。」

そう言いながらソポクはハクオロに視線を向けると何かを納得したような、少し意地悪そうな笑みを浮かべた。

「ははあん。」

「な、何なの姉さん。」

「奥手だと心配してたけど…いらなかつたみたいだね。」

「ね、姉さんつ。」

何の話だろ?

ソポクはにやにやとハクオロを見てくる。

「何?」

「でも、この手は苦労するよ。鈍そつなのはウチのヒヅカにいだね。」

「姉さんてばー。」

「はいはい。」

「さて、そろそろ始めるか。それじゃアンちゃん、今度歓迎会するから楽しみにしててくれ」

テオロが嬉しそうにそう言いつとソーポクが呆れたよつて肩をすくめた。

「あんたが飲みたいだけだわ!!~」

「ング」

「全くこの宿六は…」

「あははは

陽気でいい人たちみたいだな

それから何人とも挨拶まわりのようなことをしていい加減くたくたになってしまふのが普通なのだが、ハクオロは昨日まで寝込んでたと思えない元気さだつた。

気が付けば人は遠くにしかいなくて土が露になつていて寂しいような場所にまで来ていた。

「……もしかしてこの辺で畠にしようとした?」

「え、はい。でもどうして?」

「掘り返したあとがあるからせ…んー。」

ハクオロは畠(仮)に入つていくと畠んで土を握つて何かを確かめ始めた。

「ずいぶん瘦せてるなあ。」これじゃあ水もすぐ吸うだろひし……でもこれくらいなら、何とかなるんじやないかな

「エルルウ、もう開拓はやめちゃったの?」

「諦めたくはないんですけど…何度も駄目で…。」

「やるうよ。大丈夫。僕が何とかするから。きっと大地だつて、そ

うして欲しいと思つてるよ。」

ハクオロは立ち上がり、にっこり笑つた。エルルウはキヨトンとしていたが、やがて言葉の意味を飲み込んで頷いた。

「分かりました。じゃあ、みなさんに言わなくちゃいけませんね。でも、どうするんですか？今まで本当に駄目だつたんですよ？」

「うん、それで用意して欲しいものがあるんだけど。」

「ハクオロ、お前さん、あの畠を何とかするつもりだそうだね。」
自分の、と勝手に言つたがハクオロが抱きこまれて寝ていた部屋で机に向かつていると、トウスクルがやって來た。

「あ、はい。それでお願いがあるんですけど。」

ものつ、凄い図々しいといつか言いづらいんだけど……。

「うん？なんじゃ？」

「じ」

「おばあちゃん、ハクオロさん、ご飯が出来ましたよ。」
タイミング悪くと言うかエルルウが居間から室内に顔をだしてそう言つたのでトウスクルは踵を返した。

「ああ、今行くえ。飯の席でもええかね？」

「はい。むしろ一人にも聞いてもらいたいですから。」

ハクオロも立ち上がり居間に行く。いい匂いが食欲をそそる。そう言えばハクオロはこの村に来てからお粥を食べただけだ。思い出すと急にお腹が減つた。

「ほほお奮発したのぉ。」

「今日はハクオロさんの回復祝いだもの。」

アルルウもエルルウと揃つて囲炉裏の回りに器を並べていた。

逃げられてばかりだからようやくアルルウの顔をはつきり見た気がするよ。

座布団が4つあるので空いている場所に座ると、みんなが揃つて手

を呑ませたのでハクオロは訳が分からないがとりあえず手を呑ませた。

「それではいただこうかね。」

「森の神さま（ヤーナウン・カミ）、いつも恵みをありがとひびきでいます。大神ウイツアルネミニアに感謝を。」

ヤーナウン？ ウイ…何だろ？

唄うように唱える3人に全く分からぬがとりあえずハクオロも

「か、感謝…」

と言つた。

「いただきます」

あ、この芋みたいなのをタレにつけたりおかずと食べぐんだ。確かにモロ口芋、だつけ

もの凄い勢いで食べ始めるアルルウにハクオロはさつもまで思いきり食べてやるうと思つていたが、ゆっくり食べることにした。

「アルルウ！ もうと落ち着いてしつかり噛んで食べなさい…あ、ハクオロさん、おかわりはいっぱいありますからちやんと食べてくださいね。」

「ありがとうございます。美味しいよ。エルルウが作つたの？」

「はい。ありがとうございます。ってアルルウ、食べ過ぎりよ」

「まだある」

「それはハクオロさんの分よ」

「一個だけ」

「駄目よ」

「半分…」

「駄目つたら」

「う…」

唸るアルルウが少し可哀想になりハクオロは

「僕ならしいよ。」

と言いながらアルルウにおかずを差し出した。

「駄目です。病み上がりなんだからちやんと食べてください」

「食べてるよ。エルルウのご飯は美味しいからね。でも、これだけで十分だから。はい、アルルウ。」

「……」

「あの」

「ん？……つ！」

ハクオロが一瞬エルルウに気をとられた隙に、アルルウはハクオロからおかずを奪って食べた。

「アル！すみませんハクオロさん。えっと、私のをどうぞ。」

ぐう。と小さな音がエルルウのお腹からした。エルルウは恥ずかしそうに顔を赤くした。

「あはは。いいよ。僕はいいからエルルウが食べなよ。」

「さて、話が落ち着いたようじやがハクオロ、さつき言つておつた願い、とはなんじや？」

「あ、はい。実は僕をこの家に置いて欲しいんです！勿論、家ができるまででいいんです。その、この村以外に行くところもないし、みんなとも知り合つたし。」

ハクオロは頭を下げるがトウスクルはひょうしぬけしたように頭をあげいと言つた。

「なんじやそんなことか。ええよ。家なんか作らんでええよ。何か思い出すまでこの村に、この家におればええ。」

「でも……さすがにそれは迷惑でしょう？」

「構わんよ。困った時はお互い様じや。生きていくだけの糧は森の神さまが恵んでくださる。一人一人増えたところで変わらんから、気にすることはないで。」

「そうですよ。」

「アルルウも、それでええな？」

「ん。」

ガツガツガツ。アルルウは殆ど上の空のように食べながら返事をしたが、エルルウに聞いたかぎりでは嫌われていないようなので実際に構わないのだろう。構わないのだろうが、ハクオロはちょっとぴり

傷ついた。しかしそれよりトウスクルたちの優しさが嬉しくて、ハクオロは満面に笑みを浮かべた。

「ありがとうございます！この恩は忘れません！」

「ええんじやよ。この辺境の地はお世辞にも豊かとは言えん。だからこそ、みなが助け合わねば生きていけん。そうそう、ワシはここで村長と呼ばれる。何かあつたら遠慮なく言つとええ。」

言われて何人かが「村長の家に」となどと言つていたのをハクオロは思い出す。

「よろしくお願ひします！」

ハクオロは深々と頭を下げた。

仲良くなりたい

「よいつしょつ…ふう。」

自分で言い出したとは言え…畑仕事つて重労働だなあ。

鍬を地面に突き刺して腰に手をあててハクオロが一息ついていると、エルルウが寄ってきてタオルを差し出した。

「大丈夫ですかハクオロさん、病み上がりなんですから無理しないでくださいよ。」

「え、いや…。」

それはもう全然問題ないんだけど…。

タオルを受け取りながらも体力不足ですとは言えずに困っていると、テオロがきた。

「アンちゃん、無茶すんなつて。俺たちに任せとけよ。」

「あー…うん、じゃあ休憩させてもらおうかなあ。」

餅は餅屋つて言つし…。いやホラ僕病み上がりだからゲホゲホ。

「あ、あと石は碎いてもうちょっと深く掘つてね。念入りにお願い。」

「キツイことやらつと言つてくれるぜ。」

「あ、その…ごめん。」

「なあに気にすんな。そうしないとモロロ芋もできねーんだろ?よーし!休憩終わりだ!みんな気合いいれりおー!」

テオロが叫ぶと同じく畑作業に従事していた男たちからブーリングが起ころる。

「全く、人使いがあらいな。」

「年寄りは勞らんか…。」

「あの!み、みんなごめん!僕が言い出したから…。」

ハクオロが申し訳なさそうに身を縮こまらせ言つと、ブーリングは收まり口々にフォローをしてくれた。

「いいんじゅよ。ちょっと愚痴つただけじゅ。」

「やうそ、みんなやらなあやとは思つてたからな。ハクオロは俺たちに指示してくれればさ。」

「…ありがとう。」

僕つて幸せだなあ。記憶がなくつたって、こんないい村の住人になれたんだから。

ハクオロが外にを歩いていると木陰でアルルウがうとうと眠りそうになつてゐるのを見つけた。

アルルウ…かあ。エールウは嫌われてるわけじやないつて言つてたけど、未だに顔を合わせただけで逃げちゃうんだよね。ようし。

ハクオロはそつとアルルウに向けて一歩踏み出す。

「…ん。」

アルルウはぱくっと耳を振るさせた。

「…」

「…」

「…」

またうとうとし始めるアルルウにハクオロはほつと息をつく。

鋭いな。よじ、もつと気配を殺して…一步、二歩…。

ゆつくりゆつくり近寄り、何とか手を伸ばせば届く距離にきたハク

オロは、アルルウの顔をじつくり見た。

可愛いなあ。無垢つてこいつの言つのかな。僕も妹が欲しいなあ。何といつか和む。

ハクオロはアルルウの前にしゃがむとそーっと手をのばし、頭を撫でた。

「ん…。」

よし！氣づいてない！

アルルウは目を覚まさないでこりかハクオロにとつては嬉しことに甘えるように手に頭を押し付けてくる。

「ん~、んふ~…」

く一つ、寝ぼけたるとはいあのが逃げてたアルルウが甘えてくるなんて…感無量だよ。

耳と尻尾をパタパタ振りながらアルルウは

「んにゅー。」

と可愛らしく甘えた声をだす。

やつぱり尻尾とかつてあるのが当たり前なんだよね。記憶喪失って物事の認識までおかしくなるのかな？

「…あ。」

ついに尻尾はパタパタを越えてぱつぱつと勢によく振れ、ハクオロの顔に当たりだす。

「あ…っ…。」

くくしゃみが出そり…っ！

「は。」

「んふ～。」

「はつくしょーんっ！」

「つーーー？」

アルルウは飛び起きたと脱兎の如く逃げてしまった。

「……残念。」

本当に、非常に、残念だ。いつか、いつか起きてても僕に甘えるくらい仲良くなつてやるー

「おばあちゃん、行つてきます。」

「ん。」

「あ、アルルウも行く？」

「うん。」

聞こえてきた会話になんだかとハクオロが顔を出すとトゥスクルが見つけて手招きをする。

「そうそうハクオロ、よければお前さんも一緒に行つてくれんか。」

「良いけど… 何処に？」

家族、ということなので何となく迫力があるトウスクルに敬語を使つていたハクオロだが今はもうやめている

「フォツホツホ、エルルウに聞きな。頼んだえ。それじゃ 3人とも、
氣をつけてな。」

「行つてきます。」

「わかつるとと思つがくれぐれも『奥』へは行かんようにな。」

「うん大丈夫。」

家からだとエルルウは鎌や鋤のはいつたずいぶん大きな籠を背負つた。

「持とうか？」

「え？ あ、いえ、持つてもらうほど重くないですから。」

「ならいいけど、エルルウと身長はそんなに変わらないけど、僕は男なんだからちょっとくらい頼つてもいいんだよ。」

ていうか逆に寂しいし。

エルルウは目を見ひらいてからぱちくりと瞬きをして、頬を赤くして微笑んだ。

「ありがとうございます。じゃあ、その時はよろしくお願ひしますね。」

「うん。ところで何処に行くのかな？」

「麓の森まで薬草摘みに。行こうアルルウ。」

「ん。」

集落を出て筋肌がのぞく道をゆっくり降りて行く。半刻ほど歩くと斜面はなだらかになり、辺りの景色は緑になる。そして突然、見上げるばかりの巨木たちが3人の前に立ちふさがつた。

凄い…こんな麓近くにこんな広大な森があつたんだ……ん？ そういうや僕、森で発見されたんだよね。ここかな？ でも…全然覚えてないや。……まあ、いつか、別に生活に困つたりしてないし。

「つて、ん？」

ハクオロが我にかえると「一人が何やら小さな祠に向かつて何事かを

唱えていたが、やはりハクオロにはよく分からぬ言葉だけだった。

「何してたの？」

祈りが終わつたらしい立ち上がつた一人に尋ねる
「森の神さまに祈りを捧げてたんです」

「ふうん？」

あまりピンとこないので恐らく以前のハクオロは信仰と無縁の生活
だつたのだろう

「ところでトウスクルは何で奥に行くなつて言つてたの？」

「……」

「エルルウ？」

「あ、すみません。まだおばあちゃんが呼び捨てにされると氣分悪いから
なくて」

「えつと、やっぱり尊敬する家長を呼び捨てにされると氣分悪いかな？アルルウはどう？」

「……」

アルルウはエルルウの後ろに隠れてしまつた。
はは、泣いてなんかないさ。

「ごめんなさい。もうアルルウつたら。でも慣れてないだけですか
ら。おばあちゃんがいいつて言つてたしいいんじゃないんですか？
まあ珍しいですけど」

「そう？まあいいや、で、何で駄目なの？」

「奥には『主』様がいるんです。勝手に入ると襲われちゃいますよ。」

両手をあげてガオーと真剣に獣の真似をするエルルウが微笑ましく
てハクオロはくすくす笑つ。

「な、何がおかしいんですか。」

「え？いや…そんな言い伝えがあるんだね」

むつとしてジト目で見てくるエルルウにハクオロは目をそらす

「え？言い伝えじゃありませんよ。本当に主様はいますよ」

ぱつと真顔になりエルルウは言い、ハクオロも視線を合わせる。

「ほ…本気の目だ

「…マジ？」

「はい。私はあつたことないんですけど噂では

「おねーちゃん。」

「え？」

アルルウの呼びかけにエルルウは話を止めて振り向く

「まだ？」

「あ、ごめんね。行こつか。」

「ん

「ちよつ、エルルウ 噂って」

「アルルウ、早くー」

「……ん

アルルウは一瞬ハクオロを見たがすぐにエルルウを追い掛けた
噂つて何ーー！？

「あ、あつた目印。じゃあこの辺でしようか。」「ん。」

エルルウが籠を降ろすと二人はそれぞれ、ハクオロには雑草にしか見えないものを選りすぐんでは籠に入していく。

「エルルウ、僕に出来る事ない？」

「……えつと、二人で大丈夫ですから休んでいいですよ。」

戦力外通知！？でも僕負けない！…我ながらキモイかも

「ちよいとエルルウさんや。」

「はい？何ですか？」

「それは何の薬？」

「これは煎じて解毒薬に、こっちはお腹痛に効きます」

「へえ、エルルウって博識なんだね。」

「そ、そんなことありませんよ。私はただおばあちゃんの作業を毎日見てたからで…。」

エルルウは頬を赤くして否定するがハクオロはつづると首を横に振る。

門前的小僧ならぬ薬師の孫、なんてね。

「でも凄いよ。それは誇つていいことだと黙り。」

「あ…ありがとうございます。」

にしても…僕には全然分かんないや。よし、言われた通り休憩しようと

ハクオロは適当な木にもたれて目を閉じた

ハクオロは目を覚ますとぎゅっと目を閉じて思いつき腕を空に向けて伸びをする

「んーーっ！はわわあ、エルルウ、今何時ー？…………あれ？」
欠伸ながらにした問いには返事がなく、一瞬、置き去りかと慌てたが籠があるので違つかと落ち着いた。

するとこらー！と何とも元気な声が聞こえてきた。

「ん、あっちか」

ハクオロが声の元に行くとエルルウが木の上に向かって叫んでいた。つられて見上げるとアルルウが呑気に果実を食べていた。

「こらー！早く降りてきなせーー！お姉ちゃんの言つことが聞けないのーーー！」

元気だなあ

「エルルウ」

「…え？あ、その、これは」

ハクオロが声をかけるとエルルウは恥ずかしそうに言い訳をしようとしたが、それより先にハクオロがアルルウを見上げる

「あんまり急かして落ちても危ないし、のんびり待とうよ」

「あ…で、でもあの子、あんまり高いと登れても降りれないんです。」

「え…あ、アルルウー！？」

「…う…。」

アルルウは木の幹に抱きつきながらオロオロと下を見ている。
君は子猫か！？まあ仕方ない。

「僕が迎えに行くよ。」

「でも怪」

「怪我なんてとつぐに全快だよ。かるうく救出してくれるよ。」
ハクオロは宣言通りすいすい木を登つていぐ。畠仕事ではすぐにバ
テるくせにこいつことは得意なのである。

「つ…」

「つて逃げようとしてないで。大丈夫大丈夫、怖くないよ。」
幹にしがみつきながら手をアルルウに伸ばす。

「う…。」

「そうだ、今日の晩御飯のおかず僕のをわけてあげるよ。だからお
いで〜。」

「…」

本当に子猫を相手してゐる気分になつてきたよ。

「アルルウ、いい子だね。怖くないよ。おいで。」

アルルウはゆつくりとハクオロの手に小さな手を伸ばす

「いい子だね、アル」

その時、ハクオロはアルルウの背後に大きな蛇がいてしかも近づいてくるのに気付いた。

「ぐるな！」

「つ。」

蛇に言つたのだが怒鳴られたと勘違ひしたアルルウは驚くべき早さ
でさらに上へと登つた。

「あ、違…つてそつちは枝が細」

「枝が細くなつてて危ない。」と言おうとしたのだがそれより先に
アルルウの乗つていた枝が折れてしまった

「つ

「！？」「

ハクオロは渾身の力をこめて幹を蹴りアルルウに手を伸ばし、逆さに落ちてくる襟首を掴んで抱き寄せた。しかし当然ながら足場のない二人は落ちた

「十点満点っ！！！」

そしてハクオロはまた渾身の力で着地した。足が痺れるが骨が折れた様子もなく、何とか軽口を叩くことにも成功した。

「アルルウ、大丈夫？」

「……ん。」

「よかつたあ。もつあんなとこまで登っちゃ駄目だよ？」「

「……うん。『じめんなさい』

「まあ今回は無事だしよかつたけど」「

「よくありませんっ！！！」

あまりに大きな声に一人はびくっと背中を震わせてからゆっくり背後を見る。

「私、私心臓が止まるかと思つたんですよ」

お説教から始まつたが興奮したエルルウの話は支離滅裂になりついには泣き出してしまい、一人はオロオロと困惑するばかりだった。

「エルルウ。」

「……。」

泣きやんでから帰る最中も全く返事をしてくれないエルルウにハクオロは辛抱強く声をかけ続けていた。しかしもう集落まで来ている。

「エルルウー。ちよいとエルルウさん？」

「……。」

「美人で器量良しのエルルウさん？」

「……。」

「『じめんなさい。許してくださいてかマジで反省します。一度と
しませんから返事してよ！』

いい加減に疲れて根気負けしたハクオロがそう叫ぶとエルルウはク
スリと笑った。

「え。」

「もう良いですよ。でも、絶対にもうしないでくださいよ。」

「勿論さ。」

勿論、場合によつてはするよ。だつてアルルウを置き去りには出来
ないからね。

「アルルウ、もう着いたからそろ降りなさ……あ、アルルウつた
ら……。」

アルルウはあの後疲れたと言つので背負つて家まで帰つてきたのだが、ハクオロが首をひねつて見るとビックやら眠つていいようだ。

「どうりで静かなはずだね」

「アルルウ、起きなさい」

「いや、気持ちよそうだし無理に起こさなくともいいじゃん
「すみません…もう、この子つたひ…」

「おとー…さん…」

「え？」

「お父さんつて…僕が？」

「アルルウ…」

「ちよつ、と待つた。僕そんな年じゃ…せめて兄が良いな

「は…ふ、ふふふ」

「ちよつ、笑わないでよ。もう良いよ。トウスクル、ただいま。」

ハクオロは怪我人だつたどころか木登りをしたり飛び下りたのが嘘
のように元気に家に飛込んだ。エルルウは少し呆ながらも微笑んでいた。

笑顔のために働く（前書き）

原作沿いを忠実に描いていますが、沿ってないとか言われても責任は持てません

笑顔のために働く

「ハクオ口をーん！」

いつものように耕しているとソポクとエルルウが粉でいつぱいの器を持つてやってきた。

「あんたの注文通り灰に骨、貝殻、あとは渡された石じりを碎いて混ぜたもんを作つといたよ」

「でも、こんなのどうするんですか？おばあちゃんにもらった薬鉢石も混じつてましたけど」

「この畑に撒くんだ」

「撒く？これを？何かのまじないかい？」

「まさか。これが植物を育ちやすくするんだ。植物が育つには必要なものがあつて、特にチツソ、リン、カリウムは不可欠なんだ。それにマグネシウム、イオウ、マンガン、あとは」

「ああ、もう！何がなんだかわかりやしない。やっぱりまじないのかい？難しいことは言わないでそういうやいいじやないか。とにかく撒けばいいんだね」

「いやまじないじや」

「不思議な力で荒地を森にする連中もいるみたいだし、同じようなものがね。行くよエルルウ」

「あ、ちょつ」

二人はさっさと撒きに行つた。

まじないつて…何か勘違いしてるみたいだけど…まあいか。うん、いいけど…僕の話聞いて欲しかったなあ

「ん？」
「あ…」

居間に行くとアルルウとばつたり出くわした。ハクオロとアルルウの関係は森に行つた以来変わつた。以前のように顔を見れば逃げ出すこともなくなつた。

よ～し、僕の胸に飛び込んでおいで！

ハクオロは笑顔で両手を広げる。アルルウはしばらくハクオロを見ていたが

「……」

すぐに逃げられた。

こ、これは涙じやなくて心の汗だからね！

夜、ハクオロはギシギシという物音で目が覚めた。
扉の音？誰だろ？

「…………あ…………」

話声が…トウスクル？一体誰と話してるんだろう？
ハクオロはそつと窓から外を覗くが、誰もいない。
あれ？でも確かに…もう戻つたのかな？

ハクオロがエルルウとアルルウにトウスクル3人の寝室を覗くが、
トウスクルはいなかつた。

こんな夜中に外出…まあ、自分の意思で出たみたいだし、トウスクルなら心配する年でもないか

「ふわあ」

ハクオロは欠伸をすると寝床に戻つて行つた。

「つむ、そしてそこに『ケスパウ』と『アマム・ウチュ』を加える

んじや」

「はい」

トウスクルの言葉に真剣な面持ちで頷き作業をするエルルウ。壺から乾いた何かを摘み中央の窪んだ平たい石に置き、別の石ですり潰す。

これが薬の調合か…何が何か分からぬ。いやこれは決して僕がバカなんじゃなくてだね

「あ、ハクオロさつ！」

ハクオロに気づき顔を上げたエルルウに容赦なくトウスクルがエルルウの手を叩いた。

「よそ見をするでないよ！」

そしてギロリとハクオロを睨みつける。

「ハクオロ、邪魔をするでないよ！」

「う、ごめん」

これだよ。この迫力だよ。僕が無意識に敬語を使った原因は「ここからが肝心じゃ。ひとつまみ『ネン』を加える

「えつと、このくらい？」

またトウスクルの手がエルルウの手へと落ちる

「うつ」

「そんなに入れて、殺す氣かえ！？」

「で、でも、摘んだだけでそんな細かくなんて…そりやあこの少しで死にいたつたりしちゃうのは分かるけど、どうして薬サジや秤を使っちゃ駄目なの？」

「薬草は質が変わりやすいからね。田によつて使う量も変わる。じやからそれを指先で判断するんじゃ。第一、そんなのんびり量つておつたら間に合うものも間に合わんて」

エルルウはうつ向いて悲しそうにため息をばく。

「…やっぱり、私にはそんな、おばあちゃんみたいなことできないよ」

「ホホホ、簡単にできるわけなかり」

「え？」

ぱっと顔をあげたエルルウにトウスクルが笑いかける

「ワシとて、できるみづくなるまで散々叱られたもんじゃよ」

「おばあちゃんが？」

「ああ、優しい姉様じゅうたが、ほん時や悪戯した時ばかりは怖くての。」いつも悪口言つたら、すつこを振り回して凄い形相で追いかけてきたもんわ」

「ふ…あははは、おばあちゃんが？」

「…そう、肩の力を抜いてな。焦らんでもええ、ゆつべつ少しずつ、体で感じinんじゅ」

「あ…うん…」

「うむ。では気を取り直してビシビシやるぞよ」

「……言つてることが違う

「それはそれ、これはこれじゅ」

「う~」

「これは邪魔しないほうがいいな。わっせと行いつ

ん? 何か今、誰か僕のこと見てた?

視線を感じハクオロは振り向いたが誰も見当たらない。
おかしいなあ

「アンちゃん、今度はこっちに水路をつくるのかい?」

「あ、テオロ、そだよ。やうしたうつけ側だけじゃなくて向いつ
にも煙がつくれるからね」

「よーし、おーいてめえらー! 今度はこっちだつてよー!」

「おー!」

みんな頑張ってるなあ。よし、僕も頑張りつー集中集中!

最近はハクオロにも体力がつき烟仕事についていけるようになり、意氣揚々と鍬を担いで駆け出した。まあ元々遊びごとにに関してはあり余る体力を發揮していたのだが、どういう仕組みか働くとなるとすぐ疲れるのがハクオロだった

「……」

少し離れた場所からアルルウがハクオロを見ていたが、ハクオロは気づかなかつた

「ふいー、疲れたあ」

「ハクオロさん、どうぞ」

エルルウがタオルを渡してくれたので汗を拭う。

「みなさんもどうぞ」

エルルウたちタオルを配る係とソボクの「飯を配る係とに別れて昼食の用意が着々と進む。

「じゃあ昼飯にすつか

「つてあら？ アルルウは？」

「そこで遊んでるよ」

アルルウは以前の様子が嘘のように縁でうめつくされている畠の隅をほじくっている。

「ちょっ、アルルウ！ 悪戯しちゃ駄目でしじう」

慌ててアルルウに近寄り止めるエルルウにテオロは苦笑しながら鍔を構える

「まあまあ、モロロが育つてか気になるんだろ。ちょっと掘つてみ

つか

え

モロロ芋を傷つけないように丁寧にテオロが土を掘ると、まだ小ぶりながらもしっかりとモロロ芋が育つていた

「へへん、どうでい。見直したか？」

「なに言つてんだい。ハクオロの手柄だらう」

「ング。ちょっとくらい花あ持たせてくれよ」

「あはは、でも僕は何もしてないよ。みんなが頑張つてくれたからできたんだ」

本当に、僕最初はすぐばててたし、言つだけだつたのに枯れた畠を潤すための大変な労働をみんな凄く頑張つてた。だからこうやってできたんだ。なんだか…感無量だなあ

「アンちゃん！」

ハクオロが寝ながら顔を洗つているとテオロが急ぎやつてきて肩を掴んだ

「ん…エルルウ、おはよう」

「なに寝ぼけてんでえ！俺だ俺！ちょっと着てくれよー！」

「俺？一人称変えたんだね。今日の朝ごはんは大盛りにしてね」「起きろーーーーー！」

叫びながらテオロがハクオロの腹に渾身の拳を叩き込む

「ぐほつ…」ほ…え、テオロ？どうしたの、あれ？エルルウは？朝ごはんは？」

あれ？何で外？ていうか、お腹めちゃめちゃ痛いんだけど…？一体何が起こったんだ？

「んなの後だ！行くぞ」

「え、え？何処に？てか何で僕お腹痛いの？」

「煙だ！」

「お腹痛いのは？」

「いいから早く…」

「う、うん」

よく分からないがハクオロはテオロのただ事でない様子から気を引き締めて全速力で畠に向かつた。ちなみにハクオロは足がとても早いのでテオロは自然に置き去りになつた。

「ま、待てよアンちゃん！」

「え！な…何これ！？」

ハクオロが畠に着くとおよそ半分近くが荒らされ、無惨な姿になつていた

そんな…みんなで、あんなに頑張ったのに！

「ハクオロ、やつと着たのかい」

現れたソポクにハクオロはぼつぼつと落ちてこむモロモロ芋を拾い詰め寄る。

「ソポクー！」、これは何処のどこの仕業なのさー！こんな…モロモロに噛みあとまで付けて捨てるなんて……ん？ 噛みあと…」

自分で言つてからハクオロはモロモロ芋を見る。生で土のついたモロモロ芋にははつきりとかじつたあとがある

「げ…原始人？」

「何言つてんだい。犯人はあいつひれ」

「え…」

指された方を見ると畠の脇の森に続く木々の上に人ほどの大さきをした猿のような生き物がいた

「な、何あれ？」

「何つてキママウさ。森に住む食い意地の悪いヤツでね。時々森を食い荒らすから困つてるんだけど…でもまさかこんな所までくるなんてねえ」

話しているとエルルウやテオロとみんな集まってきた

「そんな…酷い…」

「エルルウ。にテオロ、遅かつたね」

「アンちゃんが早すぎるんだつづーの。つてーあいつらまだいやがつたのか！」

テオロが畠の隅で固まっていたキママアをめざとく見つけて追いかけた

「ちょっとあんた！」

キママアはさつさと木に登つてしまつが直もテオロは叫びながら拳

を振り回すが、当然効果はなく、それどころか食べかけのモロ口芋や終には自分たちでひねりだした汚物まで投げてきた

「うえっ、ペペッ…うう、ひでえ田にあつたぜ」

肩を落としてハクオロたちの元に帰ってきたテオロにソボクは鼻をつまむ

「キママアに追いつくわけないだろ。まあハクオロならどうか知らないけども。ちょっと、臭いから早く体を洗つといで」

「そんな言い方あねえだろ。俺あいつらをおっぱらつたんだぜ。なあエルルウ、アルルウ」

「う…」

エルルウは後づさり、アルルウは逃走した。テオロは嘆かわしいとばかりにため息をついて今度はハクオロを見る

「つたく、女共は冷たいぜ。なあアンちゃん」

「いや、臭いものは臭いから」

ハクオロにも突き放されテオロはトボトボと体を洗いに行つた

「……」

「エルルウ？」

テオロが行つても元気のないエルルウにハクオロが声をかけると、誰に言うでもなくエルルウは口を開く

「酷い…みんなが、せつかくみんなが頑張ったのに…。あと、もうちょっとだったのに…」

「エルルウ…」

ソボクがエルルウを抱きしめ、ハクオロも何とか元気づけようと努めて明るい声を出す

「大丈夫だよ！ほら、まだ半分は無事だし。みんなの頑張りは無駄なんかじゃない。まだこれからだよ」

「ハクオロの言う通りさ。エルルウ、まだ終わってないよ。辺境の女はね、絶対に諦めちゃいけないの。諦めたらそこで終わりだから」「はい！」

ああ、よかつた泣かなくて。僕が泣くならいいけど、泣かれるのは

嫌だ。楽しいならいいけど、やっぱりみんな笑わないとね

だって、涙は悲しい。喜びの涙とは違う。悲しみの涙は、辛すぎる。

もう…誰も泣かしたくない

「そりそり、もっと笑ってよエルルウ。困った顔より怒った顔より、笑ってる方が可愛いよ」

「え…ええ…？」

顔を真っ赤にするエルルウにソポクは嬉しそうに豪快に笑った

「あはは！言つじやないかハクオロ、こりゃうちの宿六と一緒にしちゃ悪かつたね」

「え…まあ、僕老け顔じやないしね」

「いやあ…そり言つ意味じやないけど…。とにかくエルルウ、気を落とすんじやないよ」

ソポクは呆れた顔をしてからすぐに気を取り直してエルルウの肩を軽く叩く

「うん、ありがとうござります二人共」

「つてあれ？誰も、つて…僕はいったい誰を泣かしたんだろう？この間のエルルウのは違うし。でも誰か、遠い昔に、とても大切な誰かを泣かしてしまった気がする

ハクオロは少し考えたが、やはり何も思い出せなかつたまあ、そのうち思い出すでしょ。それより、エルルウたちを安心させないとね

半分もやられたんだ。次にやられたら、本当に終わりだ

#ヤマウタ選択、そして報酬（前書き）

戦闘シーンは筆者の文才があまりにならないので割愛します。
文句は心中にしまっておいてください。

キママウ退治、そして報酬

「柵を作ったらいどうだ？」

「身軽なあいつらの入れないような柵なんてできるかあ？」

夜、村の人間が集まつてキママウについて話し合つことになった。拳手をして出された意見だが、テオロが首を横に振つて却下した。

「じゃあ、罠はどう？」

「一匹一匹捕まえたって意味ねえぜ」

「それに子供がかかつたら? やっぱり、交代で見張るしか…」

「でもあいつらはずる賢い…俺らの隙をついてくるだろくな」

「やっぱ一網打尽にするしかねえか」

「どうやつて?」

「そ、それはだなあ……そ、そうだ! アンちゃん!」

「ん?」

「頼むぜアンちゃん。びしつとちゃんとしたの考えてくれ」

「ああ、そうだねえ。ハクオロなら適任だね」

「え…ええー? でも僕…よ、よそ者じやん?」

「なあに言つてんди。もう十分アンちゃんはこの村の住人だっての」

「そうそう」

「ハクオロは普段子供っぽくせに俺よりずっと賢いし足も早いから、こざと言つとき頼りになるよな」

足の早さ関係なさすぎ! -

「そうだね。ねえみんな、ハクオロが考える案ならいいんじゃない?」

何故か満場一致で決まりそうな雰囲気に慌ててハクオロは立ち上がり抗議する

「待つたあーみんな考えるの面倒だからつて人に押し付けようとしてるでしょー」

「ま…まあまあ、アンちゃんだから安心して任せられんだよ。なあみんな？」

頷く一同にハクオロは唸る

このままじやなしくすしだ。別に構わないし信頼されるのは嬉しいけど…なんかズルイ！

「つたく、男がぐずぐず言うんじゃないよ。ほらエルルウ、アルルウ、言つておあげ」

ソボクがため息をつきながら一人を促す

「えつと、頑張つてください」

「…ばれ~」

「ほら、女にここまで言われてツッパねる氣かい？」

どこまで！？まあ、良いけどさ。どつせ誰かがやるんだから、僕がやつてもいいよね

「分かつたよ分かつた。じゃあこういうのは？」

とりあえずハクオロはみんなが話している間に考えておいた単純だが確実に効果が期待できそうな案を発表した。

「なんだ。ちゃんと考えてたんじやないか。出し惜しみするんじやないよ。みんなー、今の聞いたかい？」

「おうよ

「反対意見はあるかい？」

「いいんじやね」

「うん。賛成」

さつそく明日から準備をすることでのみんな帰つて言ったはあ、まあ頑張ろつ。別に正義の味方や賢者を語るわけじゃないけど、みんなが笑顔でいられるよひにこた

ハクオロが考えた案はこうだ

まず二班に別れる。片方は『追い込み班』。もう片方はハクオロた

ちの『始末班』だ

まず追い込み班が隠れてキママウを待ち伏せ、現れた所で大声をあげながら鐘をならし、包囲していく。こちらの班に殆どの村人を使つてある。

包囲の時点ではざと一ヶ所だけ人の手薄な場所をつくつておく。そうすれば、包囲網を縮めればキママウは間違いなくそこから逃げる。しかし逃げるとそこには幾重にも仕掛けられた罠が待つている。という寸法だ

しかしさらにその罠を抜けてくるのもでるだろつ。それを始末するのが始末班だ。撃退班は人数が少ないが大丈夫だろう

ただ問題は

「今日で三日目か…なかなか来ねえなあ」

キママウが現れるまで、待ち惚けだ

「もうすぐだつて…多分」

「ところでアンちゃん、得物はどうした?」

「あ、それならトウスクルがこれを…」

ハクオロは腰にさしていた50センチ強の扇子を出す

「あ?そりや扇子じゃねえか。じゃなくて武器だよ武器

「いや、結構工グいよ」

テオロに渡すと顔色を変えた

「重い…鉄製か」

「それにこうすると…」

テオロから返してもらった扇子をハクオロは実践して見せた。ハク

オロが扇子を振るつと扇子が一瞬牙を剥いた

「う…仕込みかよ。しかし何だつて村長がそんなもんを…」

「さあ?テオロの方が詳しいんじゃない?」

「あの人は謎が多くてなあ」

「ふうん」

あとこれは言つてないけど、この鉄扇子、仕込み刃部分に溝があつて液体が流し込めるようになつてゐる。刃に流す液体と言えば……そ

れに、『丁寧に黒ずんだ染みまであるし、やつぱり今までにも…

「ハクオロさん！」

「あ、エルルウ」

エルルウが荷物を抱えて来たのでハクオロは扇子を腰にさした
「差し入れです」

「ありがとう」

「あと、これは姉さんからテオロさん！」

エルルウはテオロに紐にぶら下がった徳利を渡す

「気がきいてるな……ん？」

『機嫌でテオロは徳利の中を飲むがすぐに眉を寄せた

「ただの茶じやねえか」

「あは。もしそう言つたら、『何だと思つたの』の宿六。こんな時
くらこ真面目に仕事しろ』って伝言です」

「あははは

「ング。笑つてゐのも今のうちだぜ。アンちゃんもそのうち味わ
う。あれでも昔は、エルルウみたいに純朴な女の子だつたんだがな
あ。それがみんな肝つ玉力アちゃんに…。どうも辺境の女は年くう
度に肝つ玉が太くなりあ。エルルウもあと数年したらいてつ！何し
やがるエルルウ！」

エルルウに殴られ反射的に睨むテオロだが

「む！」

とエルルウに睨まれすぐに目をそらした

「だ…ダハハハ…」

カンカンカンッ！鐘の音がなり響く

「！ 合図だ！」

罠が作動する音に獣の断末魔の叫びが段々とハクオロたちに近づいてくる

「エルルウ、下がつてて」

「は、はい」

ハクオロもテオロも武器を構える。一匹、一匹とキママウが現れる

「アンちゃん、ちょっとあくねえか！」

「そー、農が甘かつたか！」

「テオロ、手負いだからって氣をぬくなよー何をするか分からな
からなー！」

「おうー！」

「くつ」

襲いかかる爪を弾き置んだ鉄扇を叩きつける

「さやうー…つ、フーッ！」

「しつけえなー！」

「テオロー…こいつら弱いんじゃないのー…？」

「んなこと言つてねえ！そもそもこいつらすべ逃げるから戦つたこ
となんかねえ！」

なにいー…?しまつたあーもつと人を回せばよかつた…!

「あ、あのー私も手伝います！手当てなりであります…」

嫌だ！危ない田にはあわせたくない！だけど…

ハクオロは苦戦しながら同じく苦戦しているテオロと視線を一瞬合
わせた

「つ……絶対に僕らから離れないでよー」
「はこつー！」

「はあ…終わったあ

「ぜえつ…何とか、なつたな」

危なかつた…エルルウがいなかつたら止血もできないし…危なかつ
たかも…

「あ、あのー」めんなさいーその、出しゃばったことして…

頭を下げるエルルウにハクオロは困って頭をかく

「いや… その助かったよ。ありがと！」

「え…あ」

自然とハクオロの手は自分とそつ変わらない位置のエルルウの頭を撫でていた

「でも、危ないから、もうしないで」

「…………は、はい」

「にしても戦つてる時のアンちゃんは迫力あつたなあ」

「そう?」

「ああ、畠の指示とは違つてこいつ…勢いがあるし、自然と気がしまるというか…年下と思えねえ迫力だつたぜ」

「あ、ありがとう。でも偉そだつたよねごめん」

「なあに、アンちゃんは指揮者なんだ。それくらいがいいさ」

テオロはそう言つていつもの氣さくな笑みを浮かべ、ハクオロの頭を乱暴に混ぜた。しばらく3人で頭を撫であつといつ不思議な時間になつっていた

「ホラ見てくださいーモロロがこんなに！」

エルルウがはしゃいでさう声。みんなが予想以上の収穫量に笑つていた

キママウの時はどうなるかと迷つたけど、これでみんな飢えることはなくなるね

「ダハハハ。やつたなアンちゃん！本当に…やつちまつたな。カア

ちゃん、後は頼んだぜ」

「あいよ。まあみんな！始めるよー！」

「はい！」

作業が男から女に変わるが一人分からないハクオロがエルルウに尋ねる

「あ、これからモロ口を焼くんです」

「焼く？へえ、 穫れたてだから美味しいんだろうねえ」「え？」

「ん？」

「…ふふ。違いますよ。食べるんじゃなくて、保存です。モロ口は軽く火で焙るととっても口持ちするんです。だから倉にいれる前に一度焼くんですよ」

「へえ」

「でも穫れたてはやつぱり美味しいですよ。アルルウ、今日はこれを使おつか？」

「きやつほう」

分かりやすく喜ぶアルルウにエルルウは微笑む
「楽しみにしててくださいね、行こうアルルウ」「ん」

頷き、しかしアルルウはハクオロの顔を見上げる

「？ アルルウ？」

「……」

アルルウは無言で、しかししつかりと微笑んだ
「これが一番の報酬、かな？」

#キマツカ遍治、そして聖教（後編）

「こんな感じで一いつと繋つながります。
それによければ、これがからむおなじみへだせること。

おこへじやん（前書き）

前書きが面倒になつてきました
「うたわれるもの」の二次創作です
苦情は受け付けてませんが純粋な評価なら大歓迎です

おとづりやん

「さて…今日も頑張る…ん?」

何処からか激しい足音が聞こえ、音の方を見ると一足歩行の大きな爬虫類が現れ、乗っていた男がありました。ハクオロと年はそう変わらないだろう

「おいてめえ、そこのへんな仮面つけたてめえだ」

「…僕?」

「見かけねえ顔だな。誰だ?」

「君こそ誰さ?」

「なに?俺様を知らねえだと?仕方ねえ、本当は俺様が名乗るなんて有り得ねえが俺様は寛大だ。俺様はヌワンギ!この國の皇オウルオの弟でここを統治する藩主の息子だ!!」

「…はあ」

「恐怖のあまり声もでねえか」

いや、むしろよくそこまで堂々と虎の威をかる狐をできるなあと感心してたよ

「ハクオロさーん、あ…ヌワンギ…」

エルルウはヌワンギに気づくと何処か表情を硬くした

「ようエルルウ」

「…いつ、来たの?」

「今だ。お前に早く会いたくて飛ばして來たんだ」

ヌワンギが笑つて隣の爬虫類を叩きながら囁うとエルルウはほっとしたように微笑んだ

「ふふ、じゃあそのウマ(ウォプタル)、ヌワンギの?」

「おう。氣性が荒くて俺様にしか乗りこなせねえんだぜ」

言いながらペしペしウマを叩いているとウマはガプリとヌワンギの手を噛んだ

「こぎーつ!」

「だ、大丈夫、ヌワングギ？」

「へ、へへ…じゃれてんだよ。可愛いやつだぜ」

口から出てきた真っ赤な手で軽口を叩くヌワングギに、エルルウはくすくす笑う

なんか…そんな悪い人じやないのかなあ？でも最初のエルルウの態度が気になるし…

「ヌワングギ、今日は何しにきたの？」

「この前言つたろ？次はお前を迎えるつてな」

「え…本氣だつたの？」

「当たり前だ。ほら、行こうぜ。俺様は次期皇になる男だ。こんなしけた村じや考えられないくらい贅沢させてやるぜ」

「…私、いけないよ」

「は？な、何でだよ！」

「…」

エルルウは助けを求めてかハクオロに視線を送るが、ヌワングギは何を勘違いしたか眉根に厳しく皺をよせる

「何でそいつを見るんだよ！だいたいなんだよこの怪しいのは！何するか分かんねえぜ。早く追い出せ！」

「ヌワングギ！そんなこと言わないで！一緒に住んで、いい人だつて分かってるんだから！」

「は？…一緒に、住んでるだあ！？なつ、もうやつちまつたのか！？やつちまつたのかあ！…？」

肩を掴んで叫ぶヌワングギにエルルウは真っ赤な顔で尻尾をさかだてる
「なつ…へ、変なこと言わないでヌワングギ！ただハクオロさんは、患者さんといふか…」

「そ、そうだよな。へへ。よし、じゃあエルルウ、行こうぜ」

機嫌よくエルルウの手を引くヌワングギだがエルルウは浮かない顔と言つか明らかに嫌がっている

「ヌワングギ、やめなよ。エルルウが嫌がってるのが分からなかな

？」

「はあ？俺様はエルルウのためを思つてだな…」

「じゃあ尚更！… エルルウにそんな顔をさせるな。友達なら嫌がることするなよ」

「つ…うるせえ！エルルウは俺様の女だ！テメエはエルルウの何なんだ！」

「恩人であり家族だよ。だから君がいくら恋人でも、エルルウが嫌がるなら行かせるわけには行かない」

「ち、違います！恋人じゃありません！ただの幼なじみです！」

「おさ…っ！？テメエが…テメエがエルルウをたぶらかしたんだな！だからエルルウが…っこのオ…！」

ヌワングギはハクオロの顔面に向けて思いきり拳を放った
ガン！！

鈍い音がしてハクオロの視界は一瞬暗くなる
ん？何か鈍い衝撃が…あつた？えつと…痛くはないけど、殴られた
のかな？

ヌワングギは手を押さえてゴロゴロと地面を転がつていた
「テメエッ…堅いなら堅いつて言えよ…」

「ヌワングギ大丈夫？」

「へ…このくらい、何でもねえ、ぜ」「
でも…かつてない方向に腕が…」

ヌワングギの顔は真っ青で利腕はぶらぶらと力無く揺れている
「騒がしいね。おやヌワングギかえ。ずいぶん久しぶりじゃな。お前
がここを出でていって以来かい」

トウスクルが現れると腕の怪我でさえ虚勢をはつていたヌワングギが
怯んだ

「う…」

「え？ちょっと今まで週に一度は…おばあちゃんには会わなかつた
の？」

「エルルウ！」

余計なことを言つなどばかりに怒鳴るヌワングギだがトウスクルに睨

まれ、まるで蛇に睨まれた蛙だ

「じゃあ何か？一度も顔を見せんとほどうこう見かえ？」

「だ、黙れババア！」

「……本気で言つたのかい？」

「ヒツ！いや…いまのは…」

「毎日病弱なあの子に変わり世話をしたワシが…ヴァ・ヴァ・ア?
「きゅ、急用を思い出した！じゃあな！あ、テメエ…エルルウは俺
様の女だ！手を出すなよ！」

ヌワンギはウマに乗るがウマは草を食べて動こうとしない。ヌワン
ギはイライラとウマを殴る

「この！走れ！」

怒ったのかウマはヌワンギを振り落とし、地面のソレを踏んで主人
の命令通りに走つて行つた

「ま、待てよ！」

ヌワンギは立ち上がるとウマを走つて追い掛けた

「……あ…」

「ヌワンギとエルルウは兄妹みたいに育つっていたから。複雑なん
じやよ」

「幼なじみなんだつけ？」

「元服^{ボボロ}を迎える前に跡取りが居なくなつたと連れて行かれてね」

元服と言えば部族によって異なるけど11～17でする成人の儀式
か。……僕ギリギリか。てゆうかエルルウって何歳？

エルルウの態度から偉そうだけど嫌なやつじゃなかつたんだろうけ
ど、ずいぶん贅沢や権力にこだわつてゐるみたいだ

二人の悲しそうな表情にハクオロは昔はそうじやなかつたのかと去
つて行つた彼に思いをはせた

「アルルウ！待ちなさいー！」

どたばたと言う足音にハクオロが居間に顔を出すとアルルウとぶつかりそうになり互いに止まる

「つと…アルルウ」

「んつ…」

「捕まえた。アルルウ！大人しくしてなさい！」

エルルウは嫌がるアルルウを捕まえると顔や手に何か薬のようなもの塗りたくる

「エルルウ？」

「あ、は、ハクオロさん！？いつからそこに…ってアルルウ！」
エルルウがハクオロに気をとられた隙にアルルウは外へと逃げてしまった。

「ああもう！」

「アルルウがどうかしたの？」

「あ…あの子、また一人でハチの巣をとつてきたんです。危ないから駄目って言つてるのに。はちみつが大好きで言うこと聞かないし、薬を塗るのも嫌がるし困つてたんです」

「そつなんだ。アルルウがねえ…それにしてもエルルウつてさ」

「はい？」

「結構お転婆だよね

「……うう…」

ハクオロが外に出ると探していたわけでもないがアルルウが視界にはいった

「たーたたたらら、たらららー、たらー、きやつほう」

尻尾をぶんぶん振りながらアルルウは木陰に座る。ハクオロがゆっくり近寄り背後から覗くと、アルルウは嬉しそうに半透明の液体がたっぷり染みこんだ土色の塊 大きなハチの巣を籠から取り出していた

うわあ。凄い大きさ。これはハチの数も凄いんだろうな。エルルウも心配するはずだよ

「アルルウ」

「！？」

アルルウはびくりと振り向き、エルルウでなくハクオロだと分かつても警戒心バリバリだった

「あ～、アルルウ、凄く大きなハチの巣だね。どうやってとったの？」

「……」

沈黙が苦しい…

しばらく見つめあつていたが、やがてアルルウは口を開いた
「…フクロを被るの。巣に近づいてケムリでいぶして、とのの」

答えてくれた！？

「そ、うなんだ。でも刺されちゃうでしょ？」

アルルウは「クリと頷く

「それでも頑張るなんて…アルルウは本当にはちみつが好きなんだ

ね

「ん

アルルウは頷くと同時にさつきまで今にも逃げそうな張りつめていた気配をけした。

そしてアルルウは蜜のしたたるハチの巣をちぎりハクオロに突きつけた

「え？ くれるの？」

「ん

「ありがとう」

受け取つて見るとうにゅうにゅと幼虫が「じめいていのう…これつてもしかして…まるかじりですか？」

アルルウはじ一とハクオロを見つめている

「いただきます」

ハクオロは覚悟を決めてかぶりついた

「ん！…美味しい」

濃厚で複雑な甘酸っぱさ、もう一口食べたくなる癖になる味だ

「ん！」

アルルウはにっこり笑って食べ始める。ハクオロは隣に座つてまたはちの巣を口に運ぶ

「おひひーへ（美味しいね）」

アルルウはモゴモゴと口を動かしながら言い、ハクオロもにっこり笑つて同意する

「うん。アルルウが好きなのも分かる。つてか、僕も好きになつちやつた」

「うん」

ああ…まさかアルルウとこんな穏やかな時を過ごせるとは…それに始めてアルルウとともに会話をしたよ

「アルルウ、もうこんなとこに…あれ？いつの間にハクオロさんと仲良くなつたの？」

エルルウが来て尋ねるとアルルウは食べながら答える

「はつひ（さつき）」

「そう。良かつたね」

「ん」

エルルウはアルルウに笑いかけてからハクオロに耳打ちする

「ありがとうございます。あの子、本当は仲良くなつたんだす。でもそういうのに臆病だから。ふふ…アルルウ、美味しいそうね。私にも一口頂戴」

「イヤ」

「…そ、そんなこと言わないで、ね？」

「イヤ」

アルルウは非情な狩人だった

「…」

「アルルウ、いっぱいあるんだし、ちょっとくらい良いんじゃない

？」

「ん。はい、お姉ちゃん」

「え…？」

渡され受け取りながらもアルルウはポカンとアルルウとハクオロを順番に見る

「なんで、ハクオロさんが言つてくれるの？」

「ん~、なんでも」

「……うう…」

「あははは…」

多分、怒られてばかりだからじゃないかな？勿論エルルウがアルルウのこと考へてるのは分かるし、本当は一人は凄い仲良しなんだけどね

「アルルウ？」

「つ……」

ハクオロが声をかけるがアルルウは動かない。ハクオロが部屋で今後の烟に関する計画などについて書き物をしていると、アルルウが無言で部屋にきて隠れたのだ

素早い動きだつたが、侵入したのは明らかで、犯人も明らかだ。アルルウは棚に隠れてるつもりなのが尻尾が見えている

「アルルウ、どうしたの？出でおいでよ」

アルルウは姿を見せると小さく何かを口にする

「…と…さん…」

「え？何？よく聞こえないよ」

「…おと…さん」

「おとさん？…あ！「お父さん」？そうか…」

「アルルウ、僕はハクオロだけど、君のお父さんじゃない」

「つ」

泣きそうに顔を歪めるアルルウにハクオロは座つたまま動かず、極

めて優しく言葉を続ける

「でも、家族にはなれる。父親は無理かも知れない。でも、兄ならなれる。アルルウが寂しいなら抱きしめる。怖いことがあるなら守る。父親にはなれないけど、アルルウが望むなら傍にいるよ」「あ、に…？」

「うん」

「おに～ちゃん？」

「うん。アルルウがそう望むなら、僕はアルルウの兄だ。まあ呼びたいなら『お父さん』でもいいけど、でも僕はせつぱり父親には…」「違う。おと～さんじゃない」

「うん。違うね」

「でも、おに～ちゃん？」

「うん」

にっこり微笑むと、アルルウはだつとハクオロの胸に抱きついた

「おに～ちゃん！おに～ちゃんおに～ちゃんおに～ちゃん…！」

「なに？ アルルウ」

「おに～ちゃん！」

抱きとめて柔らかい髪の毛を撫でてあげるとハクオロを抱きしめる力を強くしてアルルウは嬉しそうに頬をほんのり赤くして微笑む

「おに～ちゃん…」

「ハクオロさん、アルルウ何処に行つ…ってアルルウ！何しててるの

！？」

「おに～ちゃん～」

「お兄ちゃん？」

「まあ、そういうこと。父親は無理だけじゃ」

「んふ～。おに～ちゃん、いい匂い…」

「あ…そう、ですか。でもアルルウ、ハクオロさんの迷惑になるから、離れなさい！」

エルルウはアルルウの肩を掴んでハクオロからはがそつとするが、アルルウはぎゅっとより強くハクオロに抱きつく

「ヤツ」

「離れなさ～い～！」

「まあまあ。いいじやん」

「でも……」

「それに、兄ならこういつつ時は抱きしめてあげるんじゃないかな、
つて思うから」

「…もう、知りません…」

エルルウは怒りながらうずくまつと部屋から出でていった

「…なんで怒つたんだ？」

「ん～？」

「何でもない。アルルウはいい子だね」

「おに～ちゃん…」

パタパタと揺れる尻尾が床を叩く音だけが、穏やかな時を刻んでいた

夜、またしても物音で目が覚めた。外からはトゥスクルの話声

「……」

夜中に迷惑だなあ。何を考えてるんだか

そして気配は消えた

まあこの前も帰ってきたし寝よ寝よ

「……いてください」

「……ん？ エルルウ？」

ハクオロが寝ながら起きるとエルルウが泣いていた

「つくつくう」

「泣いてるの？」

「おばあちゃんが……黒ずくめの格好した人たちに……連れていかれちゃったんです……追い掛けたんですけど、すぐ見えなくなつて」

「大丈夫大丈夫、この前も同じことあって出ていったから。じゃあアルルウ、いい子にしてるんだよ。僕は山へ芝狩りに行くからしかしハクオロはめちゃめちゃ寝起きが悪いというかむしろ神がかつているので、目を開けてエルルウが泣いてると認識したのが寝ている頭なら、しっかり会話をしながら寝ていた

「起きてください！」

ハクオロが立ち上がり枕を抱えて外に行こうとするのでエルルウは足を掴んだ。ハクオロはバタンと顔から床に倒れた

「いつてくつ。痛た……いつたい何が……あれ？ エルルウ？ ビうして？」

「あれ？ 夜？」

おかしいな。アルルウにいつてきますしたはずなのに。夢か。って

アルルウ泣いてる！？

「ひっく…おばあちゃんが…連れていかれちゃったんです…」

「トウスクル？あ、大丈夫だよ。前にも同じことが…」

「さっきも聞きましたけど…でも、おばあちゃんが私たちに黙つて

行っちゃうなんて変ですぅ」

誰から聞いたんだろ？まあいいや。にしてもトウスクル、もつとうまく出ていってよね

「分かったよエルルウ。僕がウマで追い掛けるから、だから泣かないで」

「…ハクオロさん…」

「ハアッ！」

確か気配はこっちで消えたけど、ずいぶん奥に来ちゃったなあ。もう追いついてもいいはずなんだけど

何か糸を引っ張ったような音がした気がしてん？とハクオロが振り向くと人が襲いかかってきていた。ウマから飛び下りたが、その人影はハクオロの背後から喉元に刃をつけた

「うつ…」

「動けばこのまま首は飛ぶぞ。何故俺たちの後を尾けてきた」

尾ける？トウスクルさんを連れてつた人？でも何で刃を？そうしなければならない理由…まさか！？…まずいな。とにかく突破だ！ハクオロはあらん限りの力で男の腕を握り、地面を蹴り男の鼻に頭をぶつけるようにして背後の木に叩きつけようとした

「な！？」

しかし男は身軽な動きで軽々とハクオロの頭の上を通り、同時に刃がハクオロを襲う

「つ…」

慌てて腕を離したが、あと少し遅ければ確実にハクオロの手首は切り落とされただろう

「ちつ」

男はハクオロの正面に着地。しかし外套の留め金が先ほど衝撃で弾け、男の姿が露になる

「見たな…」

現れたのは瘦せすぎな、無駄のない絞られた体の鋭い目つきの若い男だった。その目はまるで抜身のようにギラギラしていた

「投降しろ。さもなくば…」

ギリギリとさっきも聞いた音がして見れば、一人ほど弓兵がいた
「死んでもらう!」

「コラッ!」

トウスクルが現れた途端、男は目に見えて落ち着きを無くした。

「人様の命を奪うとは何事じゃ!」

「いや…これはその、脅しです。本気じやありません」

さっきまでの剣幕が嘘のようにトウスクルにペコペコしだす男にハクオロは呆気にとられてしまつ

「…本当かえ?」

「はい!」

「まあよい。すまんかつたねお前だ…おや、ハクオロじやないか。どうしたんだい?」

「それはこっちのセリフだよ」

ハクオロはため息をついた

「そうか…エルルウがのう」

「で?トウスクルは?」

「診察じや。夜なのは…まあ色々事情があつてのう」

「はあ」

まあやつぱりといふか危険はないみたいだし、帰ろうつ

「さて、ワシはこの者たちと行かねばならん…そうじやなお前さ

んも来るがええ」

「は？」

「なつ！そんな素性の知れない男を連れて行くなんて」

「この男は家族も同然。それを疑うのかえ？」

「く…分かりました。トウスクル様がそういうなら……オボロだ。

あんたは？名前くらいあるだろう？」

渋々頷いたオボロはハクオロをジロジロ見ながらそう言つた

「ハクオロだよ」

ていうか行くなんて一言も言つてないんですけど…まあいいか

「お前巫山戯てるのか？」

「巫山戯とりやせんよ。それよりわいつせとせんか。夜が明けちまう

よ」

「は、はい！グラア」

「はい。失礼します」

呼ばれたさつきを構えていた少年の一人がハクオロに田隠しをした
「少しの間の辛抱です。足元に気をつけてください」

連れられるままハクオロは歩か続けた。時間感覚すら麻痺するほど
歩かされると気配が変わった

「開門！」

オボロの叫びと共に大げさな音が聞こえ、建物に入ったのを感じ度
しる

「トウスクル様の知り合いでもここからは通すわけにいかない。待
つてる」

「つて田隠しのまま？」

「何をしどる。早くせえ」

「はい」

「ハクオロ、お前さんもじや」

「しかし」

「この男はワシの家族と言つたじやね。ワシを怒らす氣かえ？」

「い、いえ」

「だいたいお前は過保護すぎる。」そのままあの子を籠の中へ閉じ込めておく氣かえ？」

「籠つて…俺は別に…」

「じゃつたら早くせんか。安心せい。この男は妙な面はしとるが害はない」

「…わ、分かりました」

ドアが開く音がして、女の子の声が聞こえたと思つとハクオロの目隠しははずされた

「ユズハ、起きてたのか」

「はい、お兄様。今日はとつても氣分がいいから…」

妹？とつても可愛いけど…なんていうか儂い、散りそうな花を見る氣分だ

「あ、トウスクル様、来てくださったんですね。…後ろの方は？トウスクル様の温かな薬草の香りとは違つ…大きな、とつても大きな土のような香り…」

ベッドに寝たまま焦点が合わない様子の少女にトウスクルは笑いながらハクオロに目配せをする

もしかして、目が？

「あ、僕のことかな？」

少女はハクオロの存在を確認すると起き上がろうとするが、オボロが制する

「やつと熱が引いたんだ。大人しくしているんだ」

「はい…お客様、こんな姿で…」めんなさい。私…ユズハと言います。どうか、よろしくお願ひします…」

「僕はハクオロ。トウスクルの居候だよ。」ひきり口をよじく

「はい…」

「どれ」

トウスクルはユズハの額や胸に手を置きながら目を閉じ、息を潜めた
「ふむ…少し火神ヒムカミがむずかつとるようじやか。うむ、中々ええ調子
じやな。このまま安定すれば、じきに良くなるじやうつて」

「本当にですか！？」「うむ」

「つ…良かつたな！ユズハ！」

「はい」

「さて、ワシはオボロに話があるから席を外す。ハクオロ、ユズハの相手をしておくれ」

「あ、うん」

「なつ！ちょっとトウスクル様！？」

「なに、待ってる間退屈じやろ？しせつかくじやからな」

「冗談じゃない！なん」

「つべこべ言わんと来いや！」

トウスクルは無理矢理オボロの耳を引っ張つて出ていった
「いつ…いたた！ちょっと、トウスクル様っ、あいてて！」
ドアがしまってからハクオロはさて、とベッド脇の椅子に座る
オボロは騒がしいなあ。兄妹つても似なさすぎ

「あ、座つたけどいい？」

「はい。あの、ハクオロ様、ハクオロ様のこと、教えてくれませんか？」

「僕のこと？良いけど…実は昔の記憶がないからあんまり話すことがないんだ」

「記憶が…？」

「うん。大怪我をしてトウスクルに助けられたらしいんだけど、気付いたら何も思い出せなかつたんだ」

「ごめんなさい…私…」

「気にしなくていいよ。僕は気にしてないから。それよりユズハ…様？」

「ユズハのことは…どうかユズハとお呼びください」

「そう？良かつた。様づけとかしたことないし。ユズハはさ、何の病気？」

「病気…よく、分からないです。ずっとこうだったから…」

「ずっとって……」「めん」

くそ、トウスクルがすぐ良くなるなんて言つから

「どうして、謝るんですか？…気にしてませんから」

そして突然笑いだすユズハにハクオロは、ん？と首を傾げる

「ユズハ？」

「ふふ、何だか謝りあつて…おかしい。くすくすくす…」

「あは…そういうやうだね」

それからハクオロは村での色々なことを話した。ユズハは時折笑みを溢しながら楽しそうに耳を傾ける

そして話に一段落がつくと、奇妙な沈黙が訪れた

「あの…」

「え！…な、なに？」

「不羈なこと、お願いしてもいいですか？」

「ん？」

「お顔を…触つてもいいですか？」

「別にいいよ」

それって不羈かなあ？

ユズハは微笑むとゆっくり起き上がった

「大丈夫？」

「はい」

ユズハが恐る恐る手を伸ばし、戸惑っていたようだが、やがて何かに納得したようにハクオロの顔に触れてきた

あ、そっか。目が見えないから代わりに触つて確認するのか

その時、ドアが開きオボロたちがやってきた

「む、何をしてる。横になるんだ。あまり兄を心配させないでくれ

「あ…はい」

「あんたもあんただ。ユズハに何をするつもりだった」

「構わんよ。気分がええなら少しくらい動いたほうがええ」

「ぐ…第一、何をしていた」

「ユズハがハクオロの顔を触つた位で大の男が騒ぐんじゃない」

「ぐつ……」

本当にオボロつてトウスクルに弱いなあ

「さて、そろそろおいとましようつかの」

「もう……帰られるのですか？」

「また今度、くるからの」

「はい……あの、ハクオロ様、また……来ててくれますか？」

「勿論。またねユズハ」

「……おまじないしても、いいですか？」

ユズハは自分の髪を一本抜くと、ぎこちない手つきでハクオロの小指に巻き付けた

「ハクオロ様も……」

「うん」

よく分からぬハクオロだが言われた通りに髪を抜いてユズハの小指に巻き付けた

「再会できるおまじないです」

「またくるよ。大丈夫、僕は可愛い子との約束は守る人だから」

アルルウと過ごすうちに癖になつたのかつい頭を撫でると、ユズハはくすぐつたそこに目を細めて微笑んだ

「やれやれ、なんとか夜明けまでに帰つてこれたの。……ハクオロ？さつきのを気にしてるのかい？」

家の前で問われ、ハクオロは先ほどの会話を思い出す

回想

「それではトウスクル様」

「うむ」

「オボロ、またね」

「…あんたはもつ来るな。だいたいゴズハも俺も勝手に呼び捨てにするな！」

「何で？ゴズハは良いって言つてたよ？」

「いいから来るなと言つたら来るな！」

回想終わり

「僕、なんかした？」

「あれも一種の病気じやから気にせんでええ。それより急いで戻らんと」

「おばあちゃん！こんな時間に何処に行つてたの！」

忘れてた…エルルウに伝えるの、完璧に忘れてた…

エルルウに詰問されながら家に入る

「診察さ。ある体の弱い方がいてね、この時間がその方には一番都合が良いのさ。分かつてもらえたかい？」

落ち着いたエルルウは頷く

「うん…でも、もう黙つて行かないでね。本当に…心配したんだから…」

「ああ、約束するよ」

「ん~…どうしたの？」

奥からアルルウが眠たい目を擦りながら起きてきた

「何でもないんじやよ。ほれ、寝ようかね」

トゥスクルはアルルウの背を押して奥へ消える。エルルウはまだ涙目でハクオロに頭を下げた

「あの、ハクオロさん。色々と…ごめんなさい」

「いやいや、エルルウが泣かないようにするためなら何てことないよ」

ていうか結局今まで心配させっぱなしだったし

「あ…あの、お茶でも飲みますか？」

「うん？ああ、お願ひ」

「はい！」

ハクオロは座つておまじないをした小指を見る
おまじない、ね。可愛い話だ

「どうぞ、お茶 え？その小指…髪の毛？」

「ん？ああ、再会できるおまじないだつてさ。知つてゐるの？」

「え…あ…もしかして、あの方つて…女の子？」

「何で分かるの？エルルウと同じくらいの可愛い子だつたよ

「……」

「エルルウ、早くお茶を…」

「……」

「エルルウ？」

「ハクオロさんも、その子の指に？」

「うん。それよりお茶…」

エルルウはがつと湯飲みを掴むと一気に飲みほした。とても怒った
表情で尻尾をさかだてて

「お休みなさい…」

エルルウはそう言つたと奥に行つてしまつた

「……？」

その様子を見ていたトウスクルはやれやれと呟いた

働く」と「サボる」と

「ハクオロさん！」

ハクオロが腹ごなしに木陰で眠っているとエルルウがやつて来て肩を揺すつた

「え？ 何？ テオロ、またお酒飲んでるの？ 背え縮んだね」

普段の朝なら無意識にハクオロが起きて寝ながら飯を食べてから外に出て畠に着く間に自然に目が覚めるまで放つておいてくれるのだが、昼寝の時などはすでに慣れたもので容赦なく暴力を振るうようになつていた

「起きなさい！！」

「ぶつ！！！ あ、れ？ エルルウ？ 何かお腹痛いけど知ら」

「知りません！ それより凄い人が！」

まあハクオロに寝ぼけている記憶はないからできるのだが

「え！ ？ サーカス！ ？」

「さー… ？ 何だかわかりませんが多分違います。 そうじゃなくて凄い人数なんです。とにかく着てください！」

エルルウはお腹を抑えるハクオロを引きずつて走り出した

夜 トウスクル宅にて会議

「そうかえ、戦を逃れての。 最近他国では戦が絶えないとは聞くが

…

「数は150人弱、殆どが疲労と飢えにで衰弱しきつてたから、今は食事をあげて休んでもらつてるよ」

ハクオロがとりあえず代表して報告するとトウスクルは額き眉を寄せる

「…」苦労。 じゃがあの山脈を越えるとは何と無茶な…」

「村長、どうするんてい？まさかあの数を受け入れるんじゃ」

「受け入れねば…ならぬ」

「ちょっと、いくらなんでも、1500つたらいいのヤツらより多いじゃないですかい！」

テオロが慌てて抗議する

「そりやあ、ちつたあ蓄えも出来たが、あれだけの数が増えたら、あつという間に干上がっちゃう…そんなことは村長が一番よく知っているでしようが！」

「では、おぬしはあの者達を見捨てると？戦で家を焼かれ、住む場所を奪われ、断腸の思いで故郷を捨て、何人もの同胞の屍を踏み越えながら山脈を越え、ここまで辿りついたあの者たちを見捨てると言つのかえ？」

「んぐ、そ、そりやあ…」

「忘れたかえ。助けあうからこそ、ワシらはこの貧しい地で生きていくけるということを」

「…それにも限度つてもんが…。一人一人ならまだしも、あれだけの人間を養つ食料も場所もねえつてのに」

確かに…家もなければあれだけいたら蓄えもすぐに尽きちゃう。現実的には、無理だ

「あの…とりあえず疲れが癒えるまでいてもらつて、その後他の村や都に行つてもらうとか…」

「そいつあ無理だろうな。他ん所も似たようなもんさ。受け入れてくれるとは…」

受け入れるのは見殺しにするのと同じ、か。問題は食料 いや、
食料をまかなう土地だ

「ハクオロや」

「え？」

「お前さんなら…どうする？」

「僕なら…」

「そうじゅ」

騒がしくなる場にハクオロは尻込みする

「でも…いくら何でも新参者の僕が口を挟める」とじや…」

「いいや。」の前にも言つたが、お前さんは「」の男じや。みなが認めどるんじや。なら時間なんて関係ない」

「そりじゃの…」

「オラもハクオロの意見聞いてみてえ」

「うん、僕も」

「アンちゃんの正直な意見を聞かせてくれねえか?」

「さあ、お前さんならこの状況をどう乗り切る?遠慮なく言つとくれ」

みんなに見つめられ、ハクオロは覚悟を決めた

「僕は…ここのみんなに助けられたから、だから同じ立場の人たちを助けたい。でも…」

「『でもここにはあれだけの人を受け入れる余裕がない』…じゃな?しかしそれでも受け入れなければならぬとしたら?」

「それでも受け入れるなら……まずは、集落の拡張に、食料生産で生きる土地の確保だ。回りとこうことは傾斜になっちゃうけど、今までの経験から、不可能じゃないと思つ」

「うむ…」

「でも一番の問題は、すべて自給できるようになるまでの食料だ。今の蓄えじや足りない。だから…足りないのは買おう」

「ちょっと待つてくれや。んな簡単に言つて、何処に金があるんだ?自慢じやねえが金も交換出来そうなもんも何もねえんだぜ?」

テオロに問われ、ハクオロは考えておいた案を提案する

「だから造るんだ。金属、特に鉄なら銅より貴重だし都に持つて行けば高く売れるよ。そして帰りにはそのお金で食料を買うんだ」「お、おいおいアンちゃん、無茶言つなつて。確かに鉄つつたらバカ高エけどよ、どうやって造るつてんだ」

「鉄の製法なら知つてる。純度が高いのを造るには高熱に耐えうる炉に、燃料とか他に薬品とかいるけど…まあ何とかなるよ

「何とかなるつて…なんでアンちゃんが知ってるんだ。ビックリや
造り方すら秘密にされてるつて話だぜ」

そう言わると…何で僕はそんなことを知ってるんだ?

考えこむハクオロを見て突然ソポクがテオロの脇腹に肘打ちを喰ら
わす

「何細かい」と気にしてんの。ハクオロがどうにかできるつて言つ
てるんだよ。だつたらそんなのどうでもいいじゃないかい

「グフシ…あ、ああ、そりやあ、そうだな」

テオロはハクオロが記憶喪失であることを思い出して同意する。ソ
ポクはにつこりハクオロに振り向く

「んじや頼んだよハクオロ」

そう言つて片目を閉じた

「うむ。決まりじゃな。ハクオロ、後は任せたよ

「僕?」

「他に誰があるんじや?なに今までと同じと思えません。ちよいと
忙しくなるがの」

「う、うん」

簡単に言つなあ。まあ、頑張るしかないんだけどさ

「ではこれで散会じや。みなご苦労じやつたの。明日からの作業に
備えて今日はゆっくり休んでおくれ」

「ハクオロ、起きんかえ」

「……アルルウ?」

「ええから起きんか」

ドスと容赦なく眠つているハクオロのお腹にトゥスクルの足が落ちた

「『じつ…くあ…あ、トゥスクル? おはよ?…まだ夜じやん。てかお
腹が痛いんだけど知らない?』

「さあな。出かけるから支度をするんじや。約束したんじや?」

言われて思い出したハクオロが小指を見るとまだ髪は残っていた

「ユズハ…」

「そうじや。寝ぼけて中々起きないくせに起きたらすぐに頭の回り
はしつかりするみたいじゃな」

「え？ 僕寝ぼけてたの？」

「まあの」

「恥ずかしいなあ。何か言つてた？」

「気にするでない」

ハクオロの寝起き（むしろ寝てる）は話しかけても噛み合つてゐるの
かそうでないのか微妙な会話になり、しかも話かけなくとも普通に
挨拶をしてきてしかしピントのズレた事を言つのが普段なので今更
だつた

「まあトウスクルが言つなら大丈夫なのかな？」

「ああ」

大丈夫とは一言も言つてないが、害はないし第一治りそうもないの
でトウスクルは頷いた

「でもいいの？ オボロ、僕に来るなつて言つてたけど」

「ええんじやよ。妹思いは結構じやが過保護すぎるので。今あの子
に必要なのは話相手さね」

「エルルウとかは？」

「いづれは…の」

「そういえば…目が…」

「幼い頃発作を起こした時にの。命は取り留めたが光を失つてもう
た」

「病気つて…？」

「軀中の神様がいがみ合い争う病さね」

神様：

オンカミ

「すみません、手間取 あ！なんであんたがいるんだ。まさか一緒に来る気じゃないだろ？」「音もなく現れたオボロがそう言った

「ワシが連れていくと言つんじや。わつわとせんか！」「は、はい！」

以前と同じく弓兵、双子のドリイとグラアが田巣しをして先導する。「足元に気をつけてください」

「気をつけなくていいぞ。そのまま谷底へ転落してくれれば手間が省ける」

「わ、若様……」

やれやれ、嫌われたもんだね

「ハクオロ様……？」

「うん、こんばんはユズハ」

ハクオロは椅子に座つてユズハの手をとり、小指に触れる

「まだ、約束は有効だよね」

「はい」

ゆつくりユズハの手もハクオロの指を探りながら小指に触れた

「？ トウスクル？」

後ろが騒がしいので振り向くと倒れているオボロの口にトウスクルが布をあてていた

何してんのだ？

「仕方ないねえ。オボロを運んでやりな」

「はい！」

ドリイグラアが（ハクオロの中ではドリイとグラアはセツト扱い）オボロを運び、トウスクルもしばらく話をしているよう言つと部屋から出ていった

「まあ、いいや。さて、何を話そうかな」

「…また、エルルウ様やアルルウ様のお話が聞きたいです」

「そつか」

ハクオロは日常をほんの少し脚色しながら面白おかしく話始めた

「それでエルルウとアルルウの追いかけっこが始まってさ」

「ふふ…」

微笑むユズハがどんな気持ちなのかハクオロには分からぬ。羨望のまゝ、ただ穏やかな微笑みで相打ちをうつユズハに、ハクオロは微笑み返す

「ユズハは普段何してるの？」

「普段ですか？」

「うん、友達とどんなことしてるの？」

「トモダチ…トモダチって、何ですか？」

「え、何って…」

純粋な疑問符にハクオロはふいにトウスクルの言葉を思い出す

「あの子に必要なのは話相手さね」

「…『友達』ってのは、一緒に話したり遊んだりする好きな人…かなあ？」

口で言うのは難しいな

「ん~、まあユズハにとつて僕みたいなのが友達かな？」

「ハクオロ様が…トモダチ」

「嫌？」

ユズハは頭を横に何度も振つて、頬を紅潮させながら笑う

「嬉しい、です」

「うん。そのうちエルルウやアルルウも紹介するよ

「エルルウ様たちとも…友達になれますか？」

「勿論。友達の友達は友達つてね
ユズハは嬉しそうに微笑んだ

お腹減ったなあ…あ この地面の土まで美味しいぞうに見えてきた
「おいアンちゃん、次の畠予定地なんだだけどよ
いや、土食べる動物つているし、案外イケるんじゃない? カロリー
は低そうだし実は健康系?

「アンちゃん」

嫌、でも…イケるか?ギリギリ?うん…

畠にしゃがみこんで土をつかんで真剣に睨むハクオロ。はつきり言
つて人間の尊厳とか自尊心は崩壊寸前だが、端から見れば畠につい
ては村長であるトウスクルから任されたハクオロが眞面目に土の様
子を見ているようにしか見えないから不思議だ

「アーンちゃん!!」

ドンと肩を叩かれハクオロが振り向くとにの間にハクオロは陰の
中にいた

「! … テオロ」

陰を作つてゐるテオロが呆れたようにハクオロを見下ろしてゐる。ハ
クオロは立ち上がる

「テオロ…ちょっといい?」

「おう、なんてい?」

「お腹減つた…」

「またか。ちつたあ我慢しろよ。アンちゃんはアルルウたちと遊ん
でたりする時は体力あるし夕飯になつてもずっと遊んでるくせに、
働いてる時はすぐにバテるし燃費悪いたあどついうことだ」

「知らないよ。とにかく僕は頭脳労働派なの。だつて夜に部屋で計
算とか計画考えたりするのは全然お腹減らずにいけるもん」
「はあ、俺なんかは文字読んだりすりとすぐ寝ちまうけどな」

「だあかあら、僕とテオロジヤタイプが違うんだよ」

「分かつた分かつた。じゃあ指示してくれりやいいから休んでろよ

「……やるよ。一人だけやらなーいなんて、そっちのが嫌だ」

拗ねて唇を尖らせながら返事をするハクオロに、テオロはどこか嬉しそうだが照れ隠しに頬をかく

「そうかよ。……にしてもそのくせサボリたがるのは何なんだよ」

「うつ……それはほら、別腹?」

「何の話でい」

なんて言うかさあ、サボるのは僕の責任でだしいいけど、初めから僕だけ特別扱いでつてのは嫌なんだよねえ

「わがまま、なのかなあ」

だけど、やっぱり働くのは面倒だ。勿論やらなきや駄目なのは分かってる。だから僕にしかできない、今後の計画や材料の量の計算など細かいのはちゃんとやる。でもこいつこいつのは……みんな頑張つてし大丈夫かな」って

「まあそうだな」

「最低限はやつてるつもりなんだけどなあ。まあ、僕も大人だし頑張らないとね」

「まだまだ俺に比べりや小さいけどな。それに普段はアルルウとタメはある時もあるしな」

「まあ、ね。でも元服も多分してるしね」

「いくらなんでもアンちゃんそこまで小さくなえだろ。小さいつても俺と比べたらの話で、同じくらこの他の男と比べてもそう変わらねえよ」

「そうかなあ? ソポクともそんなに変わらない身長なんだけど」

「年が違うだろ。それに中身がガキくせえつてもよ、真面目に働いて俺らに指示したりしてる時は、むじゅ俺よりよっぽど年上に見えるぜ」

「え……それはちょっと……40歳はなあ

「誰が40だ!……」

殴られた

だって、テオロ老け顔じゃん

主(ムティカパ)様の怒り

ハクオロがのろのろとしていてエルルウが汗をふいてくれるがお小言
という有難いことばを頂戴していると、アルルウがやつてきた

「お姉ちゃん、おばあちゃん呼んでる」

「あ、じゃあハクオロさん、ちょっと行つてきます」

ふう、エルルウの文句は初めはサボるなんて。からだけど段々よ
くわからなくなるんだよね。適当に相槌うつのも大変だ

「んう~」

アルルウはエルルウの姿が見ると抱きついてきた。ハクオロは可愛い
なあと頬を緩める

「ん? どうしたの?」

「ん~」

「アルルウは甘えん坊だな~」

ハクオロのお腹に頭を擦りつけるアルルウにハクオロはもはや無意
識に頭を撫でてやる

アルルウの髪の毛は柔らかくて気持良いんだよね

「おいてめえ、エルルウは何処だよ」

聞こえた声に振り向くと見覚えのある姿にハクオロはにっこり笑つ
て挨拶する

「久しぶり、ヌワング」

「おう つて何親しげに挨拶してんだよ! つかお前に聞いてねえよ。
おいガキンちょ、エルルウは何処だよ」

「……あっち」

アルルウはハクオロに抱きついたままぴつとあらぬ方向を指差す

「あっちにはいないから、行っちゃ駄目」

え? 何その言い方…ま、さかアルルウさん? そつちは肥溜めなんで
すけど?

「へっ、そういうとか。エルルウはこっちにいるんだな。俺様を

騙すなんて100年早えぜ

「ちょっと待つてヌワンギ、そつちは駄目だつて！」「勝手に俺様を呼び捨てにすつ ギやあああー！」

ヌワンギは肥溜めに落ちた

「……糞虫」

アルルウ…想つてやつは…

肥まみれになり逃げてしまつたヌワンギはこの際無視だ。ハクオロにとつてはどうちらかと想つなら明らかに女へ男だ。何故なら可愛いものが好きだから

「アルルウ」

「ん？」

「あん」

「アールールウーーー！」

あんなこと言つちゃ駄目じやないか、と言おうとするヒルルウの叫び声に遮られた

「え、ルルウ？ ちょ、アル」

逃げ出したアルルウを追いかけてエルルウがハクオロの前を通過
「待ちなさいーーーおばあちゃんが呼んだなんて嘘ついて！ーーーアルルウーーー！」

「……アルルウ…」

女の子があんな言葉遣いしちゃ駄目だよアルルウ。…あとエルルウ、元気なのは良いけど、もつちよと回り見よう…

「後で言わないと…」

「んあ？ アンちゃんなんか言つたか？」

「別に。さ、頑張ろう」

ハクオロは氣をとり直してこいつと笑つた

「いなんといふて呼んで、何の用だ？」

集落から少し離れた森の入口、そこにヌワングが村の知り合いだった男たちを数人呼び出していた

「決まつてんだろ。あの仮面男のことだよ」

「ハクオロのことか…」

男たちは各自渋い顔をしたり悲しそうにヌワングを見たりする

「ヌワング、本気で言つてるの？ハクオロさんを追い出せなんて…」

分かつてる？」

「何がだよ」

「ハクオロさんはもうこの村の男なんだよ」

「お前さんも村の男だったなら分かるじゃろ？」

「黙れ！これはお願ひじゃない、命令だ！俺様の言つことどが聞けねえのか！俺様はもう昔の俺じやねえんだぞ！」

「確かに、変わったな」

「んだ。昔のオメエなら、そげな」と言わんかった

「なつ…」

段々冷たくなる態度にヌワングは慌てて全員を見渡すが、味方してくれるものはいない

「うん。ヌワング…変わっちゃったんだね」

「もう昔のことは忘れたんだろ。行こうぜ。そんなやつもこの村の男じゃねえよ」

「んだな。ヌワング、森の神様ヤーナウングカともう一度向き合いな」

立ち去る男たちだが一人が後ろ髪引かれて立ち止まる。裏切られたとばかりにショックを受けているヌワングに、何を言えばいいのか分からぬ

「行くぞ」

「…うん」

しかし結局みんな行つてしまつた。残つたヌワングは顔を真つ赤にして怒るとそばにある小さな祠に目をやる

「くそつ！何が森の神様だ！こんなもんただの靈宿タムヤじやねえか…！」

そして激情のまま祠を蹴りつけ、中のものも壊してしまつ

「はあつ……はあつ……」

すると、何処か遠くから遠吠えが聞こえた

「ひつ！？」

ヌワンギが特別ビビリなのではない。それほど、ヒヒの主は恐れら
ムテイカバヌワンギだって知っている。これがただの祠ではないことを

森の神様への祠、そして…主を鎮めるための祠

祠を壊してしまった今、主は確実に暴れるだろう。ヌワンギにはどれだけの被害が出るのかは分からない。ただ、人が死ぬなんてくらいわかる。一人や二人では、絶対におさまらない

けれど激情の前で理性的に振る舞うなんて、ヌワンギにはできなかつた

「あ…ああ…」

そしてやつてしまつてから、恐ろしくなつた。遠くの雄叫びが自分を今にハつ裂きにくるんじやないか。だつて相手は、『主』だ

「つ…」

赤かつた顔を180度逆の青にしてヌワンギは走り去つた

夜、ハクオロは自室で小さな灯りの下でぱみちぱみちと算盤を弾いては何かを書き込んでいく

次の畠予定地だけど、岩盤が邪魔で水路が掘れないや。いつそ簡単な水道橋を作つた方がいいかな

「ハクオロさん…まだ起きてたんですか？」

「あ、エルルウ…君…そまだ？早く寝なきゃ明日に響くよ

「ハクオロさんこそ…寝ないんですか？」

「ん、まあこれが終わつてからね。もうじき一区切りつくから

「…どうして…」

「え？」「めん、聞こえなかつた。なに？」

「……あ……何でもありません。あの、何か暖まるもの煎れてきます
エルルウは居間に消え、しばらくすると湯気たつ湯飲みを乗せたお盆を持ってやってきた

「ハチミツ酒です」

「ありがとう」

すず、とすすると温かい香りいい液体が喉を通り体に染み渡る温かくて甘酸っぱい…ハチミツと柑橘系の果実だ。美味しい…

「うん…美味しい」

「良かった。ソポク姉さん直伝なんですよ」

ほっとしたように笑うエルルウにハクオロも頬が緩む
「体が温まる…ありがとうございます」

「はい…」

「でもね」

「はい？」

「君のこの心遣いの方がずっと嬉しいし、心が温まつたよ。ありがとうございます」

「…うう…どう致しまして」

エルルウはにつこり微笑んだ。顔が赤いのは、暗闇の中を照らすのが小さな火だけだからだろうか

「…え？」

突然、虫の声が止んだ。背中を嫌な汗が伝う
何?何か分からぬけど…凄く、凄く嫌な予感がする

「ハクオロ、さん…」

エルルウは耳をピンとたてて何かを察しようとするよつてせわしながら動かし、尻尾は全ての毛が太く逆立っている

「いや…いや…」

「エルルウ？」

ガタガタと震えるエルルウを抱きしめるが止まらずに歯の根があわないようにひたすらエルルウは震えている

遠吠えがして、激しい破壊音に、悲鳴が小さな集落に響く

「エルルウ、エルルウ？」

「…まが…ム イ パさまがつ…」

「ムティ…主…?」

ガタガタ震え続けるエルルウをさらに強く抱きしめてから、ゆづく
り手を離す

「は…くおろ、さん…?」

震えながらもエルルウはハクオロを見上げる

「行つてくる」

「つ…！？駄目！駄目です…！主様なんですよーハクオロさんは主様
のことを知らないから…！」

金切り声をあげるエルルウにハクオロは一瞬迷つたが、やはり走り
だした

「でも、行くよ。エルルウはここにいて。大丈夫、声も止んだし様
子を見にいくだけだから」

「ハクつ

」

外に飛び出したハクオロはまっしぐらに音がしていた方へと向かう。
無惨に破壊された家の前にくるとむせ返るような臭いがして立ち止
まつた

「つぐう

」

なにこの臭い…血？濃すぎる…氣持悪い
ぐぢや、くぢや

何か水気のある断続的な音源を耳をこらして見ると、白に黒筋のあ
る模様の毛で覆われた大きな体をもつソレ、人間を食べている主が
現れた

四足歩行のソレは猫のように髭や丸く鋭い目を持っているが勿論猫
のように可愛くはない。暗い中に真っ赤な目がギラギラと睨みつけ
てくる

「つ

気づいた主はハクオロにゆっくりと近づいてくる。ハクオロは息を呑み、さつと以前渡されてからすっかり私物とした鉄扇を構えた前触れもなく主は巨大を軽々と操りハクオロに襲いかかつた。ハクオロの頭を一噛みにしようとする口に鉄扇をつつこみ何とかかわすが、転がり逃げる時に足を引っかかってしまった

「くつ…」

しまった。足をやられた…これが、主

「ハクオロさん！」

「え…」

予想外のエルルウの登場にハクオロは呆然とするが、構わずエルルウはハクオロの腕を自分の首に回してハクオロを担ごうとするが、いまだに震えるエルルウではここまで来たのが奇跡のようだ。今にもエルルウは地面に座りこみそうだ

「ば…バカ！なにやつてるんだ！早く逃げるんだ！僕が時間を稼ぐか

「駄目です！ハクオロさんを置いてなんていけません…！」

「つ…え？」

主は、何かを探るようにぴくぴくと耳を動かして、襲いかかつてこない

「…なんだ？」

ポツ、ポツとハクオロの頭に零が落ちてきた

「あ…」

ザーッと突然雨が降りだした。すると急に主は踵を返し山の方に帰つて行つた

「…は？」

「…」

「あ、エルルウ」

ぎゅっと目を閉じて震える腕でハクオロを抱きしめているエルルウは、雨が降っていることにも気がついてないようだ

「エルルウ、エルルウ」

「駄目、駄目です…」

「助かつたんだ。主はどつか行つちやつたよ」

「え…ああ…あ…」

目を開けて確認するとエルルウはボロボロと泣き出し、今度こそ地面に座りこんだ

「助けてくれて、ありがとう。僕つて結局、いつも肝心な時はエルルウに頼つてるね。カッコ悪いなあ」

「つ…ああ…」

あながち冗談に出来ない軽口を言いながらエルルウを強く抱きしめて、ハクオロは優しくエルルウの頭を撫でた

「ごめんね、ありがと」

でも、なんで主は立ち去つたんだ？…！　あれは…

「キリクリの家が力ミさんも子供も…みんな食われちました」

「…」

「噂じやヒックタの集落がムティカパに襲われた。トトウが襲われたばっかだつていうのに。村長、もう我慢できねえぜ。黙つてみておくつもりか！？」

「…お主の気持ちは痛いほど分かる。じゃが、相手は主様じやぞ。強く、素早く、賢く、何より矢も槍も貫くことのできないその体じや」

「つ…しかしよう」

トウスクルとテオロが言い合つてゐる緊迫した氣配の中にハクオロが気軽に入ってきた

「トウスクル、ちょっとといいかな？」

「なんじや、欠席するんじやなかつたのかい？」

「ん、乾いた場合を確かめたくてわ。もし乾いて柔らかいなら肉

体そのものが強いわけだし

「？ 何の話じゃ？」

「これ、何だと思う？」

「ふむ、毛……！ もしや、主様の！？」

「うん。テオロこれを切つてみて欲しいんだ」

「まあ……別にこのぐらいいふつ……！？ んんつ……つだあ……な、切れねえ」

テオロに渡した一本の毛はどんなにテオロが引っ張ろうと伸びるこ
とすらしない

「刃物使つても無理だし火であぶつても駄目。で、テオロはその毛
で全身を包まれた主をどう退治するつもり？」

「ングッ そ、そういうのは、アンちゃんの役割だろ？？」

「はあ……まあいいけど。見て」

ハクオロは一本の毛を取り出し、引っ張った。すると嘘のように簡
単にふつと切れた

「は……？ さ、さすがアンちゃん！ で？ どうせやつたんでい！？」

「僕とエルルウは助かつた。それは主の氣まぐれでも満腹になつた
んでもない。答えは、雨さ」

ハクオロが襲われた時に見つけたもの、それは抜けていた主の毛だ。
何の気なしに持ち上げたそれは、たやすく切れた

「雨……！ なるほどな。水で濡らしておるのか」

「そう。主が立ち去ったのは雨に濡れることや、弱点を披露するも
同然だから。だから、退治もやってやれないことはないよ。ただ……

「？ なんてい？」

「相手は、主なんだよ？ 僕は信仰心なんてないけど、みんなは大丈
夫なの？」

「……ワシらといへ、好き好んで同胞を見殺しにしたいわけではない

んじや

「じゃあ……

トウスクルはゆっくりと頷いた

「うむ、ハクオロ、後は頼んだぞい」

「うん」

今もすぐ目の前に思い出す。あの生臭い赤い液体をしたたらせる白い獣

恐ろしくて、身震いがする。けれど放つてはおけない。だって、大

切な人が傷つくほうが、何倍も恐い

おぬれど云なる？

今度の罠も単純なもの。元々、罠は単純なほど効果は期待できるものだ

縄張りに入り『主^{ムティカバ}』を誘きだし、水のはられた落とし穴の場所につけたればあとは待機していた人たちが罠を発動させる
「で、ホントにそんなので誘いだせるの？」

「おうよ」

ハクオロが不審そうにテオロの手元を見る。テオロは大丈夫だつて、
と言いながら銅鑼^{ドラ}を持ち上げてならず
「あいつは自分の縄張りで騒がれるのが我慢できねえやつなんだ、
よつー！」

ドーンー・ドーンー・

銅鑼が響くとすぐに遠吠えが聞こえ、派手な物音が段々と近づいてくる

「きた！逃げるぞー！」

「おう！…つ！？な、なんだあーー？」

二人が走りだそうとし、違和感に立ち止まり足元を見る。すると、
薦が絡み付いて一人の足を繋いでいた
「ちょつ、テオロこつちこないでよー！」

「アンちゃんこそー！」

「とにかく早くほじいて…つて、かてーー！」

ハクオロがもどかしく薦を引っ張るがいつの間にこいつなったのか堅い結び目が存在していた

「落ち着けアンちゃん、こいつで ふつ

テオロが腰にさしていた斧で薦を切る

「ふう、やれやれ」

「つてテオロ！一息ついてる場合じやな」

ドスンガサガサーと音がしてゆっくり振り向く

「……」

明るい場所で間近にみた主は^{ムテイカバ}巨大白虎のようだつたが正しくは分からぬ

「グルルルル」という不機嫌そうな唸り声と鼻息が届き、二人は顔を青くする

「……逃げろオ！！」

「ハアツ…ハアツ…ヒイツ！ だあつ！」

「つてアンちゃんなんで！？」

二人はばらばらに走り出したにもかかわらず、太い木の幹を回ったところでぶつかりハクオロは転んだ

「そ…こつ…」

それはこっちの台詞だ！と言おうとするが体力を使い果たしたハクオロはヒューヒューと肩で息をする

「ああもうー仕方ねえなあ！」

テオロはハクオロを担ぎあげ、ドスンドスンという派手な足音に負けじと走り出した

息を整えながらハクオロは担がれているので正面にいる主を見てタイミングを計る

テオロが罠の上を走りぬく。主はあと罠まで5メートル

1

2

3

4

0！

「今だあ！！」

ハクオロの叫びに脇に控えていた人たちが縄を引き、罠を作動させた主の足元には大きな穴が空き、勢いよく主は水に飛びこんだ
「はあ…はあ…やつたか！？」

「いや、皆一構え！」

暴れる水音を聞きながらもハクオロが合図すると隠れていた人たちがそれぞれ得物を手に出てきた

勿論水は弱点だろうけど、それで殺すことはできない。ちゃんと、止めをさすんだ

案の定主は耳を塞ぎたくなるほどの大きな唸りをあげると、一気に落とし穴から飛びあがってきた

唸り声をあげ、ゆっくり近づいてくる主に入々は後退る

「怯むな！もう主は無敵なんかじやない！刃を撥ね返さない！僕らは負けない！！」

「つ…」

普段の様子が嘘のように強い口調で言つハクオロに一步、また一步と人々は武器を構えながら主を取り囮む

「今だ！」

ハクオロの合図に一気に主の体に刺さる得物たち。反対側にまで貫いている槍、食い込んで柄しか見えない斧などの農具。ぼたぼたと血を流し、しかし動かない主は威嚇を止めない

「……だあつ…！」

止めと、ハクオロの扇が主の額から後頭部にかけて貫いた。ガクリと主は地に伏した

「…終わりだ」

ハクオロは瞳を閉じてゆっくりと息をした。そして目を開ける

「終わった、ね」

先ほどまでの厳しい雰囲気を180度変えて柔らかくハクオロは微笑んだ

「お疲れ様。みんな、よく頑張ったねえ」

奥に隠れていたソポクたちが出てくる。疲れて座りこんだハクオロ
にエルルウが側による

「大丈夫ですか？」

「う、んつ……疲れた、だけ」

疲れた：本当に。だって僕は、この手で命を潰したんだ。主に罪はない。でも僕らにだつて……ただ、生きていくためには仕方がない。仕方がない話なんだ

ハクオロは自分の手を見た。扇は血に汚れていたので拭つたが、手には血はついていない。けれど、どうしても自分の手が汚れているような気がした

「……はあつ…………？ 誰か、そこにいるの？」

ため息をついて、ふと頭だけを振り向かせ後ろを向いた。物音がした気がしたのだ

「アルルウ……どうしたの？」

茂みからこちらを覗いていたのはアルルウだった。困惑したようにう、とアルルウは唸りながらも動かない

「？ アル

「こらアルルウ！ 危ないから家で待つてるよ！」と言つたじゃない！
どうして……つてあら？」

アルルウに気づいたエルルウが茂みに入つて行つてアルルウの腕を掴むと、何故か不思議そうに首を傾げた

「なに？ そのお腹……？」

「？ アルルウ、どうかしたの？ こいつちおいですよ」

「う……」

茂みから現れたアルルウには、ぽつこり膨らんだお腹があつた

「ん？ アルルウ、それなに詰めてるの？」

「赤ちゃん……」

「は？」

「アルルウとおにくちゃんの、赤ちゃん

「……」

一斉にハクオロに疑惑の目が向けられた
いやいやいや！ないから！僕子作りなんてしてないから…マジで！
いや、興味がないわけじやないけどアルルウはちょっとね。それに妹に、なんて僕鬼畜じやん

ていうか！僕信用ないっすね！エールルウまで僕をそんな目で見ないで！！

「キュー…」

アルルウのお腹が鳴いた

「……アルルウ、本当は何を隠してるの？お姉ちゃん怒らないから、
だして？」

「……ヤダ」

アルルウはお腹を押されて首をふる

「…アルルウ、おいで」

「…」

ハクオロは立ち上がり、ゆっくりアルルウに近づいてしゃがみ込んで鼻がぶつかるような位置で微笑んだ

「アルルウが、嫌がるには理由があるんでしょ？なんとなくだけど、ただの推測だけど、だいたい予想できる。大丈夫、僕が守るから。どんなことがあってもアルルウのこと信じてる。大丈夫。大丈夫だよ」

動物で、隠さなきやならないもの。怪我をしてて拾ったとかならエールルウが反対をするわけがないで、だから中に何があるかは分かつていた

「…おに～ちゃん」

「お腹の子供に、会わせてくれるかな？」

「…うん」

そつとハクオロに手渡されたのは白地に黒縞のはいった猫科の生き物。小さなそれは親にそつくりで、だけど可愛らしくガオ～と鳴いた

「可愛いね」

「んつ、可愛い」

「つてアンちゃん…そいつあ、主の子供じゃねえか！」

「…」

アルルウが肩を震わせて主の赤ん坊^ごとハクオロに抱きつく
「だから、どうかした？」

「どうかつて…分かつてんだろ？今は無害でも大きくなつてまた俺
らに危害をくわえねえとは言えねえんだぞ！？」

「アルルウが、育てる。約束した！…アルルウ、お母さんになるつ
て、約束した」

約束？主と…？

「アルルウ」

ざわついたその場がトウスクルの呼びかけ一つで静かになる
本当にトウスクルは、凄い。いつだつて正しいことを、正しく、当
たり前みたいにする

「聞こえたんじゃね？」

ん？なにがだ？トウスクルはいつも正しいんだけど、時々意味が分
からない。まあ僕が世間知らずだからかな？

「うん」

「…テオロ、アルルウの好きにさせておあげ」

「村長！？」

「あの！ちゃんと育てますからーだからー」

「お姉ちゃん…」

エルルウがテオロとアルルウの間に立つてそう言つとテオロは困つ
て頭をかく

「エルルウまで…参つたなあ。俺別に意地悪で言つてるわけじや
ねえんだぜ。なあ？」

「別にいいじゃないか」

同意を求めたのにあつさり言われテオロは情けない声をあげる

「カアちゃんまでんな…もし人を襲つたらどうすんدي？」

「そんときやまたあんたが退治してくれりやいいじやないのさ。何

だい？自信がないっての？」「

「ば、バカ、主の一匹や一匹俺様にかかりやあ…」

「じゃあいいじゃないか」

「ング」

ソポクに言いくるめられしかしそれでもテオロはまだ決めあぐねているようでハクオロを見下ろす

「なあアンちゃん、考え方直してアルルウを説得してくれよ」

「僕だつてさ、別に主が子供で可愛くて可哀想だからってだけじゃないよ。アルルウが大丈夫だつて、エルルウも育てるつて言つてる。僕は彼女たちを信じてる。主は信じてないけど、彼女たちがいるなら大丈夫だよ」

「アンちゃん…」

「もし何かあつたら、その時はワシが責任をとる。老いぼれの首で良ければ好きにせい。ついでにハクオロのもつけてやる」

「僕はついでかよ」

「…分かつたよ、村長がそこまで言つなら。だがよアルルウ、もし何かあつたら…分かつてるよな？」

「うん」

アルルウは嬉しそうに尻尾をふりながら主の子供をハクオロの手上から抱きしめて頬擦りをする
どつちも可愛いなあ。可愛いけど…アルルウ本当にテオロの話聞いてる？ まあ、大丈夫だよね

汚れたこの手にさらに血を重ねたくなかった。だけど、分かつてる。必ずまた何かの命を奪わなければいけない時がくる。それはこの世界ではきっと避けられないこと

自分の手に重なっている小さなアルルウの手をはねのけたかった。汚れた手に触れて欲しくなかつた。綺麗な君だから尚更。大好きな君だから尚更

だつて大切な大切な、家族

ハクオロが主の子供に触れたのすら勢いがなければできなかつた。

そうでなければ、殺した手でその子供に触れたりはできない。いま
すぐに水に飛び込み全身を洗い流したかった。だけど無駄だと分か
つていい

「おにじちゃん」

「なに?」

「大好きい」

そういうってアルルウはハクオロから主の子供を受け取るとハクオロ
のお腹に突撃してきた。ハクオロはだけどその手で抱きしめるのを
ためらつた

「? おにじちゃん?」

「うん…ねえアルルウ、君の頭、撫でてもいい?」

「んっ」

ハクオロの葛藤なんて何も知らないアルルウは無邪気に微笑んで頷
いた

それでも、アルルウにそんな気はなかつたとしても、ハクオロは許
されたような気がして、ゆっくりと手をアルルウの背にまわし抱き
しめて、頭を撫でた

「アルルウ、『お母さん』頑張つてね」

「ん、アルルウ、お母さん!」

「エルルウも、ね。迷惑かけてる僕が、もうこいくいぶち増やしてご
めんね」

「いえ、ありがとうございますハクオロさん」

エルルウが微笑んで、ハクオロは何故か胸の奥が熱くなつた。嬉し
くて、温かいくらいなのに、何故か泣きたいくらいに切なかつた
何だらう? やっぱり、僕の失った記憶と関係があるのかな?
ハクオロはエルルウに微笑みかえした。胸のうちなんて見せずに

「キュー」

アルルウが育てることで収まつたとうの本人（主の子供）はアルルウが転がした布の玉にじやれついては、しばらくしてアルルウに持つていきた投げてもうつを繰り返す

「いい子いい子～」

「キュー」

か…可愛いつ！ なんて言つか、可愛い女の子と可愛い小動物つて無敵ですか？

「あ～、アルルウ 可愛いすぎ～！ 主の子供も可愛いすぎ～！」

ハクオロが悶えるように言つとお茶を前に置きながらエルルウが苦笑する

「あはは…まあでもこれなら心配なさそうですね」

「だね。だつて可愛いし。名前とか決ました？」

「あ、それが…」

エルルウが何やら意味深な目をアルルウにやるとアルルウは主の子供を撫でながら

「ムツクル」

と言つた

「ん？」

「ムツクル」

えー…と、もしかして主の子供の名前が『ムツクル』…とか？

「…名前？」

「私は別の名前がいって、言つたんですけど

「ムツクルもムツクルがいって。ね、ムツクル？」

「ガオ」

「ま、まあいいじゃん。ムツクルおいでの

「ガオ～」

たたつとムックルはハクオロに飛び付いて鼻をすりつける

「可愛いなあ。ねえエルルウ」

「はい。私にも抱かせてください。おいでムックル」

「キュー」

今度はエルルウにムックルが抱きつく

「ふふ…って、え？ ちょつ

「？」

何やら「」などとムックルはエルルウの胸元に頭を突っ込む
「ムックル、お腹減つたつて」

「え

それつてつまりエルルウにミルクをねだつてますか？

「ちょ、あ！ んんつ」

チュパチュパと何かを舐める音がして真っ赤な顔で唸るエルルウは
耳と尻尾をピクヒクさせる

な、なんて顔をしてるんだあ！ なんて言つか… 可愛いすぎるー…なんて
言つか…なんて言つかなあもう！

「んつ…あ…？」

しかしムックルはしばらぐすると情けない声をあげながら頭をだした

「クウーン…」

「ムックル、可哀想つて」

「かわつ…！？」

まあそりやあでないだろうね。それに…あんまり胸はないよね
ショックを受けていいエルルウをよそに今度はアルルウの懷にムッ
クルは忍びこむ

「ガオ～」

そしてまた舐める音がするが、アルルウは平気な顔でムックルも出
てこない

いや、アルルウだつてでないでしょ

「し、しかし」「やつて見るとアルルウ本当に母さんみたいだよ
ね」

機嫌の悪いエルルウが発する空氣を何とかしようとハクオロは殊更明るく言った

「ん。アルルウ、お母さん、おにーちゃん、お父さん」

「いやあ照れるな。ムツクル、お父さんだよ~」

「あれ?なんかエルルウの雰囲気がより冷たくなった気がするぞ? なんでかな?」

「ハクオロさん...」

「な...んですかなエルルウさん?」

思わず敬語をつかうハクオロ

「私...お茶をいれてきますね」

先ほどエルルウがいれた湯飲みにはまだみなみとお茶がある

「え?まだ飲んでな~」

「いれてきますね」

エルルウは部屋から出でていく。すると居間からドン~ドン~という打撃音が連続的に聞こえ、ハクオロは反射的に首をすくめたが、アルルウは平気な顔でムツクルと戯れている

「.....アルルウ」

「ん~?」

「なんでエルルウ、あんなに怒ってるの?」

しかも向こうで暴れるくらいに

「知らない」

「そつか~」

せっかく休んでるんだから、アルルウだけじゃなくてエルルウとも一緒にいたいんだけどなあ

ハクオロは嘆息してからアルルウとムツクルの頭を交互に撫でた

ざわざわと騒がしいので家でごろごろとしたかつたのにトウスクルに引っ張られるようにハクオロは外にでた

「貴様がこここの村長か？」

うつわ僕関係ないし、帰らせてよ。

トウスクルは何で僕を連れてきたかなあ
ハクオロがぶつくさ文句を呴いているトウスクルがジロリと睨ん
できて、ハクオロの足を踏みながら問い合わせてきた兵士に改めて向
き直る

「一……つう

「そうじやえ」

この婆さん…平氣な顔して人の足をゴリゴリと…晩御飯のおかず
盗んでやるからみてるよ！

「ふひやひやひやひや、久しづりにやもねえ。まあだ性懲りもなく
生きてたにやもか」

兵士に言われて二人が人垣を越えて先ほどから視界に見えていた引
車のところに行くと、どっぷり太つた豪華な身なりの男がいた

『にやも』？変な口調。巫山戯てるのかな？それとも素？

「まあの。」の間にそこを持つていった痔の薬は効いたかの？

「にやも…！」

顔をひきつらせる男に兵士たちがトウスクルとハクオロを武器を構
えて取り囲む

うわ、メンドーなことになつたなあ。まあトウスクルなら大丈夫だ
ろう

「貴様無礼だぞ！」の方は偉大なる藩主ササンテ様だぞ！頭を下げ
よ…

「…ふん、よいよい。死にそこないの戯言にやも。といひで噂によ
るとおみやあ等、ずいぶん羽振りがいいそうだにやも？」

「まさか。日々食べて行くので精一杯じやよ」

「にやふふふ。嘘はいけないにやも。聞くといひによると、鉄を売
つてゐらしにやもね

にやふう、その顔はあたりにやもね。鉄はつくるにも売るにもワシ
の許可がいるにやも。黙つてるとは打ち首ものにやも」

「そこまで言つてササンテは嫌らしくいやあと笑つ

「で・もお、ワシは寛大にやむ。誤魔化していた粗を払えば許してやるにやも。そつにやもね、かれこれ10年ぶんは払つてもひりつこやも」

「なんだつて！ やよこと待つとくれや！ 僕らが鉄をつくりだしたのはつい最近だぜ！」

「にやふふ、粗を払わずにいた罰にやも。打ち首にしないだけ感謝するにやも」

「分かつてある。粗は、払つ」

「村長！？」

「ああもう！ なんだよ！」のトブむかつくなあ。ていうか十年つて無茶苦茶すげー！

「ちょっと待つてください」

叫ぶハクオ口にササンテは今氣づいたとばかりに膨れあがつたもさもさの頭を傾ける

「にやも？ おみああ誰にやも？」

「そんなことより、私たちはちゃんと鉄をつくりだした報告も普通とは別の粗も払つてましたよ」

「にやもあ？ そんなの知らないにやもよ」

「なんですつて！？ それは大変ですよ！ ササンテ様の部下に着服をする不図き者がいるということですか！？」

「にやもー！？ どういうことにやもー？」

「だつて私たちがササンテ様のために稼いだお金は、ちゃんとササンテ様の部下である兵士のかたに渡したのですよ！？」

僕らが偉大でかつこよくて素晴らしいササンテ様のために汗水流したお金を！ ササンテ様のお金を！ なんと不埒な兵士が盗んだのですよ！？ なんて、なんてだいそれたことを！？」

「なんにやつて！？ ふふううつ！ 許せんにやもー！」

怒り心頭とばかりに真っ赤な顔で鼻息を荒くするササンテにハクオ口は畳み掛ける

「ササンテ様！ お怒りは最もです！ 我らとてササンテ様に差し上げたつもりがそのようなことに…。すみません！ 私どものミスです！ どうか盗まれた分をまとめて今お支払しますから、どうかご勘弁を！」

「いやもお？ 僮にそつだとこじら、やつぱりおみああたちが悪いにやも。よつて十ね」

「ササンテ様！ そのよつじむたいなことをおつしゃらないでください！ そのようなことをされでは、私たちは生きていけません！ 勿論、私たちはササンテ様のためなら死すら惜しくはありません！ しかし！ しかしさう！ 偉大でカツコヨクで凜々しく強く賢く

気高いあなたに、ササンテ様にもつとお仕えしたいのです！」 ハクオロはぱつと土下座をして額を地面にこすりつける
「どうか！ どうか我らをあなた様のためにもつと奉仕させてください！」

「いやも～～。ふい、仕方ないにやもねえ。そこまでいづなら今後もワシのために働かせてやつてもいいにやも。十年は勘弁してやるにやも！」

「ありがとうございますーー！」

有難いわかるかーー！

「テオロ、じゃあそく差し上げてたのと同量の粗を用意してさしあげて」

「お、おひ」

トウスクルが指示してテオロたちが粗を用意する間はハクオロがひたすら「ゴマをすつていた

「……トウスクル、もついいかな？」

ハクオロは張り付けた笑顔のまま隣のトウスクルを呼ぶ。ササンテたちは粗を取り上げると立ち去った

「ああ」

「つ……だああ！ なんだよあれ！ 十年とかボケてんのか！ あ～
うつ、もうやだ！！」

じだんだを踏むハクオロにトウスクルはすまなをそつに眉を寄せて
ため息をついてから、微笑む

「よう我慢したの。お主の機転に、感謝する」

「……うん。でも新参者だから今までと違う態度とか思われずにすむ
だらうし、それに元はと言えば僕のせいだから。ごめんね、僕知ら
なかつたんだ。鉄をつくつたりするのに許可がいるなんて…」

「そんなもんありやせんよ」

「……え？」

あれ？ 今トウスクル凄いこと言わなかつた？

「ワシらから金をむしりとりたくて即興でつくつたにすぎん」

「……はあつ！？」

あの“テブ”！ 可愛くないのは見た目だけじゃなくて中身もかよ！
最低だよ！

「村長！ なんで素直に払つちまつたんてい？ そりやあハクオロ
のおかげで十年なんてこたあ免れたけどよ、だいぶ持つてかれちま
つたぜ」

「あそこで首を縊にふらなんだら、難癖をつけられてここを焼き払
われとつたよ」

う～、納得いかない

「どうした？ 雁首揃えて慌てふためいたりしてよ？」

ひょいと現れたヌワングギに人々は険しい顔を向けるがハクオロは悲
しそうに

「ヌワングギ、悪いけど今日は遊んであげられないんだ

と片手をあげて言った

「残念だな つてなんでだよ！ いつ遊んだー つか何で上から田
線なんだよ！…」

「冗談だよ」

「おこヌワンギ！ まさかこれ、お前の仕業か？」

「く、だったらどうなんだよ」

「てめえ！」

詰め寄られて伸ばされた手をヌワンギはふりほどく

「あ？ 觸んなよ。俺様はここ の藩主様になるんだぜ」

「くつ…」

「ヌワンギ…」

現れたエルルウにヌワンギは一気に子供のように微笑んだ。エルルウが暗い顔をしているのは全く気にならないというか気づいていない

「エルルウ！ よう、元気だつたか？」

「ヌワンギ… 酷いよ…」

「あん？」

「みんな、みんな一生懸命だつたのに…」

「お、おいエルルウ？」

しかし涙を溢したエルルウにはヌワンギも慌てて何とかしようと しても、何をすればいいか分からず手を宙に漂わせる

「ヌワンギの、バカアーー アーー！」

そしてエルルウは立ち去つたがヌワンギは呆然と見送るだけだった。ハクオロは慌てて

「エルルウ！」

と叫んで追いかけた。これからのこと話をし合わねばならぬと知つていたが、エルルウの側にいてあげたかった

「ヌワンギ、お前さんもバカだねえ。エルルウが本当に喜ぶと思つたのかい？」

「…くつ、うるせえ！」

ソポクに呆れたように言われたヌワンギだが、肯定なんてできなかつた。ヌワンギはウマに乗るとその場を立ち去つた

「そ！ なんだよ！ 俺様は偉いんだぞ！ エルルウ、お前には、お前にだけはなんだつしてやるつて、お前のために、お前のため に言つてるんだ！ こんな村なんかいらねえだろ…！」

ヌワングは心中で怒鳴りながら、それでも本当はエルルウがこの村を捨てないと知っていた。だけど畳ってしまった今のヌワングの目では、自分の真実の心さえ知ることはできなかつた

「エルルウ！」

木の陰にもたれて座つていたエルルウに近寄る。エルルウは涙をポロポロとこぼす

「つ……ハクオロ、さん……今は、今は一人にしてください！」

「……うん。正直僕には何を言えばいいかわからない。でも、側にいさせて欲しい。だつて、僕ら家族でしょ？」

「つ……ハクオロさん！」

隣にしゃがんでエルルウの肩をだくハクオロにエルルウは抱きついで涙を流す

「私つ……私はつ……！」

「大丈夫。僕はずつと君の味方だよ」

「つ！…………あ…………ああつ……！」

僕はヌワングのことはせいぜいツツコミつてことしか知らない。だからエルルウの気持ちは分からぬ

だけど、それでも側にいたいんだ。慰めることもできないけど、何もできないけど、エルルウの側にいたいんだ

エルルウは泣いて泣いて、ハクオロの胸を濡らした。その間ハクオロはずつとエルルウの頭を優しく撫でていた

システムの恩返し

正直やぶあい。何がつてそりや残り食料とかお金とかお金ハクオロは藩主ササンテが去つた夜にぱちぱちと算盤を弾いて紙面とにらめっこをしていた

足りないのは勿論、あのデブ藩主に増量してとられた通常の粗どちらに鉄の粗だ。おかげで予想よりずいぶん少ない

今はまだ大丈夫だがこれでいま台風が来たり、雨が降らないカンカン照りでひからびたりしたら、確實に食料難になるだろうみんなに食料が回らないのは非常一に困る。何故つてトウスクルくらいは平気な顔しそうだけど可愛いアルルウやエルルウ、それに大食らいのムツクルやそれに村の皆が元気ないのは嫌だ

「うーん……」

参つたなあ。倉の中身が勝手に倍になつたりしないかなあまあ冗談だけど。悩んでも仕方ないし今日はもう寝よ

「アンちゃん！」

「だつ！？ あ、何だテオロか。こんな夜中にどうしたのさ？」布団をひきかけたハクオロは予想していなかつた突然の大声での呼びかけに、つんのめるようにして布団に乗ると反転して鉄扇を構えた「いいからそう構えないでくれ。ちょいと来てくれや」

「む…もうエルルウに怒られるのはヤダ」

先日景気付けだと夜中に呼ばれ大量の酒を飲まされたハクオロは、しつかりと一日酔いになりエルルウに怒られてアルルウに避けられて散々だったのだ

ハクオロはそこまで酒に弱いわけでもないのでコップ一杯で酔つたりはしないが、さすがに酒瓶を一気飲みしたあたりから記憶はない。あと悪酔いはする。記憶にはないがその場にいた人たちはしばらくテオロ以外がよそよそしかつたのだ

扇はおろすが警戒は逆に強まったのでテオロは慌てて否定する

「今日は違うんだよ。いいからきてく

「ん~、おに~ちゃん?」

部屋の入り口からアルルウとエルルウが覗いている

「あ、アルルウにエルルウも…起こしちゃつた?」

「はい。テオロさんも…どうかしたんですか?」

「ああ、ちょっとアンちゃんに用があつてな。行くぜ」

「ん~、分かったよ」

違うって言つてたし、行つてみよう

「ん

「ん?」

部屋から出ようとするとアルルウがきゅっとハクオロの服の裾を掴む
「アルルウも…行く。おに~ちゃんが行くなら、アルルウも一緒に

行く

「え、眠いでしょ? いい子だから待つ」

「や! アルルウも~」

参つたなあ。アルルウは言い出したら聞かないんだ。まあそこも可愛いけどさ

「別にいいじゃねえか。すぐそこだ。エルルウも来るか」

「あ、はい」

「もう…一人とも明日起きれなくとも知らないよ

呆れたように言うハクオロだが、エルルウは普段のハクオロの寝起きの悪さを身を持つて知つてるのでムツとして小さく呟く

「…ハクオロさんに言われたくありません」

「え? 何か言つた?」

「何も? ね、アルルウ?」

「ん~」

アルルウはエルルウと手を繋ぎながらもぞもぞと眠い目を擦つていた

倉の前に来たとき、驚きでアルルウも両目をしつかり開けた

「え…これって」

「ああ、取られた粗だな」

倉の前にはモロ口芋などが入った俵が積んであった
「何で、あ！ もしかしてほらエルルウの幼なじみつて言ひヌワンギが！」

彼なら藩主の息子なんだからどうとでもなるだひつし

しかしハクオロの意見にテオロは首をふる

「アンちゃん、アンちゃんはお人好し過ぎるぜ。エルルウならともかくアンちゃんは昔のあいつを知らないで、よくそんなことが言えるよな」

言われて思い返すと確かにハクオロにはヌワンギにいい思い出はないが、しかしだからと言ってそこまで悪い印象もない

確かに偉そうな態度と自分勝手なところはあったが、ウマ（ウォプタル）に踏まれたり肥溜めにはまつたりと可哀想なところを見ていたので、むしろ多少同情する

それに…エルルウ泣かせたりしたのはムカついたけど、慌ててたしエルルウを悪いようにしたいわけじゃないと思うんだよね

「でも、エルルウは信じてるんだよね？ なら僕も信じるよ」

何より家族が、信用する人が信じる人なら、少しくらい無条件に信じてもいいと思うんだ

「……はい」

「ま、エルルウの気持ちは分かるしアンちゃんの理屈も一応分かつた。だがな、あいつはもう昔のあいつじゃねえんだよ

「……」

まあだからってヌワンギのことはよく知らないし、エルルウが信じるってだけでエルルウと同等に好きになつたり信用するわけじゃない。ていうかそれは無理

「にしてもさつ、ヌワンギじゃないならなんで戻ってきたんだろうね？」

「さあてね。ワシらを哀れんだ優しい方が恵んでくださつたんじゃ
ろ？」「

「は？」

いつの間にかハクオロの後ろにいたトウスクルはそう言つと、テオ
ロを始めとする集まつてゐる男たちに倉にいれるよつ指示をする
「トウスクル、これ誰がやつたか知つてゐるの？」

「ワシが知るわけなかろうて」

「……うん…… そうだよね」

ただ、ハクオロには一人だけ心当たりはあつた。トウスクルに恩義
があり慕つていて、身のこなしがまるで賊のように素早い人物を、
一人だけ知つていた

勿論確証はないが、しかし何となく正解だらうと思つ。ただの勘だ
けれど

「ふわああ……」

アルルウはもう飽きたのか欠伸をした

「ああ、アルルウもう戻つて寝なよ。いい子は寝る時間だよ」

「……ん」

「ほらエルルウも」

「あ、はい……ハクオロさん」

素直に戻ろうとしてエルルウはピタリと止まると振り向く

「ん？」

「それつて私も子供つてことですか？」

「え、いやそんな他意は……。というかほら僕、エルルウと同じくら
いかむしろ世話になりつぱだし下かなみたいな？」

「……別にいいですけど」

ふう。エルルウは怒らせると怖いんだよね。お母さんの存在だから
食事減らされても困るし

「ん？」

エルルウの背中を押して家に帰ろうとして、ふと視線を感じてハク
オロは振り向いた

「……あはっ」

何も見えなかつた。ただいつも通りの山の姿。だけどただ何となく笑つた

ありがとウ

「？ どうかしましたか？」

「ううん。行く」

「…………」

ハクオロは「」ちを見て笑つた

ありえない。この距離、そして気配を完璧に絶つてゐるのに気づくなんて

何者なんだ…あいつは

「ドリイ、グラア行くぞ」

「はっ」

暗闇の中、外套を翻し男は一人のお供を連れて去つた

騒がしくて目を覚ますと、何故かテオロがハクオロの部屋にいた
あ、もしかしてまた酒盛のお誘いとか…
エルルウがちらりとハクオロを見ると、恥ずかしくて思わず下を向
いてしまつた

夕食の時もだが今も、ハクオロに思いきり泣き付いたことが恥ずか
しくてあまり視線をあわせられなかつた

「テオロさんも…どうかしたんですか？」

だからテオロに問掛けたのだが

「ああ、ちょっとアンちゃんに用があつてな。行くぜ」

と何となくはぐらかされてしまつた。テオロが呼びかけるとハクオ

口は面倒そうに頷いた

「ん~、分かつたよ」

嫌だ。と思った。行つてほしくはない

泣いて泣いて、抱きしめられた体温は心地よくていつまでもそういう欲しかつた

エルルウはハクオロが好きだつた。優しくて頼りになつた。子供っぽく甘えたりするところも可愛いと思つた

最初はちょっと気になるだけだつた。だけど一緒にいて、家族だと言われて、笑いあううちに、どんどん好きになつていた妹のアルルウに嫉妬したりして自己嫌悪したりする時もある

「ん」

「ん？」

ハクオロが部屋から出ようとすると、アルルウがきゅっとハクオロの服の裾を掴んで甘えた声ですりよる

「アルルウも…行く。おに～ちゃんが行くなら、アルルウも一緒に行く

羨ましい。私もアルルウみたいに素直になりたい。私だって、好きでこうなんじやない

「え、眠いでしょ？　いい子だから待つ」

「や！　アルルウも！」

ハクオロは困つたふうにしながらも頬は緩んでいる

もう！　ハクオロさんは、いつもアルルウに甘いんだから…

「別にいいじゃねえか。すぐそこだ。エルルウも来るか

「あ、はい」

「もう…一人とも明日起れなくても知らないよ」

呆れたように言うハクオロに、エルルウはムツとして小さく呟く

「…ハクオロさんに言われたくないません」

ハクオロは毎日わざとかと疑いたくなる寝ぼけっぷりを見せてている。

エルルウはそこも可愛いとは思つが、そんなハクオロに子供扱いされるのは感に触る

「え？ 何か言つた？」

「何も？ ね、アルルウ？」

「ん~」

アルルウはそんなエルルウの気持ちを知つてか知らずか眠そうに目を擦つていた

倉の前に来たとき、驚いてエルルウはアルルウの手をギュッと握つた
「え…これって」

ハクオロがエルルウとアルルウの気持ちも代弁するよつてオロ口に問う

「ああ、取られた粗だな」

倉の前にはモロロ芋などが入つた俵が積んであつたのだ

もしかして…ヌワンギガ？

エルルウは優しかつた幼なじみを思い出した。そしてそれにハクオロも考えついたのか

「何で、あ！ もしかしてほらエルルウの幼なじみつて言つヌワンギが！」

と言つが途中でテオロが首をふり遮つた

「アンちゃん、アンちゃんはお人好し過ぎるぜ。エルルウならともかくアンちゃんは昔のあいつを知らないで、よくそんなことが言えるよな」

エルルウはすきりと胸を痛めた。本当に、昔は彼も優しかつたのだ。昔から意地悪なところもあつたし、偉そうな物言いをしていたふしもあるけれど、それでもエルルウの手をひいて歩いて、守ってくれると言つた笑顔は嘘じやなかつたはずだ

「でも、エルルウは信じてるんだよね？ なら僕も信じるよ」

ハクオロはにつこりと何の曇りもない笑顔でそう言つた
凄く嬉しかつた。ヌワンギはハクオロに対しても失礼なことを

平氣で言つたのに、それでもエルルウが信じるなら信じると、そう言つたのだ

それだけエルルウを信用してくれているのだ。とても、嬉しかった。
だけど同時に少し悲しかった

ハクオロは信じてくれるのに、ヌワンギを信じきれない自分と、やっぱりエルルウの期待を裏切るヌワンギが、悲しかった

「……はい」

「ま、エルルウの氣持ちは分かるしアンちゃんの理屈も一応分かつた。だがな、あいつはもう昔のあいつじゃねえんだよ」

「……」

分かっている。昔は、あんな風に村を貶めるような言い方をしたりしなかつた

変わってしまったのだ

「にしてもさつ、ヌワンギじゃないならなんで戻ってきたんだろうね？」

エルルウの雰囲気を察してかハクオロが明るく言った

「さあてね。ワシらを哀れんだ優しい方が惠んでくださったんじやろうて」

「は？」

いつの間にかハクオロの後ろにいたトウスクルはそう言つと、テオロを始めとする集まっている男たちに倉にいれるよう指示をする
「トウスクル、これ誰がやつたか知ってるの？」

「ワシが知るわけなかろうて」

「……うん……そうだよね」

ハクオロの反応にエルルウは首を傾げる

何かしら？ ハクオロさん、何か知ってるのかな？

「ふわああ……」

エルルウはもう飽きたのか欠伸をした

「ああ、アルルウもう戻つて寝なよ。いい子は寝る時間だよ」

「……ん」

「ほらエルルウも」

「あ、はい……ハクオロさん」

素直に戻ろうとしたが止まってハクオロを振り向いた。今の話の流れは少し聞き捨てならない

「ん？」

「それって私も子供つてことですか？」

「え、いやそんな他意は……。というかほら僕、エルルウと同じくらいかむしろ世話になりっぱだし下かなみたいな？」

慌てるハクオロの態度にエルルウは逆に少し不審だと感じるが

「……別にいいですけど」

と流す

ハクオロさん、何だかんだ言つて私のことすぐ子供扱いするのよね。そりや、時々は……頼れる年上な雰囲気があるけど、でも私と年はそういう変わらないんだから、止めてほしい

「ん？……あはっ」

ふいにエルルウの背を急かすように押していたハクオロの手が止まり、聞こえた笑い声にエルルウは振り向いた
しかしハクオロが顔を向ける先には特に何も見えなかつた。ただいつも通りの山の姿

「？　どうかしましたか？」

「ううん。行こう」

ハクオロはそう言って微笑むとまたエルルウの背を押した

ユズハの病

クスリ

すでに何度ハクオロが足を運んだかは分からない

ユズハはハクオロと初めて会ったころの、本当に今にも消えそうなか弱い笑みとは違い、かすかにだが生命の灯を感じる微笑みを見せるようになっていた

「あは、でさエル」

「ハクオロ、もう帰るぞえ」

話を続けようとするとトウスクルがやってきた

「あ、もうそんな時間か」

「トウスクル様：行かれるのですか？」

「うむ、またすぐに来るでな」

トウスクルが優しくユズハの頭を撫でる

「じゃあユズハ、またね」

「はい」

トウスクルと交代するようにしてハクオロはユズハの頭を優しく撫でる

「……はい。また…。ユズハも…お見送りします」

「だ、駄目だ駄目だ！安静にしているんだユズハ」
起き上がろうとするユズハをオボロが慌てて制する

「でも…」

「ユズハ、頼むからあまり兄を困らせないでくれ」

「…………はい」

僕はユズハの兄じゃない。だけど、だけど大切な友人なんだ

「トウスクルは先に帰つててよ。僕はオボロに…大事な話があるん

だ

「あ？ 僕は別に話なんて…」

「ね？」

「…ふむ、分かつた。夜明けまでに帰るんじゃよ

「分かつた」

トウスクルが奥に消えたのを見てからハクオロはゆっくりとオボロに向き合う

「？ 何だよ？」

「ユズハのことだよ」

『ユズハ』と聞いてオボロは表情を変える

「……何がいいたい

「決まってるよ。ユズハを自由にしてあげる」

「黙れ… これは俺とユズハ… 家族の問題だ。他人のお前が口を挟むな」

「僕はユズハの友達だ。友達のことを思うのは当たり前だよ」

「俺はユズハのことを思つて言つてるんだ。こいつするのがユズハのためなんだ」

「日の当たらない部屋で何も、友達なんて簡単な言葉も知らない。それがユズハのため？」

そんなの認めない。あんな風にユズハをベッドに縛りつけることがユズハのためなんて、あんな顔をさせることがユズハのためなんて、認めない

たとえユズハが仕方ないと言つたって、認めないんだ

「黙れ！ ユズハはな、強い陽射しに弱いんだ」

「たとえ陽射しによつてその命が短くなつても、自由に生きたいと思うんじゃない？」

それに陽射しに弱いつて言つても、受けた途端溶けたりするわけじゃない。むしろ病氣と言つたつて適度な陽射しは体にいいはずだ

「黙れ黙れ黙れ！ 貴様にユズハの何がわかるんだ！」

「君がユズハを外に出さないのは… 君のすることを知られたくない

いだけなんぢゃないの？

「つ！」

「お前は義賊なんて自分自身を誤魔化して、他も誤魔化して、最後はユズハをも誤魔化すつもりか！ それがユズハのためと言つたりか！！」

「黙れ！…」

虫の鳴き声が、耳障りに鳴いていた声が消えて代わりにチリチリと身が焦げるような圧迫感に、ハクオロはぐつとその発信源であるオボロを睨む

悪寒が走り本能のままにハクオロは後ろから襲いかかる圧力に身を屈める。同時にハクオロの首があつた位置に一閃が横切る

「つ…はあつ…」

人の首を撥ねるのに何の迷いもない真っ直ぐな太刀筋。ハクオロが避けなければ確実に今頃ハクオロの頭は転がっていたらう

「やるな。今のを避けたのは貴様が初めてだ」

言いながらオボロは一本目の刀を構える

式刀流！？

そして間を開けずにハクオロに容赦なく刃を落とす

「あつ…」

式刀流といふことに氣をとられ、ハクオロの反応は一瞬遅れた。それは、オボロにとつては致命的な一瞬だ

「がつあ！」

どんなにハクオロが早かろうと、一瞬遅れのハクオロの腕にはしつかりとオボロの刃により傷を刻まれた

しまつた…。オボロ相手に氣をとられるなんて、死ぬようなものだ。次に氣をそらせば…死ぬ

腕に焼鍛を押しあてたよつた熱さが広がり、そして急速に冷たくなつていく

指先の感覚は無くなる。ほたりとあふれた血がやけに重く地に落ちていく

「今ならトウスクル様に免じて許してやる。さつきの発言を取り消して、地にひれ伏せ」

ハクオロはゆっくりとオボロに見せるように傷を舐める

「はつ、こんな傷舐めれば治るだ。それより『さつきの発言』？」
それって、お前が『コズハ』と言ひ乍の愛玩動物を飼つてゐるってことか？」

「殺す」

静かに宣言したオボロは音もなくハクオロに飛びかかる。しかしハクオロは慌てずに、先ほどすすった血をオボロの目に吹きかけた

「ぐあっ！？ 貴様！」

オボロは目を擦るがそんな簡単には拭えず、依然としてオボロの視界は赤く何も見えない

「血つてのは意外と粘着力があるので。擦つても簡単には拭えないよ」

むやみに剣を振り回すオボロにハクオロは狙いを定めて、強く、一撃を決めた

たつた一撃、けれどオボロは倒れ、もがき立ち上がるつとするがまた倒れてしまう

「くつ……なんだ……体が言つことを……この程度でつ……」

「面白いでしょ？ 世界がぐるぐる回つてそのくせ体は泥みたいに重い」

「き、貴様！ 何をした！」

「ちょっと、『搖さぶつた』だけだ。君は感覚が鋭いから尚更キクでしょ？ しばらくは立てないよ。じついう戦い方だつてあるつてことを憶えておくんだね」

オボロは吠えるがやはり動けない。しかしハクオロも眩暈を感じてふらつく。腕からは血がしたつている

無茶しすぎた…か。でも僕は、間違つたなんて思つてない。正しいかなんて分からぬけど、後悔なんてしない

「気はすんだかえこのバカタレ共」

その時、トウスクルのいつも通りの怒ったような呆れたような声がした

「少し染みるえ」

言いながらトウスクルはハクオロの傷に液体を塗る

「つ！？」

「どこが！　どこが少し！？　え、なにこれ詐欺？」

「ほれ、これで二人とも手当は終わりじゃ。全く、バカなことしあつて」

「あはは…ごめんねトウスクル。ありがとう」

オボロはじつと口をつぐんでいたが、やがて口を開いた
「分かっていた…言われずとも、分かっていたさ」

それはそうだ。オボロは何より妹、ユズハのことを優先して考えている。ユズハの命か望みか、考えないわけがない。その結果に命を選んだからって、望みを叶えたいと思わないわけがない
ユズハも分かっているから従うのだろう。だけどハクオロは嫌だつた。自分勝手だと知っている。ただハクオロ自身がそんな二人を見るのが嫌だった。それだけだ

「若様！」

オボロの部下であるドリイとグラアが走ってきた

「ユズハ様が！」

「トウスクル様お願いです！　ユズハ様を助けてください！」

3人は一斉に走りだしながら二人の話を聞く

「若様が出られてからすぐに熱がでて」

「どんどん酷くなつてくみたいでもう意識が…」

ユズハの部屋に乗り込むとユズハはぐつたりと息も絶え絶えに、普段以上に虚ろな目をしていた

「くそ！　なんでもつと早く言わなかつた！」

「すみません！ ですが若様の姿が見当たらなくて…」

「くそ！ ユズハ… ユズハ！ これは… ユズハから光を奪つた… くそ！」

オボロが手を握るが何の反応もない。トウスクルは黙つてユズハを触診する

「トウスクル様！ お願いです！ どうか！ どうかユズハをお救いください！」

土下座をするオボロにトウスクルは険しい顔をしながら

「このトウスクル、命にかえてもこの子を見捨てるような真似などせぬ。これを見るがええ」

と言つて自身の首飾りの玉を割り、中から紫色の粉をだした

「琥珀アーバーを粉末にしたものじゃ」

ハクオロの知識と異なる粉末にハクオロは首をひねる

琥珀にしては色が変じやない？ 紫色の琥珀？

「紫琥珀アーバーハーというもののじゃ」

分からずにハクオロは見分けがつかないドリイグラアに尋ねると、どちらかは分からぬが神妙な顔で

「それつてまさか… その一欠片で一生遊んでくらせるつていう、あの紫琥珀」

と言つた

なんでそんなものを… トウスクルが持つてるんだ？

トウスクルは普段ハクオロが見てているエルルウの手際とは比べものにならない、素早く無駄のない手つきで薬を調合しやうに紫琥珀の粉末をいれ、オボロに渡す

「ユズハに湿らせるよつて飲ましておあげ」

「はい」

優しい、壊れものを触るような優しい手つきでオボロはゆっくりゆつくりユズハの口に薬を入れる。段々とユズハの呼吸は收まり、はた田にも普通に眠つてているよつになつた

「峠は越したようじやな」

「ありがとう」
「トウスクル様！」

「しかし…あのまま逝つた方が楽だつたかも知れん」

「なつ、何を…」

「よくお聞き。ユズハのこの発作は、これだけではおさまらないよ。一度三度と、何度もこの子の命がある限り、この子は苦しみ続けるんだ」

「しかしこの薬があれば…」

するがるようなオボロにだがトウスクルは首を横にふる

「紫琥珀は高価じや。ワシの持つてるぶんではあと数回が限度。その時は、覚悟せい」

オボロはぼたぼたと涙を流す

「そんな…。とても素直で、優しくて、虫一匹殺したことのないこの子に、いつたい何の罪が…っ！　くそ！　くそおおつ…！」

涙はシーツを濡らす。ゆっくりとユズハが目を開けた。ハクオロはさつとオボロの口に手をあてて黙らせる
ユズハには、知らせられない。まだこれからなんだ。これからいくらだつて楽しいことはある。なのにいきなりそんな…そんな希望を奪つようつることは言えない

「あ…」

「気分はどうじゅ

「トウスクル様…？　お帰りになられたのでは？」

「…ちょっと忘れ物しちゃつてさ。話こんでたんだ。起こしてごめんね」

憶えてないんだ。発作を起こしたことすら。じゃあ尚更、教えられないよ

「ハクオロ様…いえ、ユズハは、大丈夫です。とっても…気分がいいんです。こんな気分、久しぶり」

「そうかい。じきによくなるからね」

「うん。大丈夫。すぐに元気になるよ。治つたら何しようか。やりたいこととかある？」

「コズハは…思いつきり走つてみたいで。いい香りのするお花畠の中を、思いつきり」

嬉しそうに言うコズハに、オボロは涙が止まらない。だがそれでは困るのだ。ハクオロはコズハに気付かれないようにオボロに耳打ちする

「笑え。コズハに悟られるな。コズハのことを思つてるんだり？悲しませたくないんだろ？」

「…は、はは…はしゃぎすきて…転ぶなよ」

「ふふ」

コズハは楽しそうに、さつきの苦痛の顔が夢だったように、綺麗に微笑んだ

「トウスクル…僕つて駄目なやつだよ」

「なんじや？」

帰り道で、オボロと別れてからハクオロはそつこぼした

「オボロには、偉そうなことを言いながら…」

本当にコズハの意思を尊重したいなら、全てを話して選ばせるべきだ。なのに僕は、表面だけを取り繕つて…最低だよ

「ハクオロ、物事に、答えなんてないんじや。正しいとか正しくないとか、そんなものは所詮他人が後から判断したにすぎんじゃからな、とにかく後悔をしないように、みな精一杯生きるんじやよ」

「…」

「後悔しとるか？」

「…いや、後悔は、しない」

もう一度今日をやり直したって、きっと僕はオボロに喧嘩を売つて、コズハには隠すと思う

「ならええ。ワシとて万能ではない。じやから毎日、一生懸命に後

悔しないように生きてる。長く生きたが、まだ答えなんて一つも分

かりはせんよ」

「…そつか

「ああ

大丈夫。僕らは、生きてるんだ。明日死ぬかも知れない。そんなのは誰にだって言える。僕だって明日崖から落ちたりして死ぬかも知れない

ただユズハはその確率が高いというだけ。同じなんだ。だから、同じようにすればいい。同じように、自由に生きればいいんだ

日常になつた日々。集落の姉妹編（前書き）

久しぶりに更新します

最近は『おさなく』が滞つてますが、中々手がまわりません
少しずつ更新したいと思います

エルルウは朝ごはんを作るとハクオロの部屋に入りハクオロを起こす

「起きてください」

「……？」

エルルウに揺すられて起き上がったハクオロは目を擦る

「美人になつたね」

「……え！？」

つて待つて！ ハクオロさんはいつも寝ぼけまくるんだから、真に受けちゃダメよ私！

「にしてもアルルウ、しばらく見ない間に大きくなつたねえ。まさに三日会わねば刮目なんたらつてやつだ

やつぱり…

エルルウはハクオロの寝ぼけっぷりにいつものことと言ふため息をついた

「……ハクオロさん、寝ぼけてないで起きてください」

「ん？ 何が？ 僕起きてるよ。そろそろ晩御飯の時間だし帰ろつ

よテオロ。ソポクが待ってるんじゃない？」

「わかりましたから、朝ごはんにしますよ」

手をつかんで起き上がらせると素直に立ち上がるハクオロ。そのまま手を引けば普通に歩くし話し方もはつきりしていて目も半分している

「ありがとうエルルウ」

何処からどう見ても半日なこと以外起きていて、寝ぼけているのも演技なのかどこまで本気か分からない

「……起きます？」

「勿論だよオボロ」

誰ですか…まあ村の誰かでしょうけど

最近人数が増えたばかりなのでエルルウに全員の名前はまだ分から

ない

「おに～ちゃん、起きた？」

アルルウがとてとやつて來た

「いつも通りよ」

「アルルウが連れてく」

アルルウがエルルウとは反対のハクオロの手を掴み、さつさと居間に連れて行く

力無く握られていたエルルウの手はほどけた

「ちよつ…もう」

エルルウが肩をすくめながら居間に行くとハクオロが定位置に座り、アルルウはハクオロの膝の上に座つていた

「ん～、おに～ちゃん起きて、ごはん」

アルルウがハクオロの朝食を器に盛り渡すとハクオロは半日のまま受け取る

「ん…ありがとうございます」

「アルルウはアルルウ、お姉ちゃんじゃない」

「ん…美味しいよアルルウ。アルルウはアルルウなんだ…アルルウはアルルウでエルルウはアルルウでトウスクルはエルルウ？…よくわかんないや」

「…おに～ちゃん」

「ん？ どうしたのアルルウ？ あ、おでこから角がでてるよ」

ハクオロはえい、と言いながらアルルウの額を人差し指で押す

「あれ…ない」

「最初からない」

ハクオロさん…いつもどんな夢見てるのかしら。人を見間違えるのはいいとして、頭の中にストーリーもあるみたいだし

「あれ～？ 成人するまで角はとれないんじや…」

「ない」

「そだつけ？」

本当に、時々凄く気になる

だがハクオロは田を覚ませば寝ぼけていたことは綺麗に忘れる

「いただきます」

「おかえりなさい、あ、それ爆発するから氣をつけ」

ハクオロの向かいに座り自分も朝食をとろうとするハクオロにそう言われた

意味がわかりません

「『忠告ありがとう』ぞこます」

「いやあ…アルルウ可愛いなあ。しかも一人に増えてるし」「増えてません！…はあ、寝ぼけてるから無駄だと分かってる…分かってるけど、ツツ ノミたい！ ああもうハクオロせんたら！どうしてそう意味不明なのよ！」

エルルウはもんもんとしながら朝食を食べた

「おに～ちゃん」

「…！ あ、おはようアルルウ。あれ、何で僕アルルウにほっぺた引つ張られてるの？」

ハクオロは目を半目から完全に開いてそう言った。アルルウはさらにハクオロの頬肉をひっぱる

「…ひはひ（痛い）」

「おおー」

さらにひっぱり、ハクオロのよく伸びる頬にアルルウは感嘆の声をあげた

「ひやっはひや（やつたな）？ ほひや（そりや）ー」

「！ ～～

アルルウの頬を伸ばしてハクオロは得意そうだ。アルルウはむつとして手に力をこめる

「つ、ひひやひ（痛い）！ ほつ（ちゅつ）、ひやひへひはひ（マジで痛い）！」

アルルウが手を離すとハクオロは両手で赤くなつた頬を涙目で押さえる

「う～…アルルウ、実は僕のこと嫌い？」

「好き。アルルウおに～ちゃん好き」

「…えへへ、僕も」

ハクオロはいい子いい子とアルルウの頭を撫でる。アルルウは嬉しさから微笑む

おに～ちゃんはいつも優しいから好き。おつきくてあつたかいから好き。アルルウが赤くなるまでつなつちやつても、嫌いにならなくて頭を撫でてくれるから、好き

おに～ちゃんはすぐ優しい。お姉ちゃんにもみんなにも優しいし頼られてたりする

でもおに～ちゃんはアルルウのおに～ちゃんだから、みんなに怒られてもアルルウと遊んでくれる

ちょっと自慢。でも、アルルウはおに～ちゃんが働いてる姿も嫌いじゃない

すぐ疲れるのはちょっと格好悪いけど、オヤジやみんながおに～ちゃんを笑つても、おに～ちゃんを中心いてるのが分かる頼られてるおに～ちゃんは格好いいから、頑張つて働いてるおに～ちゃんは好き

「アルルウは可愛いなあ」

「ん。おに～ちゃんも、可愛い？」

ソボクが言つていたのを思い出しそうみるとハクオロは固まつた。

アルルウは首を傾げる

「？ おに～ちゃん？」

「……僕は……僕は男なんだ。そりやまだテオロに比べたら小さいけど…可愛いなんて、可愛いなんて……しかもアルルウに…」

おに～ちゃん、またブツブツ言つてる。このあいだ言われた時はすごく怒つてた。でもアルルウはおに～ちゃんに『可愛い』って言われたら嬉しいのに、おに～ちゃんは嬉しいのかな？

「おに～ちゃん、アルルウいけないこと言つた?」

「……僕が悪いんだ」

「?」

「僕がこいつして畠仕事をしぶつて何かにつけ家でこいつしてゐるモヤシつ子だから駄目なんじょ! こつなつたらアルルウに『筋肉だるま』って言わせるくらい働いてやるう!」

ハクオロは一方的に宣言すると鍬やら農具を取り出す

「おに～ちゃん」

「じゃあ、行つてくるねアルルウ」

勢いはどこへやら、首から上だけにこり振り向くハクオロにアルルウは手を小さく振る

「……ん、行つてらつしゃい」

おに～ちゃんはちょっと子供っぽいけど、頑張つて強くて優しくて、アルルウの大好きなおに～ちゃんだ

トウスクルと一緒にいつもの待ち合わせ場所で待っていたハクオロ
はオボロらに気づくと気安く手をふる

「やつほー、調子はどうだい愚民よ」

「何様だ」

「ハクオロ様」

「貴様……酔つてるとか？」

不快に眉を寄せるとハクオロは緩んでいた表情を戻した

「まさか。ユズハの様子は？」

「……今日は安定している」

オボロにはいまだハクオロが掴めなかつた

見た目より子供っぽい言動。だけど悪いやつではなく、むしろ人の
ことばかり考えているのではないだろうか

仮面をつけていてもぐるぐる変わる表情からとても感情がわかりや
すく、好感が持てる

しかもいざと言つとき（一度ばかり戦った時）には口調から違い、
まるで別人のようにキリリとした顔で幼さはみじんもなく、武人もののふの
顔をしていた

「そつか、良かつたあ。じゃあ行こう」

無邪気に笑うその態度にはオボロが本気で命を狙つたことなどない
ようなもので、最初はひょうしぬけした

オボロはハクオロと出会つてからはリズムを崩されてばかりだ
ハクオロは大切な大切な妹、ユズハに近づくから、ユ
ズハをいとも簡単に笑わせるから、妬けた

けれど、楽しそうなユズハの様子と、敵視するのがバカラしくなる
ような能天気なハクオロを見ては、オボロからすっかりハクオロを
疑つたりする心はなくなつた

むしろ、口にはださないが奇妙な安心感がある

絶対にこいつは裏切らない、と

「おい待て、目隠しをしろ」

「えへ、いいじゃん。別に場所を知つたからつて情報売つたりせめこんだりしないよ」

「目隠しをしろ！」

ドリイとグラアはクスクス笑う。オボロにだって、ドリイとグラアにだって、ハクオロがそんなことをしないのは分かっている律義にツツコミを入れるオボロに嬉しそうにハクオロは笑つて

「冗談だよ【冗談】

と言いながら自ら進んで目隠しをつける

もう必要は感じないが、ハクオロがつけているのにオボロから目隠しはなし、と言つのは何となくしゃくだった

「それでいい…行くぞ。トウスクル様、足元にお気をつけくださいね」

「あはは…相変わらずトウスクルもててだね」

「ワシが若いころは、お前さんのような若い男が山ほど求婚にきたわい」

「あははははっ！」

「爆笑するでない！」

「そ、そうだつ、失礼だぞつ」

肩を震わせてオボロが言つたが、笑つているのは明らかだ。トウスクルは口元を歪ませる

「ふ…」

二人は杖で思いきり殴られた

「つ…！」

「～～お～～つ…！　トウスクル！　天才的な僕の頭脳がバカになつたらどうするのさ！」

「それくらいで変わるならどうに変わつてあるわい」

普段の様子からは分からないが、ハクオロは見た目よりはずつと頭がいい

トウスクルから聞いた限りでは本人が言つている程度には優れてい
るらしい。オボロは半信半疑だと言いながら、大半が真実だろう
と思う

ハクオロの動きはけして自分より上ではなかつた。けれど先に倒れ
たのは間違いなく自分

それは状況判断力によるものだと考えられる。土壇場での肝も座つ
ている

その変わりようは普段が演技かと思いたくなるほどだ

認めたくはないが、こいつは凄いやつだ。器もでかい。きっと何か
あつて怒つてもすぐに笑つて許すのだろう
笑うユズハを見ては、最近思うようになった
こいつになら、ユズハを預けてもいいかも知れない
勿論すぐに打ち消す

だが、俺の中でこいつの存在がでかくなつてるのは事実だ
「まったく失礼しちやうよ。さ、オボロ、早く行かなきや日があけ
ちゃうよ」

「…ああ」

仮面の上に口隠しをして笑う様は滑稽だけど、自分の顔に浮かぶ笑
みは別の種類だと理解していた

「ユズハ、散歩しない？」

挨拶もそこそこにハクオロはそう言った

言つている意味がよくわからなかつた。だつていつも歩くのは必要
最低限だけだから

「…え」

きょとんとするユズハにハクオロはにこにこ笑顔でさらりと誘おうと
するとオボロが噛みつく

「貴様何を巫山戯たことを言つてゐる!」

「あーうるさい。トウスクルもちょっとした運動ならいいって言つてたじやん。もしユズハが疲れても、おんぶすれば問題ないなーい！」

「おい待てこつ……う……」

さらに言おうとするオボロの口にトウスクルは何やら懷から出した布をあてた。オボロはバタリと倒れた

「え? ちょっと、トウスクル何を……」

「こやつは疲れどるんじやよ。ドリイグラア、休ませてあげ

「は、はい!」

「? ハクオロ様、何かあつたんですか?」

だが目の見えないユズハには何が何だか分からずに首を傾げる
「い……いやいやいや、何でもないよ」

何でしよう? 何だか楽しそう。ハクオロ様がいらっしゃると、
賑やかになつて楽しくなる

「あ、ユズハ、僕と一緒に歩かない?」

「……はい」

本当は、歩くだけのお散歩がどうして楽しいのかよく分からないうれど、でもハクオロ様が一緒なら、きっと何だつて楽しいゆつくりと手を繋いで外を歩く。ひんやりした空気が心地よく一人を撫でる

「寒くない?」

「はい、気持良い……です」

「良かつた。疲れてない? どうする?」

「ちょっとだけ……でも、もうちょっと、歩きたいです

「よし、行こづ」

「はい」

ハクオロ様は何気なく言つているだらつ『じづする』といふ言葉。

ユズハは、何だか凄く好き

ユズハはあんまり頭が良くないから、お兄様が決めてくれるのも嫌

だとは思わない。何よりお兄様がユズハを大切に思つてくれてるのが分かるから

でも、それでもハクオロ様がユズハに聞いて、意見を求めてくれるのは嬉しい

強引なところもあるけど、無理矢理じゃない。ユズハを気遣つてくれるけど、対等だ

いまならユズハにも分かる。これが『友達』なんだ
繋いだ暖かい手をユズハはぎゅっと握る手に力をこめる

「？ どうかした？」

「いいえ…ハクオロ様、あつたかいです」

「ユズハはちょっと冷たい、かな？ 念のため上着はおつておきな
よ。かけるよ」

「はい」

ハクオロが手を離してさつと一枚脱いでユズハの肩にかける。服にもハクオロの熱が残つていて、暖かい

「ありがとうございます」

「どういたしまして。また手を繋いでもいい？」

「…お願いします」

ユズハはハクオロ様と手を繋ぎたい。ハクオロ様に触れるのが好き。
でもきっとそれだけじゃなくて、目が見えないユズハのために手を
繋いでくれるんだ

「何言つてんのさ。僕が繋ぎたいからだよ。可愛い女の子と手を繋
いで喜ばないなんてのは男じゃないね」

「ふふ…」

ハクオロ様に可愛いと言わると、すこしだけドキドキする。発作
とは違つて、嫌じやないドキドキだ

「ハクオロ様、空の様子はどうですか？」

「月が黄色に輝いてて、たくさんの星が綺麗だよ。見せてあげられ
ないのが残念だ」

「でも…ハクオロ様のおかげで、想像できます…風を、感じます。

「いつも……素敵です」

「よし、じゃあもつと細かく説明しよう。真ん丸の月にはちょっとと陰があって、ボコボコだって分かるくらいはっきり光ってて親指の爪の大きさだよ」

ユズハの頭の中に、月が浮かぶ

「つさぎさんは……いますか？」

「え……あは、うーん、見えないけど、ユズハの中のお月様には住まわせてあげてよ」

「はい……寂しくないようになくてたくさんになります」

「ユズハは、寂しい？」

「いいえ……お兄様もみんな……ハクオロ様もいます。ユズハは……幸せです」

「あは、駄目だよユズハ」

「え……？」

「これから僕がもつともつと幸せにしてあげようと思つてるんだからうさ。幸せすぎて氣絶しないように覚悟しなよ」

「……はいっ」

きつとハクオロ様も具体的に考へてるんじゃないと思う。だけどハクオロ様といえば、楽しくなる

前よりも今日が楽しい。ハクオロ様が来るたびに嬉しい。だからその言葉は嘘にはならない

ユズハ、ハクオロ様のことはお兄様と同じくらい好き
ユズハが握る手に力をこめると、優しく握り返された

ハクオロの話はユズハの手に絵を書いたりしてどんどん続いた

ユズハがくしゃみをするまで、一人は並んで月光を浴びた

オボロの戦い

「糞つ、俺としたことがなんてドジを…」

わーわーと騒がしい城から、オボロは慌てながら出てきた
そしてそのまま林の奥に消えようとした時、武人が一人、現れた
「残念ですが行き止まりです。賊が忍び込んだことでしたが、
皇城の倉に手を出すとは大胆なことを。手荒な真似はしたくありません。
せん。大人しく投降してください」

一瞬警戒したが、相手が一人と知つてオボロは式刀を構えながらま
た不敵に笑う

相手は槍でリーチも向こうが上だ。しかしそれがどうした。オボロ
には、自信があつた

「たつた一人で、この俺を取り押さえられるとでも思つているのか
？」

「あなた程度、私一人で十分です」

「…何だと？ 俺をみくびるなよ」

「それはどちらの話でしょう。もつとも、さすがにその逃げ足には
追いつけそうにありません。

ですから捕まりたくないなら逃げることです。背を向け、尾を巻いて、全力で、相応の哀れな悲鳴をあげながら、ね

「巫山戯るな！ …こい」

オボロは刀を構えて追つ手に隠さず殺氣を向ける。相手は刀を向けられようとなんら慌てるこことなく、オボロの体を一瞥して言い放つ
「無駄なぜい肉のない均衡のとれた肉体。速さに重点をおいた戦術
を得意としますか

感覚が鋭く、武人としての資質も悪くない。おそらくほとんど負け
てない。自惚れ驕り高ぶるには、この上ない

そして驕りは、冷静な判断力を鈍らせる。相手との力量差を計れな
いくらいに

「弱い獣ほどよく吠えるつてな」

「その吠える獣に、何をしり込みしているのです？」

「こいつ……ただ突っ立つているように見えて隙がない……下手に飛込めば槍で串刺しか。だが……懐にさえ飛込めば

「……」

「……」

「！……ダアアツ！」

僅かな隙をつき一気に聞合いを詰める

「なつ」

だが、そこには既にそれを読んでいたかのように矛先が向けられていた

「くつ」

からうじてかわすが、槍の先が外套をかすめる

その瞬間

クン

槍に捻りが加わり、かかりがオボロの外套に絡みつく
そしてそのままオボロの体が一気に持ち上げられたかと思つと、唸

りをあげ地面に叩きつけられた

地がめり込み、地響きが起こるほどの衝撃がオボロを襲う

「カハツ！」

「いい太刀筋です。とても素直で、先が読めるほどの」

「つ……」

「あれを食らつてまだ意識が……」

少し驚いたようなベナウイだが、オボロはすでに全身が擦り傷や切傷で血にまみれていた

「名前を聞かせてもらえますか？ 私の名はベナウイです」

その名前には聞き覚えがあつた。侍大将の一人、ベナウイ

「……オボロだ。晒し者になる気はない。殺せ」

「……致命傷ではありません。運が良ければ逃げれるでしょう」「覚悟を決めたオボロだがベナウイはあっさりとひるがえす

「な……待て！ 情けをかけるのか！」

「……私が手をかける価値もありません。そんなに死にたければ、そこで寝ていれば他の者が先を争いその首をあげるでしょう」「待て！」

「それでは……いざれまた」

「待て！ 待てよ！！」

言うが早いかベナウイはさっさと闇へと消えた
静かな闇に包まれて一人残されたオボロは、地面に伏したままダンツと地面を殴つた

「つ……くつそおおおつ！！」

何度も殴る。手から血が出た。まだ、殴る
沸き上がる衝動は止まらない

苛立ち、憤怒。怒りで頭が爆発しそうだ。悔しくて悔しくて、目眩がする

「 ッ！！」

オボロはただ、吠えた

「たつらう～」

とても楽しそうにアルルウは身の丈に合わない、大きな大きな袋を振り回しながら森を進む

そのすぐ後ろをやや不安そうな顔のハクオロがついて歩く

「…本当に、やるの？」

「ん。頑張つたぶん、ハチミツ美味しい」

そう、二人は今日ハチミツ取りに来ていた

「はい」

袋を受け取る。役割はアルルウが煙でいぶして、ハクオロが直接ハ

チの巣を別の袋にいれるのだ

勿論、取る係のハクオロの方がさされるのは明白だ

「……アルルウ、ハチミツ好きだよね」

「ん。大好きい」

につこり笑うアルルウ。可愛い。とても可愛い。身内びいきを抜きにしたつて可愛い

だからこそ、『兄』であるハクオロには期待を裏切れない
こ…これが愛か…

「分かつ…！」？

覚悟を決めて袋を被るうとするとガサリと派手な音がして人影が現れる

反射的にそれからアルルウを抱きしめかばうが、すぐにそれが知つたものだと知る

「つオボロ！？」

「…あつ」

血まみれの彼は力尽きたのか膝をつぐ。さらに時間をあけずに騒がしい物音が近づいてくる

「！ オボロ、中へ」

大きな大きな袋にオボロをつつこみ、はみ出る部分にはもう一つをかぶせる

「おいお前たち！」

間一髪、オボロを袋に詰めた途端に森から武器を持った兵士たちがやつてきた

「何ですか？」

アルルウを片手で抱きしめながら聞くと、兵士たちは怪しい男が来なかつたかと聞く

「来てませ…アルルウ？」

袖をひくアルルウに何事かと問いかける。ハクオロにとつてむさくるしい兵士たちと話すよりアルルウに対応するほうが大事なのは当たり前だ

「あつち」

アルルウは森のある方向を指差して言つ

「あつちに、何かいる」

「あつちだな。行くぞ！」

兵士たちはアルルウの指差した方へと突撃する
そつちつて…僕らの目的地じやありません?

アルルウを見ると平然と

「嘘じやない」

と言われた。それはまあ、向こうに怪しい人物がいたなんて言つて
いない

「ぎや！ 隊長！ ハチが！」

「怯むな！ 突つ込め！」

ぎやーぎやーと悲鳴は段々遠ざかる

アルルウは生まれながらに策士だ。とハクオロが密かに汗を流した
のは秘密だ

「オボロ、大丈夫？」

「…ああ…助かった。俺はもう…行つ…はあ」

「駄目だつて、凄い傷じやん」

「俺はこれ以上…お前らに迷惑を…」

「怪我したままうろうろされるほうが迷惑だよ。せめて手当てくら
い受けなよ。なんと稀代の薬師トゥスクル、の孫アルルウがいるん
だからさ」

「ん…痛そう」

「……だが…」

迷うオボロにハクオロは切札をだす

「君にはユズハがいる。ここで死ぬわけにはいかない。そうだよね
？」

「…すまん」

素直に折れたオボロにハクオロはため息をつく

システムだなあ…ま、僕だつてアルルウには弱いけども

「おばあちゃんやお姉ちゃんほど、つまらないけど…」

アルルウがきゅっと包帯を結びながら言つ

「いや、だいぶ楽になつた。ありがとう」

「…ん」

オボロはややよろめきながら立ち上がるが、止血をして休んだから
か顔色はマシになっている

「ねえ、本当に大丈夫なの？」

「当たり前だろ。よし、俺あもう行くぜ」

大丈夫。彼はとても強いから。だからあんな兵士には見つかること
すらない

「……氣をつけてね」

「ああ」

大丈夫

オボロを見送つてからアルルウとハクオロは顔を見合わせる

「大丈夫…？」

「大丈夫。彼は強いから」

大丈夫大丈夫大丈夫

本当は、送つて行つてあげたい

でも、巻き込まれたら… もしアルルウたちまで巻き込んだら…

そう考へると、恐かつた。だからハクオロは見送つた

弱いのは自分だと分かつている。ただの言い訳だ。それでも万が一
を思つと、恐い

「ハチミツ、とる？」

「…ん！」

血にぬれた袋は仕方ないのでアルルウはかぶったがハクオロはかぶ
らずに行うことになった

.....
超
痛
い

「これは悪い夢だ…

「おら！ セツセツと運びだせ」

「ヌワング？ 何してんの？」

食物庫を出入りする兵士に命令するヌワングに騒ぎを聞き付けやつてきたハクオロが尋ねた

「あ？ 見てわかんねえか？ 徵税だ」

ハクオロが大嫌いなヌワングだが顔を見ては殴りかかる趣味もないで仕方なく答える

「……あれ？ この前もしなかつた？」

「増えたんだよ」

「ちょっと待つてよ！ 何でそつなるのさ…」

「うるせえ！」

「貴様！ ヌワング様に失礼だぞ！」

ハクオロに兵士が槍をつきつけるがヌワングがにやりと笑いながら止める

「はつ、しかし…」

「こいつは俺の獲物だ。てめえら手え出すんじやねえぞ」

「はつ！」

兵士が敬礼するのを見てからムカついたのを我慢するつもりはないヌワングは、ハクオロに殴りかかるがハクオロはひょいと避ける

「くつ！ この…」

元々動体視力がいいハクオロは農作業などで力もついたのでヌワングの拳をかわすのは簡単だった

「人の話聞こうよ」

「うるせえ！ ムカつくんだよ避けるな！ 税増やすぞ！」

ぴたりとハクオロの動きが止まりヌワングは嬉しそうに笑う

「けつ、最初から素直にそうしてりや、いいんだよつ…」

以前で学んだヌワングは仮面は避けて鼻を殴る

「ぶつ」

怯むハクオロにさりに腹をなぐりよろめくハクオロを蹴りとばし、
地に伏すと何度もしつこくハクオロを蹴りつける

「くつ……あ……！」

痛い。だけど、避けたらみんなが苦しむことになる。偽善者を気取
りたいんじゃないけど、今、ほんの少し我慢するだけで辛い思いを
せずに済むなら、それがいい

「てめ！ アンちゃんになにすんだ！」

「うるさい！ 僕はここ の藩主の息子だ！」

「はは、大丈夫だよテオロ。僕丈夫だから」

騒ぎながらも、ハクオロが制すので誰も手をだすことができない
どうしてヌワンギはこんな酷いことをするんだろう？ 分からない。
エルルウと昔は仲良しだつたらしいのに、どうして？

前から疑問だった。どうしてヌワンギは、エルルウを泣かせるんだ
る？

僕に辛くあたるくらいなら構わないと思つ。だけどどうして村のみ
んなにまでキツイ態度なのか分からぬ

だって同じ場所で共に努力して共に生活する、家族じゃないか

それとも、ヌワンギにはもう過ぎたことで、僕はヌワンギを無理に
家族だと思い込むことはないのかな？

正直ヌワンギには会つ度に段々、エルルウと兄妹なら僕とも家族だ、
と考えようとするのに無理がでてきた

悪いやつじやないと思いたいのに、どんどん僕の中でヌワンギの評
価が下がって、どんどん僕の中にヌワンギに対する嫌な感情が出て
くる

「つ……！」

痛い。だけど、耐えられなくはない

「なー？ ハクオロさん！？」

いつの間にかハクオロの側にかけよってきたエルルウがハクオロを
かばうようにヌワンギに向かう

「う…エルル…」

「ヌワンギ！ どうしてこんな酷いことをするの…？」

キッと睨むエルルウにヌワンギは心底不思議そうに

「ああ？ 何言ってんだエルルウ？ 僕は藩主になる男だ。こいつ
らが俺のために働くのは当たり前だろ」

そう言う。エルルウは、信じられないほどばかりに顔を若干青く染め
て、問う

「…本気で、言つてるの？」

「？」

「ああ」

それに気付かずに頷くヌワンギ

「…止めて

「は？」

「…止めて…これ以上したひ…ヌワンギのこと、本当に嫌いにな
っちゃう」

囁くように、何より辛そうにエルルウが言つとヌワンギは口をあん
ぐり開ける

「な、何でだよ…」

「…分からぬの？」

「うるさい！ 良いから俺と来ればいいんだ！ こんな田舎くさい
ところは捨てろ！」

「いやっ

ヌワンギがエルルウの腕を乱暴に掴

「ヌワンギ、止めろよ。エルルウは嫌がってる。またエルルウを泣
かせたら、僕はお前を許さないぞ」

掴む前に、立ち上がったハクオロがヌワンギの腕を弾いた

「つ！ うるさいうるさいうるさい！ てめえ何様のつもりだ！
エルルウ！ いいから来い！ ジやないと粗を増やす！」

「…え…」

「止めるよー。」

「黙れつ！ エルルウ、お前が俺様のものになるなら税を減らしてやるよ。だから来い！」

「…本当に？」

いらっしゃった。そんなことを言い出すスワングギを嫌悪し軽蔑するし、迷うエルルウにだつて腹がたつのだ

「止めるよー。エルルウ、止める。増えたつて僕が払つてやる。そんな最低なこと、やめる！」

「つ…ごめんなさい」

すつと槍が向けられるが、ハクオロは冷たい目で兵士を一瞥する

「なんの騒ぎじゃ」

人波が引き、間をトウスクルが歩いてくる。ハクオロはゆっくり息を吐く

ああ、遅いよ。おかげで僕がでばつちやつたじyan

「げつ…ババア…」

「またお前さんか。懲りないねえ」

「う、うるせえ！ 僕様は昔とは違うんだ」

「ああそりだね、昔はもつぱいっと骨のあるやつだったさね」

「つ…」

「おじ貴様！ ヌワングギ様に失礼だぞ！」

槍をつきつけられるトウスクルだが顔色も変えず

「さつわと取るもん取つたら帰ればよから」

と言つて、兵士がさらにトウスクルに刃を近づけ

「いつ」

ゴツッと兵士の頭に石が当たつた。振り向くとアルルウが石を構えている

「おばあちゃんを離せー！ お姉ちゃんを離せー！ おとうちゃんをいじめるなー！」

さらにアルルウの手にはあまりのような大きめの石が投げられる

「こいつ…この、糞ガキつー！」

石を投げられた兵士が逆上してアルルウに向かい、槍を突きだす
その刃は何の容赦もなく、アルルウを突き抜こうと進む

「危ないっ！」

ハクオロは間に合つかどうかわからなかつたがとにかく体が動いて
いて

アルルウを
ギュッと抱きしめていた

間に合つた

ただそう思い安堵して、迫りくる痛みに覚悟した

ブシユツ　！

肉が裂ける嫌な音がして、生暖かい何かが、ハクオロにかかっていた

「…え」

広場はシンと静まり返つていた

ハクオロとアルルウが目を開けると、見慣れた優しい一対の瞳が、
二人の前にあつた

「トウスクル…？」

「おばあちゃん…？」

計らずとも同時に呟いた一人に、トウスクルは頷いた

「は、ババアか…」

兵士の毒づく声が響くように聞こえる

体中の血液が沸騰したような激しい怒りだった

世界が、色が、反転する

「おばあちゃん！ しつかりして！」

「あ…」

エルルウの声でハクオロは正気に戻る。怒りは消えないが、それよりトウスクルが大事だ

「てめ、何てことを！」

ヌワングギが血のついた槍を持つ兵士を蹴り飛ばす

「な、何を…」

ヌワングギはトウスクルの前で呆然としながら顔を真っ青にする

「ち…違うんだ。俺じゃない…俺のせいじゃ……っ撤退だ！」

ヌワングギは走りさつたが、それを気にかける余裕のある村人はいなかつた

「早くトウスクルを中に…」

武器をもて（前書き）

久しぶりの更新なのでおかしいところがあるかも知れません。
何かあれば直すので」一報ください。

武器をもて

「おばあちゃんしつかりして！　すぐ薬を」「ええんじやよ」

トウスクルの傷は深く、血は止まるどころか布団にいた今も床を濡らしていく

「でも」

「自分の体のことは自分で分かつとる。それより最後に…お前さん
の顔を…ようく見せとくれ」

「おばあちゃん…」

「やああ！　おばあちゃん死んじゃだめえ！」

「トウスクル！　駄目だ！　まだ…まだアルルウだつて小さいし、
それに僕だつてまだ何も返せてないっ！」

「なら、二人を頼もうかの」

「違うつ。　そうじゃないよ…。一人を守るとかそんなのは…家族
だから当たり前なんだ！」

「ああ…知つとるよ。じゃからわしも…そうした。なあに、わしは
もう十分生きたさ」

「つ」

「あの人と出会い、ハクオロが産まれ、可愛い孫にみとられるんじ
や。わしの人生も…捨てたもんじゃない」

「おばあちゃん、死んじゃ駄目よ。しつかりして」

「エルルウ…お前さんは死んだ姉さまにそっくりじゃ。ほんに…綺
麗な人でなあ…」

ゆつくりゆつくり、トウスクルは言葉をつむぐ。ただ側にいる」と
しかできない3人にトウスクルは微笑む。

汗を浮かべ、痛みから離別の悲しみから涙をこぼし、それでも
トウスクルは優しい笑みを3人に向ける。

「おばあちゃん〜」

「アルルウ…お前さんはな、若いころなわしにそつくりなんじや。ふふ…信じられんか？ わしだつて昔は可愛い可愛いと可愛がられたもんじや」

ふ、と昔を思つなりに息をはいてからトウスクルはアルルウの頭から手を下ろす。その手をアルルウとエルルウは強く握る。体から魂が抜け出さないように、強く。意味はないとしても、無意識に。

「『エルルウ』の名前は、姉様の名前じゃったんじや。お前ひらの名前は…そこからきたんじや」

「おばあちゃん…」

トウスクルが目を閉じる。

「おばあちゃん…」

「トウスクル！」

3人の声がかさなり、トウスクルは目を閉じたままで口を動かす。「大丈夫…まだ、大事なことを伝えておらん。それを伝えなきや、ワシや死んでも死にきれん…よ」

少しずつ不規則になる呼吸にトウスクルは深く息をする。顔色は小さな灯りのもとで分かるほどに白い。

「よおく…お聞き」

「いや！聞きたくないよ…言わないで、死なないでよ」

「エルルウ…」

僕だつて、それでトウスクルが死なないなら、僕だつて聞かないよ。でも…そうじやない！

「エルルウ、聞けよ。ちゃんと聞けよ…じゃないと…トウスクルが安心して逝けないじやないか」

「つ…でも」

「お姉ちゃん…」

アルルウが片手でトウスクルの手を握つたままもう片方の手でエルルウに抱きつく。

「…」めん、「めんねアルルウ、アルルウも辛いのに」

アルルウはふるふると頭をふる。

「いいかい、時には…言い争うのも、ええ…喧嘩してもええ…だけど、お前たちは唯一の肉親さね。…そつやつて…力を合わせて…いつまでも…仲良くするんだよ」

エルルウとアルルウは何度もこくこくと頷く。

「ああ…いい子だ。…ハクオロ」

「なに？」

「私の心残りは、この子たちじや。なあハクオロ、どうかこの子たちの側にいてくれ」

「いるよ。家族だもん。ねえトウスクル、あなたも勿論、家族だよ。大好きだよ。愛してる。ごめん、何も返せなくて」

「いや…返してもらつたよ」

「え」

「ありが…とつ。これからも…仲良く…するん、だ…よ」

「トウスクル…」

「エルルウ…アルルウ…元氣で、な…」

「おばあちゃんつ！」

「トウスクルつ！」

3人の呼びかけに、トウスクルは応えなかつた。

「う、ああうああつ」

アルルウが泣きじやくり、エルルウに抱きつく。エルルウもアルルウをぎゅっと抱きしめる。

「う…う…エルルウ！」

「…はい？」

ハクオロは涙をためながらトウスクルを迂回して一人に抱きついた。

アルルウは真つ赤な顔で泣きながらハクオロとエルルウに体をこすりつける。

エルルウはアルルウとは対照的に、真っ青な、トウスクルのように青い顔で、悲しみに染まつた瞳で眉をよせて、困ったように無理矢

理笑みをつくる。

「泣いてもいいんですよ。私は、大丈夫ですから」

「泣くよー 悲しいもん！ でも違うんだ、君も、泣くんだ」

「え…？」

「我慢しちゃ駄目だ。今泣かなきや、余計辛いんだ。泣いて」

「私は…」

「それに僕だって、君が我慢してたら…泣けないよ」

「……っ」

ぽろり、エルルウの頬に涙が伝った。

「あ…れ？ 駄目、私は…お姉ちゃんなんです。だから…」

「じゃあ僕は…君のお父さんでもお兄さんでも弟でも、何でもいいよ。でも、そんなの関係ないよ。家族なんだから、支え、あわな…きや、駄目、なんだ…」

もう…我慢できない。

「うああ…うひうひ」

ハクオロはせきをきつたようにボロボロと涙を流しだした。つられたように一人はさりに声をあげて泣き出す。

「うああああ」

数十分後、ようやく落ち着いて泣き疲れた二人を眠らせてから、ハクオロは家を出た。勿論ハクオロだってたくさん泣いたし、疲れてたけれど、やらなきやいけないことがあると分かっていた。夜の涼しい空気が泣いて熱い体を、目を、心を冷ます。

トスツ

ハクオロの側の木に、弓矢がささつた。
あいつが呼んでる。

「行かなきや……」

大切なことだからなおさら、自分の言葉で、しつかり伝えねばならない。

ハクオロは迷わずに足を動かした。

「……やほう、待つた？」

「トウスクル様は、どうなつた？」

殊更軽い調子で声をかけたが、待ち人　オボロは冷たく率直に尋ねた。

「……逝かれた」

ガツンッ

何の加減もない、ただ全力のオボロの拳がハクオロをとらえた。

「くあ……」

「聞こえないな。もう一度言つてみろ」

「つ……逝かれた！　トウスクルは、死ん」

二度、三度とオボロの拳がハクオロに向かつてくるが、ハクオロは避ける素振りすらせずに無抵抗にオボロの拳を受ける。

「聞こえないんだ！」

「ぐうつ……つ、死んだ。死んだんだ！」

殴られて倒れるハクオロの襟首をオボロが掴んで無理矢理立ち上がらせる。

「貴様つ！　貴様がいながら何をやつていた！　貴様が、貴様が殺したよくな」

「そうだ！　僕だ！　僕が殺したんだ！　好きなだけ、殴れよ。僕は、僕には何もできなかつた。僕が殺したようなものだ。僕が……」

「……俺は、お前が憎らしい。コズハは、お前のことばかり話す。その時は、いつも笑つている。部屋の外を気にして、ドアが開けば嬉しそうにして……けど、お前じやないと分かればすぐに暗い顔にな

る。お前が憎い。殺意すらわく

「…オボロ」

「けどな、お前がコズハを笑顔にしてるのは事実だ。俺自身、お前には救われた」

オボロはぎりぎりと歯を噛み締めて怒りで顔を真っ赤にしたまま、悔しそうに呟く。

「認めたくはないが…俺はお前に惹かれてた。そんな、そんなお前がいながら…どうしてあの人があんな死に方をしなければならないんだ！」

「…」

「答えるよー…………頼むから…何とか言えよ…つ」

「…」

「つ…………もういいー」

オボロは乱暴にハクオロから手を離す。ハクオロは、もう一度小さく謝罪した。

どうにもならないと分かつていて、自己満足と分かつていて、謝る以外に何を言えればいいかわからなかつた。

自分よりずっとトウスクルと付き合いの長い相手で、だけどあの姉妹のように泣くように言える相手でもない。

何よりハクオロは気づいていた。オボロの顔には悲しみよらずつと強い、怒りが支配していると。

「…あんたに、頼みがある」

オボロはハクオロに背を向けてそうきりだす。

「…なにかな？」

嫌な予感がする。

彼はいつだってまっすぐで、情に厚くて義理がたい。

「お前にしか、頼めない。預かつてほしいものがある」

「…なに？」

「ドリイ、グラア」

「はい」

草むらからドリグラが駕籠を一人で担いで出てきた。

「オボロ…君は」

「何も言つな」

オボロは駕籠を丁寧に開けて中からユズハを抱き上げた。ユズハは静かに寝息をたてている。

「ユズハを…頼む」

「…行くの？」

「トウスクル様は俺たちには親同然。俺は…親を殺されて黙つているほど、お人好しじゃないんでな」

「そんなことしたつてトウスクルは…」

「分かつていい。喜ぶどころか、けして俺を許さないだろ？」「それでも、行くと決めたのだろ？　まっすぐにハクオロに向けるオボロの視線は、もうハクオロが何を言つても搖るがない。だから、彼はユズハをここにつれてきたのだ。

「それとドリイとグラアもだ」

「若様！？」

聞いていなかつたのか驚くドリグラはオボロに駆け寄る。

「そんな！　僕たちも連れて行つてください！」

「駄目だ。これは俺の問題だ。お前らはここで辺境の民として暮らせ」

「そんな！？」

「とにかく、ユズハを頼む」

ハクオロは渡されるユズハを何も言わずに優しく抱く。

オボロはすっと装束を身につけて顔を隠す。そしてドリグラを置いて闇に消える。

僕は…、僕はまた、見殺しにするのか？

「ハクオロ様…」

「ドリグラ…僕は…」

省略して呼ぶハクオロだがそれはもう言つても直らないから気にす

るな。

「どうするんだ？」

「…え？ あ？」

振り向くと、集落の人々がいた。声をかけてきたのはテオロだ。

「テオロ…みんなもビリして」

「ん…」

「お、と。ドリグラ、コズハをひとまず鷲籠に」

ユズハが身じろぎをしたのでハクオロは慌ててドリグラに頼む。

「はい」

「よし。それでみんな…どうして…？」

「どうするんだ？ 村長」

「どうつて…村長？ え？ なんで…」

どうして僕を…そんな名称で呼ぶの？ それは、トウスクルの…。

「トウスクル様が全てを任せられたんだ。これからはハクオロが村長だ。」

「そうだよ。あたしらは、ハクオロについていくよ」

「な…」

人々の言葉にハクオロは絶句する。

考えてなかつた。次の村長なんて。しかも、それが僕だなんて。

「ついて…」

「あんちゃん、あんちゃんが一言言つてくれればいい」

「一言…」

人々が何を望んでいるのか。それは分かっている。だけど…それを本当に、言つてもいいのか？

僕に、本当に責任がとれるのか？

だけど、確かに僕にだつてある。トウスクルの敵討ちをしたいという気持ちが。

「これから始まるのは…喧嘩じゃない。始めたなら最後、戦になる。覚悟は、できるの？」

「当たり前だ」

「戦で被害を受けるのは何時だつて弱い者だ。それを僕らで決めて
…本当にいいのかな？」

例えば今も家にいるアルルウ。どこかの家で眠る話すこともできな
い赤ん坊。彼らの意見は聞いてない。

それにここにいるけどソポクたち女人の人も普段は頼れるけど、戦い
となると…。

「なんだい？」

ハクオロの視線にソポクは強く睨みかえす。

「まさか、女子供が…なんて思つているんじゃないでしょうね」

「…それも、考えた。でもそうだね、子供だからって一概には言
えない。アルルウなら喜んで乗り込むかも知れない。けど、歩けも
しない赤ん坊は？ 自分の意思を伝えることもできないのに、戦火
に巻き込まれるよ」

「…それは…」

ハクオロの言葉に多少ざわつく人々。

なんてことを言つてから、すぐに言い訳を考える自分に気づく。

「なんて…ね」

「は？」

「…はつきり言つよ。危ない。人がたくさん死ぬかも知れない。け
ど、僕は行く。行きたい。僕を本当に村長というなら、信じてくだ
さい。誰も死なないように頑張るから…」

「あんちゃん、分かつてる。俺たちみんな、分かつてる」
ハクオロが回りをぐるりと見ると、人々は順々に頷いた。

「…倉を開けろ！」

武器を、倉から武器を出すんだ！

人々の叫びが響く。

新たな始まり

「はあ…はあ…くそつ、くそー、俺のせいじや、俺のせいじやない！」

ハクオロが決意したじる、ヌワングは庭で何かに脅えるようにうづうづとしていた。

「…へ、だ、だいたいあのババアがそう簡単にくたばるかよ。」
けど、ずいぶん血が出てたな。…いやまさか！ あのババアだぜ？ 殺したってしなねえよ。

自分に言い聞かせるようにぶつぶつと繰り返し咳きながらヌワングは意味もなく庭でうるついていた。

ふと、月に照らされて己に重なっている建物の影が動いた気がして顔をあげた。

影が動いたのではない、影が、大きくなっていた。屋根の一部分だけが、人型に。

「誰だ！」

振り向きざまに屋根の上を見上げると、そこには黒の装束を身につけた男が一人立っていた。

「貴様に名乗る名などない！」

男 オボロは刃を抜くとヌワングに襲いかかってきた。だがすぐにヌワングは転がるようにさける。

オボロは体勢をたて直し、一気に片をつけようと

「敵襲だーー！」

その時、オボロが侵入してきた方向から大きな声がした。オボロは思わず振り向き舌打ちをする。

勿論、その隙を見逃すヌワングではない。すかさず踵を返し奥へ逃げ込む。

「つ、待て！ ～～ちつ」

ヌワングは侵入したところの兵を殺しに行こうかと一瞬悩んだが、

すぐにヌワンギを追いかける。

だがほんの一瞬でヌワンギは建物に飛込み、オボロは見失い慌てて辺りを見回す。

「どこだ！　出てこい！」

「こじだ。バカが、何処を探してやがる」

声に目標を定めるも、ヌワンギの隣にはササンテ、そして前には複数人の兵がいた。

「ふひや、おみやあが入りこんだ鼠にやもか」

「ふんつ、何人いようが関係ない」

全員、殺すだけだ。

「にやも、ワシにおみやあ」とき若造が勝てると思つてゐにやも？ 賢く優雅で気高く強い武人のワシに」

「はつ、愚かで下劣で臭みの強い肉、の間違いじやないのか？」

オボロの挑戦的な口調に余裕たつぱりだつたササンテは口元をひきつらせる。

「にやふ、余興には丁度いいにやも。…やれ」

ササンテの合図で素早く兵がオボロを囲む。

「つ、はつ」

オボロはけして弱くない。かなりの強さだし、この兵たち相手なら2対1だろうと負けはしない。だがこの人数 しかも統率のとれた兵 が相手となると楽勝とはいかない。

「はつ」

襲いくる剣をかわし、片剣でそらせながら反対の剣で反撃を試みるも、数多の剣撃は完全には避けきれず、少しづつオボロの衣服を、肌を、傷つけていく。

「くつ…はつ」

キン

一人の刃を弾き飛ばし、だが別の刃に阻まれる。

「はあ…はあっ」

息はあがり、体は重くなってきた。

だがまだやれる。どれも致命傷ではないし、まだ剣を持っている。体があり、刃があり、殺意がある。

必要最低限、だが、これは最も戦場で必要なものだ。

「はああああっ」

オボロの刃が兵を貫く。

「オボロッ！」

ハクオロたちが門を突破し辿りつくと、そこには血にまみれ数人の兵士に囲まれたオボロがいた。

倒れている兵士もいるが、それでもまだ兵はたくさんいる。

「つ！？ バカ！ どうしてきた！」

どうして、だつて？ そんなの、決まってるだろ。

「若様！」

囲んでいる兵をドリグラの矢が射抜く。

「御無事ですか若様！」

理由なんて、決まっている。

「なんだよてめえら。揃いも揃つて反乱かよ」

嘲笑じみたヌワンギの言葉に、しかし誰も反論しない。

不気味なほど静かに睨みつけるハクオロたちにヌワンギは唾を飲み込む。

不安になるヌワンギ。まさか、まさかだ。そんなことがあるはずがない、と、否定して欲しくてたまらないことを言う。

「へ、ババアが死んだわけじゃあるまいし、大げさだな」
早く否定しようと、思いながら。

理由は、みんなオボロと一緒にさ。

だから、その言葉を否定する人なんていない。それが事実だから、ハクオロたちはここにいる。

「おい、何だよ。何か言わねえのかよ。てめえら何黙つてんだよ」ただ、人々は怒りを瞳にこめて武器を構え、じつとヌワンギラを睨む。

ヌワンギの声が上擦り、汗が滲む。

「ウソつくな。あのババアが、ババアが死ぬわけないだろ」「この状況が」

ハクオロが、口を開く。その瞳は、やはり静かだった。

「この状況が分からぬほど、お前はバカなのか？」

そんなわけないよな。お前は、バカじゃないだろ。

冷たい、冷たい瞳だつた。普段からは想像すらできないハクオロの表情に、ヌワンギは反論しようとして、小さく咳く。

「そんなバカな…あのババアが死ぬはず…………」エルルウ

そしてヌワンギの視界に、愛しい娘が映る。

「エルルウ、エルルウッ、嘘だよなつ」

エルルウは、ヌワンギと目を合わさない。

暗い暗い目でうつ向いたまま、ヌワンギに答える。

「おばあちゃん…もう、動かない。何も、言わない…」

エルルウは涙はもう流さなかつたが、声は震えていた。

ヌワンギも、エルルウのこの態度には言い訳も反論もできないようだ。

「つ、そん、な…」

だが、ハクオロたちの重い空気なんて氣にしていない、全く場に合わない笑い声が宮全体に響く。

「ふひやひやひやひや！」

ハクオロどころか兵たちも一斉に声の主を見る。

高らかに、ササンテが笑っていた。おかしそうに、見下したように。「にやも、おみやあらお笑いにやも、死にぞこないのババア一人に

反乱にや もか「

その言葉にオボロは目を細め切りかかろうと

「やめろオボロ！ 一人で突っ込みすぎだ。下がれ！」

したが、ハクオロの叫びにオボロは動きを止めた。だがすぐにでも飛びかかりそうな体勢のまま怒鳴るように言い返す。

「ほつ といてくれ。こいつらは、この俺の手で…っ」

「オボロッ！ …」これは喧嘩じやない。戦なんだ。今は、僕に従え

「…つ、分かつた」

オボロは歯を食いしばりながらも頷き、ハクオロたちの元まで下がろうとする。

それを邪魔しようとする兵には、ドリグララ一人の矢が襲う。

「雨よ雨、赤く染まりし雨よ、若様を妨げしものたちに降り注げ！」

「内に眠りしふむかみよ、若様を妨げるものたちを貫け！！」

無数の矢は容赦なく兵に降り注がれ、ハクオロたちが、動く。

！

「追え！ あとはあいつらだけだ！」

「はあ、はあ」

「あんちゃん、あんちゃんはここで休んでるよ」

「う…うん、ありがとう」

テオロが男たちを率いて宮に突撃していく。すでに刃を向けてくる兵士はない。

あとはヌワングとササンテだけ。油断はできないが、9割が終わつた。

「はあ…、ふう…オボロ、大丈夫？」

「どうしてだ…」

「ん？ 何？」

ハクオロはオボロに近寄り笑いかけるがオボロは険しい顔のまま言

葉を続ける。

「自分が何をやつたのか分かつてゐるのか？」

朝廷はすぐにでも俺たちを討伐するために軍をおくつてくれるぞ」

「だらうね」

「軍を 国を倒すか、皆殺しにされるか、一いつに一つだ。俺は…お前にユズハを頼んだんだぞ。どうして…つ、俺一人が死ねばそれで済んだ話なのに！」

「オボロ」

「…何だ」

「怪我は大丈夫？」

オボロは何を言つてゐんだと言わんばかりに眉をよせたが、ハクオロが真顔で聞いてくるので答える。

「……ああ、大丈夫だ。少なくともお前よりはな

「なら遠慮はいらないね」

「あ？」

ガツ

オボロがハクオロの言葉の意味を理解するより、ハクオロがオボロを殴るほうが早かつた。

「な、何を？」

油断したのもありふらつくオボロをハクオロは睨む。

「本氣で、オボロだけが死ねばすむと？ それで？ 僕は残されたユズハに言い訳しろと？ 巫山戯るな」

「そ、それは… でもだからお前に」

静かにだが反論を許さない迫力で言われオボロは視線をおとす。

「黙れ！ よく聞けオボロ、お前は生きろ！ 少しでも申し訳ないと思うなら生きろ！ 死んでもいいだなんて逃げだ！」

「だ、だが…許せなかつたんだ」

「…まだ殴られたいの？ それとも、みんなが許してると、本氣で思つてるの？」

「……」

沈黙があたりを包む。

どれくらい時間がたつたのか、宮内から音が消えていき一人の場所まで音が届かなくなつた。

「……あ」

沈黙を破つたのは、ハクオロだった。

「オボロ…朝だ」

「…長かつた、な」

オボロはそつと息を吐いて気が抜けたのか地面に座りこむ。

「…お疲れ様、オボロ」

「ああ……」

「でもね、もう死んでもいいなんて言っちゃつ駄目だ。ユズハもみんなも、僕だって、君が死んだら悲しいよ」

「ああ……分かった。お前は、言い出したら聞かないからな」

「それはオボロの方だよ。僕の柔軟さを知らないの？ 体をそらしたら頭に足がつくんだよ」

「知るかよ」

「ま、試したことないんだけどね」

「はつ…バアカ。…少し、休んでいいか？」

「大丈夫だよ」

すう

眠つたのだろうか？ しかし気配に聴いオボロだ。まして戦いの後、近寄つたり騒げばすぐに目を覚ますだろう。

ハクオロは少し離れてそつと腰をおろす。

さて…ヌワンギやササンテはどうなつたのだろう。すでに手傷を負わせたし得物は落として行つた。くわえてあれだけの人数なら多勢に無勢。

ましてこちひは勢いづいていたし、味方の心配をする必要はないだろ？

「…はあ」

殺してしまいたいほど憎くて、実際にハクオロは兵を殺した。しか

し兵が悪いわけではないとは思つ。

彼らが武器を向けてくるのも人を傷つけるのも殺すのも、仕事だからだ。楽しんでるやつがないとは思わないがまた全員がそうだとも思わない。

だけどもう止まらない。ケンカなんかじゃない……戦争が始まったんだ。人を殺して殺され殺して殺され殺して殺す。

とても嫌だ。考えただけでうんざりする。いますぐ村に帰つて家にこもつて眠りたい。

……しつかりしろ。覚悟はもう、決めただろ。許さないと決めたのは、自分自身だ。

ただ…それでも殺することは恐い。

血にまみれたまま己の腰にある扇を一瞥する。朝日に照らされる無傷ではないが明らかに大量すぎるほど服に染みている赤。

ぶるり

一度だけ身震いする

「はあ」また息が漏れた。生きるために、大切なものを守るために他者を傷つけて殺す。

殺しのその瞬間は高揚してるのは自分でも不思議なほど、自身の体が軽いのを感じた。恐怖なんてみじんもなく 殺すなど面倒なことは考えず ただ相手を潰すことだけを考えていた。
けれど終わつてしまえば何て後味の悪いことか。

自分が聖人君子だなんて思わない。必要があれば今回のように迷わず殺すだろう。

だけどそんな自分自身が、少し恐ろしい。一体自分は何者なのか。
恐ろしい殺人鬼であつたならばどうすれば……考えても、意味はない。

太陽は、容赦なく朝を運んでくる。
一日が再び始まる。昨日とは確実に違う今日が、訪れる。

新たな始まり（後書き）

だいぶ間が空きましたすみません。お待たせしました（誰も待つてないか）。

一応、オリキャラも考えてたりしますがどのタイミングで登場させるかすら決めてない（え、ゲームの内容がうる覚えです。もうしばらくしたら改めてゲームをしたいと思うのではたゞまらべ更新はお休みします。

ただ、時間はかかるとも最後まで完結させたいです。

では、後書きまで読んで下さってありがとうございました。

次の戦にそなえるべし

「言われた通り、この一帯の制圧は完了した。次は何をすればいい？」

落ち着くと共に怪我の手当をするや否や、ハクオロたちは行動を開始した。

オボロの報告にハクオロは頷きながら口を開く。

「ここを拠点として陣を構えるよ。ここほど戦に適した場所は他にないからね。」

そのためにやることは山盛りだ。まずは人員の配置に物資調達。同時に破壊された箇所の修復と補強。

それらを細かく指示し、ハクオロは難しい顔で付け足す。

「これからいつ敵襲があるかわからない。出来るだけ急ぐように伝えて」「分かった。任せろ」

オボロも真剣に頷く。

戦いはまだ始まつたばかりだと叫ぶことを、オボロのほうが理解しているのかも知れない。

「ハクオロさん、お茶です。オボロさんも、どうぞ」

タイミングよくエルルウが盆に茶をのせてやってきた。

「ありがとう」

「俺もか？ 悪いな」

二人とも茶を飲む。

喉を潤すだけでなく、ほんの少しだけリフレッシュした。
さすがにぶつとうしで戦つて働いてと動いているので、疲労がたまつていてる。

「ところで、エルルウは寝てなくていいの？」

さすがに指揮をしてる人間が真っ先に弱音をはくわけにもいかない。
だがエルルウはそんなこともないのだから、出来るなら休んでいて
欲しいのが本音だ。
ただでさえ、あんなことがあつたばかりなのだから。

「…はい。何だか今は、動いていたい気分なんです」

よく見ると、エルルウの目が赤い。寝ないのでなく、眠れなかつた
のだろう。

しまつた。今のは失言だったな…。あんなことがあつたばかりだから、寝れないんだ。

「そう…まあ、倒れないように気をつけなよ。エルルウは別に、テ
オロたちと戻つてもよかつたのに」

テオロたちは一旦村へ戻つてている。

物資を運ぶのと、トウスクルを埋葬するためだ。
だがエルルウは黙つて首を横にふる。

少しだけ気まずくなるが、そこにオボロがエルルウに向かって改めて挨拶をする。

「初めまして……と言つべきか、トウスクル様にはずいぶん世話になつた。こんな時じやなきや、あなたにも話したいことがたくさんあるんだがな」

「はい……」

しかし明るい話題ではなく、つかの間沈黙がおこる。

「ここも……ねばあひやん……」

するとハクオロの頭上からアルルウの声がして、一気に雰囲気が柔らかくなる。

「あ、すみません、アルルウが」

エルルウはすまなさそうにしているが、ハクオロは気にしないでと言つ。

戦いの後、アルルウはハクオロの側を離れたがらなかつた。何処に行くにもついて回り、今は肩車のまま頭にしがみつくよつとして眠つている。

だが、それは仕方ない。最愛の祖母を失つて不安なのだ。

泣き出したりせず、むしろ手伝いをしようとするアルルウは手間もからないし、何よりその存在だけでとても楽になる。

アルルウに甘えられるのは、つまりそれだけ信頼してくれるので。

だからアルルウに頼られるのは、ハクオロにとって誇りしへもあり、支えである。

さて、次は陣を構える前に組の編成も考なればならない。頭になる人を集めて打ち合わせを…ああ、それに兵糧や武具も早急に調達して

ぐら

「つと…」

一瞬、ハクオロの視界が歪み体勢が崩れたがすぐに立て直す。しかし、側にいた二人が気付かないわけがなく、エルルウは心配そうに眉をよせる。

「少しは寝てください。ハクオロさんは本当はそんなに長く動ける体じゃ」

「オボロ、君のとこから武力と統率力に優れてる人を何人か選んでおいて」

だけど、それに甘えるわけにはいかないのでハクオロはあえて、エルルウの言葉を遮つてオボロに言つ。

「それは構わないが…エルルウの言つように少し休んだほうがいい。顔色がよくないぞ」

「でも…」

顔色なんて、そんなことを言えば今この場に血色がいじょうなものはない。

疲れてるのは監獄じはずだ。

「言われたことはやつておくから、寝たうじつだ」

「いのくらー大丈夫だよ」

突っぱねるハクオロにオボロはため息ながらにエルルウに

「寝室まで強制連行してやれ」

と叫ぶ。

「じつやうの男は自分の立場といつもの理解してないらしい」

理解している。やつ反論しようとするが、オボロはハクオロの肩をつかんでエルルウに押す。

「いいか？ 統括してるあんたに倒れられたら、俺たちは総崩れだ。
現状が分かつたなら後は任せろ」

「でも……」

それでもハクオロは反論しようとした。だが

ぎゅ

控えめに握られた服の裾につられてエルルウを見ると、真剣な顔でエルルウがハクオロを見つめていた。

「エルルウ……はあ。分かつたよ。」

やれやれ、駄目だな僕は。エルルウにこんな顔を見せりゃ、それこ

そ本末転倒だ。

「じゃあ…」

「うん、休むよ。アルルウもちゃんと寝かせてあげないといけないしね」

オボロに見送られてハクオロはエルルウについて行く。

「兄者は次の戦いに備えてゆっくり休んでいてくれ

と最後にオボロは言った。

ん？ 今何か不自然な単語があつたよ？

…疲れてるな。

「暗いので気をつけてくださいね」

エルルウについて行き、案内された奥の部屋にはすでに布団がひいてあった。

「ありがとう。アルルウ、下ろすよー」「ん？」

さすがにこのまま寝るわけにはいかないのでおひすと、アルルウは寝ぼけながらも布団にもぐりこむ。

「ひりアルルウ、そこはハクオロさんの寝床…ダメってば…」

エルルウが注意するがアルルウはすでに眠っている。

「まあまあ、何ならエルルウも一瞬に寝ようよ

「なー? ね、寝ません!」

そんなに否定しないでも、冗談なの。

「ふわあ…」

あ、気がぬけたからか、急に眠気が…。

ハクオロが布団に入るとエルルウが掛布をぽんぽんと整えてくれた。

ああ、何だろ。凄く懐かしい。

きっと遠い昔、誰かが同じようにしてくれたんだろう。

たまつてた疲労が一気に解放されたかのよう、体が鉛のように重くなる。

「
」

エルルウが子守唄なのか何か唄を歌いだした。しかし、すでにハクオロには何を言っているのかよく聞こえない。何となくリズムが分かる程度だ。

でもこの歌…聞いたことがあるような…

ああ、そうか……

何かに思いあたつたハクオロだが、すぐに意識は暗闇へと落ちていった。

宮廷にて、主であるインカラフ皇に呼ばれた男 ベナウイは御前に行
き頭を垂れる。

「お呼びござりますか、聖上」

感情のこじらない静かな声にインカラフ皇はキセルを口から離し、煙
を出す。

「ふはあ～～～」

そしてにやにやと笑みを浮かべながら答える。

「おみや～の呼ばれた理由、わつ分かつてゐるにやも～?
「叛乱の件に、ござりますか?」

ベナウイの答えに満足したのかインカラフ皇は顔を上げる。

「にやも～。これからすぐにやつらを討伐していくにやも～。一人
残らず皆殺しにやも～。」

「聖上、おそれながら進言いたします。まずは彼らの言い分につい
てその者たちと話し合ひをなさるべきかと。処分はその上にお決め
になつてもよろしこのでは?」

その平和的提案に、インカラフ皇は眉をよせて戯言を囁つなどばかり
にまた煙をくす。

「ふは～！ 話し合ひ？ 巫山戯る」やもー！ あいつらは朕の弟を殺したにやも。ハつ裂きにしてもおれがりんこやわよ

「ですが」

「へどこにやもー！」

一喝して却下するインカラ皇。ベナウイは表面的には相変わらず無表情のままだ。

「聖上、御髪のお手入れ時間です」

その時、インカラ皇の脇から宮廷専属の理髪師の男が現れてそう言った。

するとインカラ皇は先ほどまでの不機嫌はどこぞや、ニヤニヤと笑つて尋ねる。

「にやむへん。例のブツは手に入つたにやも～。髪の為なら金に糸用はつけないにやもよ」

そう言いながらインカラ皇は自らのアフロの髪を撫でる。
その発言にたまらずベナウイは口を開く。

「聖上、これ以上の散財はお控えになつたほうがよろしいのでは？」

「の國は今現在、お世辞にも財政豊かとは言えない。

「構わんにやも。租をあげればいいだけにやも」

簡単な話だと言つインカラ皇は、ベナウイはこの場にきて初めて感情を声に乗せて反論する。

「聖上、民あつての國です。民をないがしむるような真似は
「こやもーー」

だが、インカラ皇にとつてそんな話は退屈でくだらないものだ。

インカラ皇は全てを聞くまでもなく、手にしていた杯をベナウイに投げつけた。

「……」

ベナウイはそれを無言で受け止めた。額から血がつと流れ。しかしな インカラ皇はまだおさまらないのか、大きな声でベナウイの言を否定する。

「臣下の分際で朕に意見するこやもかー、國あつての民こやもー、そして國とは、朕のことこやもー、朕が何をしようと朕の勝手こやもー。」

鼻息あらべやう言こ、インカラ皇は腹立ちおそれてぶはあーとまた大きく口を開いて煙を吐き出す。

「出すおた真似を…お許しぐださー」

ベナウイはまた感情のない声に戻ると謝罪した。

インカラ皇はそれを一瞥すると不機嫌そうに鼻をなじる。

「ふふん、おみやーのせいで気分がそがれたこやも。宴の用意をするこやもー。」

パンパン、とインカラ皇が手を叩いて命じると人々は一斉に宴の用意を始めた。

ベナウイは礼をしてから退出した。

「ふう…」

外にきて知らず息をはくベナウイに、大柄な男が近寄ってきた。ベナウイの部下であるクロウだ。

「大将、出陣の準備が出来やしたぜ。」

クロウはそう報告し、ベナウイの傷に目を止めた。

「その傷…」

「かすり傷です」

まだ拭っていないので血がついているが、事実血は止まっている。

ベナウイは視線をクロウから眼下へと向ける。

町並みは一見平和に見える。だが、人々は重い粗に苦しみ、さらに

「戦になれば、それだけ人々は貧困にあえぐことになります。しかし…」

これからさりに、生活を圧迫されるかも知れない。

戦をさけようともしない今の聖上。逃げるのはいけないが、戦わずにするのならそつすべきだ。

だが、腐敗していると理解しつつ、こんな國を護つてやる私にはそんなことを言ひ資格もない。

ベナウイは表情は変えずに、静かに瞳に悲しみの色をぬる。

「…護ることしかできないとは、所詮私も、その腐った果実に寄生する虫にすぎないと言つことか。

いや、その色は無力による虚無感か、それはベナウイ自身にもわからぬ。

「…出陣します。」

ただわかるのは、ベナウイたちはこれから叛乱者を殺しに行かねばならぬと言つことだ。

宣言したベナウイにクロウは元気に答える。

「うこうすー！」

彼にとつて戦いは戦いだ。強いものと戦いたい彼にとって他に意味はない。

だが彼にだつて、敬愛する大将の憂いはわからないでもない。

しかしだからと言つて肉体派のクロウではベナウイに適切な助言をできるとは思わない。

彼は黙つて、ベナウイに従つただけだ。

二人は歩きだした。

次の戦にそなえるべし（後書き）

ようやく20話です。更新できましたが、いまさらながら現実にゲームをしてから小説の内容を考えているとめちゃくちゃ遅いことに気づきました。ゲームをする暇がないと更新ができないといつ。とりあえず、あと1、2話くらいなら来月中に更新しますが、何とかしないとなあ。

初めての我が役

「オボロ、状況はど'う?」

声をかけるとオボロはハクオロに紙を渡してきた。

「オヤジさんたちが戻れば配置はほぼ終わる。これが組の編成表だ。田を通じておいてくれ。ただ、先の戦いで損傷した 特に正門の修復には時間がかかりそうだ」

そこまで一気に言つてから、オボロは眉をよせる。

「すまない……俺が不覚をとりさえしなければ……」

ハクオロはあえてにっこり笑つて明るく言つ。

「自分をせめるなよ。大丈夫、オボロならすぐ挽回できるわ」

「兄者……」

オボロは嬉しそうにつられて笑う。それに頷いて、ハクオロは門を見る。

「でも、ここまで見晴らしがいいのは不味いね。敵さんは早いと2日もすればくる。ここは最優先で終わらせないとね」

「分かった」

二人で頷き合つ。

敵は国だ。他の誰を相手するより、手数が段違いだ。

まずは守りを固めなければ、味方を増やすことも難しい。

「おに～ちゃん！」

「おつと」

アルルウがやつてきてハクオロに抱きついた。
ハクオロはとたんに真面目な顔を崩す。

「皆さんへのお弁当配り、終わりました」

「ありがとう」

遅れてやつてきたエルルウにハクオロはにっこり礼を言つ。

「アルルウも、アルルウも手伝つた」

おつと、勿論忘れてないよ。

「偉い偉い」

なでなで

優しく撫でてあげるとアルルウは心底嬉しそうに微笑む。

「んふ～」

こちらまで嬉しくなる笑みだ。

しかしそろそろ、一人には言わなければならないことがある。
ハクオロは撫でののを止めてさりげなさを裝つて二人に告げる。

「で、二人とも、そろそろ戻つて欲しいんだけど

するとピタリと動きを止めて一人はハクオロを見る。

「……」

「リリは戦場になる。わかるよね？」

無言での抗議にもハクオロは引かない。

「……嫌です」「
だから危な
「嫌です！」

しかしエルルウにしては珍しく声をあらげて自分の意思を口にする。怒つてる時ならともかく、普段はあまり声をあらげない激しい主張に、ハクオロはその隣に声をかける。

「う、あ、アルルウは、お兄ちゃんのお願い、聞いてくれる…よね
？」
「……」

ふいつ

しかしアルルウは無言でハクオロから顔を背け、エルルウの手を握る。

「アルルウ……」
「おに～ちゃんと、一緒

まいつたあ。無理矢理追い返す、じゃあ一人だけでも帰つてしまそりな勢いだ。

「いいんじゃないかな。側にいたって言うなら、好きこそかでやつたら

横から言ってくるオボロにハクオロはむつとジト目を向ける。

「無責任なこと言わないでよ。オボロだって、ユズハを連れてきたりしないでしょ」

ああ ニフノなら通

「はあ！？、な、何で！？」

オボロの予想外な言葉にハクオロは声をあげるが、オボロは平然と答える。

「あいつは兄者に委ねたんだ。兄者の側に置いておくのは当然だろ」「ちよつ…てゆーかなに? その兄者つて」

氣になつてはいたがあえて聞かずについたことを聞いてみた。

「命を救われ、全てを委ねるんだ。兄と呼ぶのは当然だろう。」

……。
えへ?
それだと僕はエルルウを姉さんと呼ぶことになるんだけど

「それに…あいつが一緒に行きたいって言つたんだ。初めてなんだ。ユズハが我が侶を言つたのは。初めは俺も断つたんだが、今回ばかりはいつも素直なユズハも引き下がらなくてな」

ぬう……確かに、ユズハにして見れば唯一の肉親の兄と離れるのは心細いよねえ。

まして自由に会こに来れる体でもないし……。

「今まで自分の気持ちを口にしたことがなかつたコズハが、はつきり言つたんだ。妹が兄の手から羽搏こうと言つたら、俺はあいつの好きにさせいやひつと黙つたんだ」

「言いたいことは分かる。分かるよ。けど一言言わせよう。
ちょい、こつからそんな物分かりがよくなつたんだこのシステム…
ふう…いや、いい傾向だけどさあ。

「もし足手まといになるなら捨てても構わない。だから、好きにさせてやつてくれ」

「ここまで言われて、ノーと言えるだろうか？ 否！ 無理だ！ それにコズハの我が仮なら僕だつて叶えてやりたいさ…」

「わ、私だつて」

「ん？ どうしたのヒルルウ？ そんなに赤い顔して。

「私だつて、初めて我が仮言つたんですか？」

「は？」

「えー！？ ヒルルウまで何言つてんの…？
何気に可愛いんですけど…」

「それに、ええと、わ、私たちが帰つたり」飯はおいしくなくなつて、洗濯物だつてたまつて汚れて臭くなつちやいます！」

「ふつ…くく、そりゃあい。困つたな兄者、飯が不味いと士氣が下がるぜ」

オボロが笑いながらエルルウの後押しをしてくる。

「あのねえ…」

二人からじつと真剣に見つめられ、ハクオロは内心ため息をつく。
僕だって、食事が不味いのは困る。

「兄者の負けだな」

「ああ、分かったよ！　もう、一人ともいてください！」

やけくそ気味に言つと二人はにっこりと満面の笑顔に。

「はい！」

「ん~」

「ただし！　いざつて時は逃げるんだ。それだけは約束して」

それだけは譲れないとハクオロが真剣な顔でせまると、二人はにこにこしたまま頷く。

「はい」

「ん」

本当にわかつてんのかなあ？　特にアルルウとか。は～。トウスク
ルに怒られちやうよ。何で謝ろつか。

ハクオロはやれやれと首をふる。

まあ、僕が頑張って守るしかないよね。

カンカンカン

「！？」

カンカンカン

その時、鋭い鐘の音がなりひびく。

「て、敵襲———！」

見張りをしていた男の声が響き、皆が一斉に表情をこわばらせる。

「敵、騎兵衆、数八！」ながらに向かってきます

早すぎる。

ハクオロの頭に一瞬抗議が浮かぶが、泣き言を言っている暇はない。

「ベコドリ衆、奴らの足を止めろ！ 絶対に中へいれるな！」

オボロが素早く命じ、矢が幾筋も騎兵を狙うが、動きが速すぎる。矢はウマが通りすぎた後の大地に虚しく刺さる。

「駄目です！ 速すぎます！」

ドリイとグラアが口を揃えてそつ報告する。

「くつ」

ハクオロは慌ててエルルウとアルルウを下がらせかばつよつに前に出た。

その瞬間

「ハ ッ！」

馬にのつた騎兵たちをつれて突撃してきたベナウイが、ハクオロに襲いかかる。

「ツー！」

寸でのところで転がるように避ける。

その間にも兵たちはこちらの民たちと刃を交え始める。

キン
カン

という小気味よい旋律に姉妹はそつと互いの手を握り合い、ハクオロたちの邪魔にならぬようになると辺りを警戒する。

「兄者！」
「だつしゃーー！」
「ぐつ！ 邪魔だ！」

オボロがハクオロに駆け寄りつつするが、クロウがそれをさせない。

「セイー！」
「おわづー！」

さらに槍をハクオロにめがけてくるベナウイの攻撃を、鉄扇で何とか防ぐ。

ぐつ、この人強い。

てゆーか、僕って基本的な戦闘力ではオボロより弱いんだけど。

参ったなあ。いつまで持つかな。何とか、勝気が向いてくるまでは
…
つ

キン

無機質な音がして、ハクオロの手から扇が滑り落ちた。

すぐに手を伸ばすが、それよりもベナウイがハクオロの喉元に槍を
つきつける方が早い。

「くつ…」

守るとかって、無理じやん。

「お覚悟…」

ベナウイの目が細められ槍が動く。

やられる…

「兄者！ がつ、退けえーッ！ ウオオオオオッ！…」

ハクオロの危機に気付いたオボロがすぐに助けに行こうと、得物を
クロウにふりかざす。

「ハーッハツハツハー！」

だがクロウは笑い声をあげてそれをいとも容易く受けとめると、怒りをこめるようにオボロに強い視線を向ける。

「その程度でうちの大将に挑もつってのか？　はつ、十年早エーーー！」

弾かれ、武器を手放しこそしないが体勢をくずられるオボロ。

「オラオラオラー！」

そこにできる隙に容赦なくクロウは槍でついてくる。

「ぐううつ」

「どうしたあ？　足が笑つてるぜ？」

ニヤリと笑うクロウにオボロはギラギラした目で睨みつける。

振り上げられたベナウイの槍はすんでのところ止まった。

「…？　え、アルルウ？」

とつぞに閉じた目を開くと、アルルウとエルルウの背中があつた。

「エルルウまで…。一人とも、逃げるつて約束しただろ！」

「……」

ハクオロが怒鳴るが一人は動かない。一言も顔葉を出さず、手をつないだままベナウイを睨む。

「退きなさい、無益な殺生は好みません」

ベナウイがそう警告しても一人は動かない。

「……」

一瞬、膠着状態になる。

「でりやああああーー！」

「ーーっ」

その時、ベナウイの背後から雄叫びと共に、テオロが武器をふりおろした。

ベナウイはそれを回避するも、必然的にハクオロたちから距離をとってしまった。

テオロはにいつと笑うと

「危機一髪つてとにかくだな。助けに来たぜ、アンちゃんー！」

と言った。ハクオロは立ち上がりながら歡喜に声をあげる。

「テオロー、皆ー、着てくれたんだねー！」

テオロの後ろには村の大勢のものたちがそれぞれ得物を手に構えている。

ベナウイはそれを見ると顔色をかえないまま

「総員、撤退します」

と号令を出し踵を返す。

「了解！」

「ぐつ」

クロウもあつわつとオボロを牽制してから去って行く。

「ま、待て！ 逃げる気か！」

「待った！ オボロ、追うんじゃない！」

追いかけようとするオボロにハクオロは待ったをかける。

「何故だ！」

オボロは立ち止まるがいまだしそうに足踏みをし、今にも飛び出しそうなまま問う。

「頭を冷やすんだ。どちらにしても追いつけない。それにかなりの手練れだ。当然、一手、二手先を考えてるよ。そんな状態でムキになつて追いかけたら、策にはまつて返り討ちに遭うのが関の山だよ」

ハクオロが息をはきながらオボロに近寄り説明する。

「く

「それに…あいつらとはまた、否が応でも戦うことになるさ。その

時まで、待て」

理解はしても納得ができないオボロをなだめるようにそりつけ加える。

ギリッ

オボロは悔しそうに歯噛みしたが、無理矢理納得する。

「ならば、約束してくれ。あの男の首だけは俺に譲ると。あいつは、俺の獲物だ！」

「分かった。」

「よし。ならない。いつまた敵襲があるかわからん！ 修復を急げ！」

オボロは踵を返して皆に指示を出す。

幸いにも今回の襲撃ではたいした怪我人はでなかつた。

ハクオロはそれに安堵しつつもため息をつく。
まさか、こうも早いとは…テオロたちがもう少し遅かつたら、既に
決着はついていた。

この先、あんな手練れを相手にしなきやならないのか。…気が重い。
さて、それはそうと…

「エルルウ、アルルウ」

振り向いて名前を呼ぶと、二人は先ほどの勇ましさはどうやら、
びくりと肩を揺らした。

「一人とも

近寄ると怯えた視線を向けてくる。

ハクオロはあえて恐い顔を作つて

「どうや

二人を抱きしめた。

「え?

「助けてくれて、ありがとう」

本当に、いつだって僕は助けられてばかりだ。
少しも恩を返せないうちからまた増えていく。

ぎゅっと強く腕に力をこめてから、そつと離して顔を合わせる。

「でもね、頼むから…もうあんなことは止めてくれ

恐かった。一人を失うと思うと、死ぬよりもずっと恐かった。

「じゃなきや、僕を信じて一人を託したトウスクルに何て言えぱい
いのか、わからないよ」

だけどそれを伝えるのは何故か逆に恐ろしい気がして、ハクオロは
そう言った。

「んだ。一人とも、気持ちはわかるがな。こうこうことは俺たちに
任せろ

テオロが同意して少しだけ怒つたようにエルルウとアルルウの頭をぽんと叩く。

「はい…すみません」

「んう…」

一人の反省した態度にハクオロはふうと息をはいた。

はあ…本当に、じつちがショック死しちゃうよ。

「あいつが、追つてきませんぜ。」

逃げていたベナウイたちは森林地帯で立ち止まって振り向くが、予想外に追っ手は一人としていなかつた。

「せつかぐの罠が無駄になつちまいましたか」

「……どうやらこの戦、苦戦するかも知れません」

重々しく告げるベナウイにクロウは笑う。

確かに罠は無駄になつたが、はまればよし、なくて元々だ。
それに小細工はクロウの好みでもない。

「まさか、確かに武人の腕はそこそこでしたが」

「いえ、彼ではありません。もう一人、おそらく彼が長でしょう」

しかしひベナウイの言葉にクロウは驚き田を見開く。

「もう一人つて、大将がやり合つた…まさか、あつちが親玉だつたんですかい!? あんなちびっちゃいのが!/? ……あぢやあ、間違つちましたか」

「わかりませんでしたか? 彼らの動き…あれは戦に心得のあるもののです」

クロウのため息も意にかいせず、ベナウイは淡々と説明する。

「今のも、もし彼らがもう少し場慣れしていたらビリになつていたかもまさか…」

笑い飛ばそうとするクロウだが、ベナウイが眞面目な顔で言つので
そなのか知らない、と言つ気になる。

いつだつてベナウイは、クロウが考え方のことを考える。
そして、それは大抵正しい。だからこそ、クロウはベナウイの意見
に笑えなかつた。

「いざれにせよ、このまま終わりはしないでしょう。戻り、体勢を
立て直します」

ベナウイが言い、列をなして走り出した。

初めての我が僕（後書き）

題名が難しい…素直に話数だけにしてれば簡単だったかも。
いやまあ、そんな、題名なんか気にしてない人もいるでしょうけど
ね。

僕の友達を紹介します

「エルルウ、アルルウ、今いい？」

「？　はい。どうかしました？」

とりあえず一段落したのでエルルウとアルルウを連れてユズハに挨拶をしに行くことにした。

途中で軽く彼女の説明をした。

「ユズハは小さい時から寝たきりで、友達がいなかつたんだ。だからってわけじゃないけど、僕らと年も近いし仲良くしてあげようね。

「ん

頷くアルルウの頭を撫でながら、さすがにこれはお節介かなとハクオロは苦笑する。

「うん、まあこんなこと言わなくとも、ユズハもアルルウもみんな凄くいい子だし、余計なお世話かな」

「…は、はあ」

エルルウは曖昧に頷くが、ハクオロの説明でもしっかり聞いてくれていたので大丈夫だらう。

何より、彼女は見ず知らずの僕を家族として迎えてくれるほど優しい。

だから本当に、余計なことを言ったかも知れない。
変に身構えさせてしまつては本末転倒だ。

それでもつい言つてしまつたのは、ユズハは幸せになるべきとハク

オロが思つてゐるからだ。

あんなにいい子なのに、今まで友達といつ言葉すら知らなかつた。同情じやないとは言い切れない。だけど、誰より幸せになつて欲しいといつのは本当だ。

ユズハには、その権利がある。

三人が部屋に入ると、ユズハは瞳を開いた。

「ハクオロ様…？」

「やあ、気分はどう？　よく寝た？」

「はい…」

「どれどれ？」

ユズハの額に手を乗せて熱を計り、ハクオロはにっこり笑う。

「うん、熱もないね」

「ふふつ」

「ん？」

「何だか、お兄様みたい…」

「ええ…それはいかん。オボロにはデカイ口たいたのに」

「でも…ハクオロ様の手…お兄様よりあつたかくて…いい気持ち…」

「そう？　ありがとう」

そのまま撫でると、ユズハは嬉しそうに瞳を細める。

「…、ゴホン」

おっと、和みすぎて一人を忘れるところだつた。

後ろでエルルウが咳払いをし、ハクオロは撫でるのを止めてエルルウが挨拶しやすいようにスペースをあけた。

「ごめんごめん。コズハ、気づいてるだらうけど、実は今日は紹介したい人たちがいるんだ」

「はい…気になつてました…」

「この子は…」

「…」

視線をエルルウに移すと、何やらむすつとした顔をしている。

あれ、自己紹介してくれないのかな？

「エルルウ？」

「はえ！？ あ、その…」

「はじめまして…コズハです…」

エルルウが何やらうつろたえているつむじコズハは体をおこしてそつと頭を下げる。

「あ…は、はじめまして。私、エルルウです。この子は妹のアルルウ」

エルルウの挨拶に合わせてアルルウがぺこりと頭を下げる。見えていないはずだがコズハはにこりと微笑む。

「トウスクル様と…同じ香り…」「え？」

「色々な草と……温かな香り……トウスクル様と……同じ……」

「おばあちゃんと……」

その言葉に何を思ったか、エルルウは真顔で一度瞬きをし、「うー」と笑つてゴズハに近寄る。

「よろしくね、ゴズハちゃん。これからはおばあちゃんに代わって、私がゴズハちゃんを診ますから」

そしてそっとその手をとった。

まるで誓いのようにしつかりと、まるで壊れ物に対するようになぞつと、エルルウは両手でゴズハの手を握った。

「はい……よろしくお願いします……」

ゴズハはそれに応えた。

そしてゆっくり手をとくとエルルウは笑顔のまま振り向く。

「ほらアルルウも……あ、アルルウ？」

「んう？」

しゃくしゃく

いつの間にかアルルウは置いてあつた果物を勝手に食べていた。

「勝手に食べちゃダメでしょー！」

エルルウが呆れながらも怒つて取り上げるとゴズハがくすくす笑いだす。

「本当にでした……」

「え？」

「ハクオロ様が… エルルウ様と… アルルウ様のこと… いっぱいお話ししてくれました。エルルウ様のこと… とても可愛くて… あたたかで…」

「そ、そんな…」

エルルウは照れているが、ハクオロは内心冷や汗をかく。何故って、その言葉には続きがある。

けして悪口ではないが… 本人が聞いたら怒りそうだ。ハクオロはそつと逃げる準備をする。

そんなハクオロの気も知らず、ユズハは続ける。

「愉快な子つて…」

「ゆか」

エルルウの反応に気付かないのかユズハは続ける。

「この間の… 体を洗つて… いる途中… 裸でアルルウ様と… 家中追いかけて… こしてたお話…」

しかもさらに暴露した内容まで言わってしまった。

ハクオロは言い訳をしようと口を開くが言葉が出ない。

「そ、それは… えーと…」

「とっても… 楽しそう…」

ユズハはにこにこと、やうじめぐへる。

ヤバい。確実にヤバい。

「何処へ…行くんですか？」

びくつ

ハクオロがそつと後ろに足を出したのをめりこめて、ハクオロはあはは…と空笑い。

「い、いや…女同士は女の子だけの方が、いいかな…なんて。じゃあ、ユズハ、またね」

逃げる前にせつと去るお詫びにユズハの頭をもう一撫でしておく。

「はい…」

ユズハは頬をそめて撫でられるままに頷く。

「おに～ちゃん」

「ん？」

「アルルウにも」

「おお、よしよし。アルルウは甘えん坊だなあ

リクエストに答えて撫でる。嬉しそうに頬を緩める。
二人とも可愛いなあ。こんなことで喜んでくれるなら毎日してあげたいくらいだよ。

「……」

つて、あ…え、エルルウ…。

「え、エルルウも、ほら…」

何とか機嫌を直してもらおうとハクオロは普段そんなに撫でないエルルウの頭を撫でる。

「……………」がぶつ

「あやーーー！」

一瞬類をゆるめかけたエルルウだが、怒りはおさまらないらしくハクオロの手に噛みついた。

ハクオロは情けなくも悲鳴をあげ、当初の予定通り逃げ出した。

パチパチ…

パチパチパチ…

ハクオロは自室で玉をはじいて計算をくり返しながら、首を傾げる。

「妙だな…倉の計算が合わない」

何度も計算したが、倉に置いている食料量が計算と報告が食い違う。消費量がこれくらいだし：兵糧の残りがかなり少ない。報告間違いつたって、この差はおかしいよねえ。

「お茶が入りました」

うんうん唸つているとすつとエルルウが室に入ってきて、そつと机

に茶を置いた。

「あ、ありがとう」

礼を言つてお茶を飲む。エルルウはちゅうりと書簡を見ながら首を傾げる。

「さつきから首を傾げてますけど、どうしたんですか?」

「んー、ここの、ここ。この数字が合わないんだよね」

「合わない…ですか?」

不思議そうなエルルウに苦笑する。薬師で家事万能なしつかり者も、やはり習わないことは駄目なようだ。

まあ、いつこつのは読み方とかもあるからね。

「要するに、食料が予定より少なくなってるの」

「え! そ、それって大変なんじや…」

「うん。だから今から倉に行つて様子を見てくるナビ… エルルウも行く?」

「はい、行きます」

やはりと書つか… 台所を預かる立場として見逃せないらしい。

やる気満々なエルルウをお供にハクオロは倉に向かった。

「きい、と小さく音をたてて扉が開く。

食料倉はある意味一番重要だが、一番頻繁に人が出入りするので鍵はかけていない。

「さて…ん？」

「あ…」

なので倉に入つてそこにアルルウがいたとして、そつそつ驚くことではない。

「こんなところで何してるの？ つまみ食い？」

「う~」

だから気楽に聞いたのだが、何やらアルルウはそわそわして落ち着きがない。

「アルルウ？」

ポリポリ、モリモリ

「ん？」

アルルウのさらに奥、暗くて入つてきたばかりの一人にはよく見えないあたりから、何やら音がする。

クチャクチャ、バリバリ

気になるので奥を覗くとするが、アルルウが通せんぼするよつて立ちはだかる。

何だろう？

薄暗くわかりづらいが、よく見るとアルルウの後方で巨大な塊が動いている。

「ねえアルルウ…その後ろの…ナニ？」

エルルウの問いかけにアルルウは首をふり、必死に背後のナニかを隠そうとするが、アルルウの数倍はあるそれを隠すのは不可能だ。暗さに慣れた二人の目に、段々とその塊は姿を露にする。

「……」

あれって…もしかして…

「…ねえアルルウ、どうしてここにムツクルがいるの？」

何か恐ろしいくらい冷淡に問いかけるエルルウ。その声に依然として食べていた塊…白地に黒柄のある巨大な四足動物は振り向く。

やつぱり…アルルウがかばう相手なんてそういうないもんね。

「ヴォ？」

「つてデカつ！」

露になつた姿は、ついこのあいだまで抱き上げていたのが嘘のような巨大な体躯の、ムツクルだった。

モリモリ、バリバリ

そしてまた食べ始めるムツクル。
さつさからしてたのはものを食べてる音だった。

「アルルウ」

エルルウがアルルウの名前を呼ぶ。

声も表情も平然としているが、だからこそかなり怒っているのがわかる。

「う～…」

「アルルウ！」

「！……ゴハン…食べさせてたの」

恐る恐るアルルウはエルルウを上目使いで見上げながら答える。

「ムツクル、おなかすいたつて…」

「ゲフウ～」

懸命に答える親をよそに食べ終えたムツクルは満足とばかりにゲップまでした。

「…………」

「ふち

い、今の糸が切れた音は…。

ハクオロが恐る恐る（もはや誰の味方だか）エルルウを見る。

「あ、あなたつて「は…」

「ヴ？」

震えた声にこじめられた怒りに氣付かないムツクルは、不思議そうに鼻を鳴らしながら顔をあげる。

「何で」とするの ツ！」

言葉と共にエルルウは大きく振りかぶり、思いつき手刀をムツクルの鼻面に叩き付けた。

「キヤフーン！」

団体に似合わない情けない声をあげて、そそくせとアルルウの背後に隠れたつもりのムツクル。

ああ…親に頼るというのは心理的にはわかるよ。わかるけど、体格的にはかなり無理があるよ。

「だ…だめ…」

だけどアルルウ自身、親である直観があるらしくムツクルをかばうようにしてエルルウに向かつて首をふる。

「アルルウも！ 食べ物が大切な」とくらべよく判つてゐるでしょ！
なのにどうしてこんな勝手なことするの…！」

「だ、だつて…」
「だつてじゃないの！」

「う～」

「ヴ、ヴルルル…！？ …キューン…」

叱られるアルルウを守ろうとムツクルも唸り声をあげようとするが、エルルウに睨まれただけでまた情けない声になる。

ふと、ハクオロはかつてテオロに言われた言葉を思い出す。

『どうも辺境の女は、年くつ度に肝つ玉が太くならる』

ああ…エルルウ、君はなんて見事な辺境の女…森の主も眼光で黙らせるとは…。

…すりこみて偉大だねえ。うん。そういうにしておけ。

「ま、まあまあエルルウ。エルルウだって反省してるんだし、もういいんじゃないかな」

「ハクオロさん…でも、今は食料が豊かにあるわけでもないのに…」

「勿論そうだけど、と…アルルウ？」

ハクオロが声をかけてエルルウが気をそらした隙に、アルルウが背後にまわってきた。

「ヴァッ」

しかもムツクルも、だ。

アルルウはぎゅっとハクオロの服を握る。ムツクルはアルルウ「」とハクオロを押すように体をすりつけ、エルルウに見つからないようにしている。

いや、だからムツクル…隠れられてないと思つよ。

「アルルウ！ ハクオロさんの後ろに隠れないで出できない！」

かばうつもりがなかつたわけではないが、計らずとも身をていする

形でエルルウとアルルウに挟まれてしまった。

しかしいくら何でもエルルウの迫力に負けてアルルウを差し出すわけにはいかない。

勿論アルルウの行為は褒められたことではないが、自分が甘いものが食べたいとかじやない。家族であり息子?のようなムツクルのためなのだから、その気持ちを汲んであげたいのもまた兄心なのだ。

「ま…まあ、そのくらい…いいんじやないかな…とか、思つんですよ?」

「…ハクオロさんは、アルルウを甘やかしそぎです」

せめるよひこ、けどその表情は怒つてると云ひよひは寂しそうで

「私だつて…好きで怒つてるんじやないのに…」

そして続けられた独り言のような小さな声に、ハクオロは慌ててどう言えばいいか考えながら口を開ける。

「あー、うん。エルルウは悪くないよ。アルルウがねー、悪いんだけどね? けどほら、アルルウはお母さんとして頑張っちゃったわけださ、ね?」

後ろ手にアルルウの頭を撫でながら相打ちを求めるとアルルウは嬉しそうに頷く。

「ん。アルルウ、おかーさん」

「アルルウが母としてムツクルにご飯をあげようとしたっていう、その心は受け入れてあげたいなーみたいなあ」

「……」

「勿論勿論、エルルウ様のおっしゃることはわかりますよー? け

「どうやら、僕の分もエルルウが怒ってくれるから、僕はアルルウを甘やかしちゃう、っていうか」「……」

「……まだ怒ってる？」「……」

表情は変わらないものの何も言わないエルルウにハクオロはそつと問いかける。

「……はあ。もういいです。アルルウ、もうムックルを甘やかしちゃ駄目だからね。おかーさんだつて言つなら、躾もするの。わかつた？」

「ん。躾する」

許してくれる雰囲気にアルルウは「ぐぐぐ」と素直に頷く。

「全く……あとハクオロさん」

「はい」

「さつきのは逆に言つと、ハクオロさんが甘やかすから私が甘やかせないんですよ？」

「ん、そう言えれば……そもそも言えるかな」「だからね、アルルウ」

エルルウは微笑んでほんとアルルウの頭に手を乗せ、ゆっくり頭を撫でる。

「お母さんとしてよく頑張ったね。偉いわよ

「……んふ～」

アルルウは本当に嬉しそうに、手を細めてそれを受けた。

僕の友達を紹介します（後書き）

一つあるからタイトルつけるのに迷いました。

あなたの名を、教えていただけますか

「兄者、助力を求めるのは判るが、何も兄者自ら行かなくてもいいだろ?」

すでにウマに乗って行程の半ばを越えていると言つのに、オボロは今更なことを言いだした。

「こんなことは俺がオヤジに任せればいい。なんなら各村長に招集をかけたつていいんだ。トウスクル様の後継者である兄者の呼びかけなら無視できないはずだ」

無意識だろ?が上からのやつでもらつて当たり前な目線に、ハクオロは苦笑する。

まあオボロは前から人の上にたつてたから、それが当たり前なんだ
うひひ…

「戦乱に巻き込むんだからね。こっちから行くのは礼儀だよ
「兄者らしいな」

に、と何処か嬉しそうに笑われとりあえずにつっこり笑いかえす。

それに、誰だつて来い、なんて命令されて無理矢理戦わせられるなんて、嫌に決まっている。しかし僕が言つたら断れない。ならなおさら、形だけでもお願いしたほうが気分よく動いてくれるだろ?という打算がある。

勿論礼儀というのは嘘じやないけど、まあ…こいつ形をしつかりするのも大事つてことで。

「う…く…」

「何をモゾモゾしてるので？」

「えー？」

エルルウがウマに乗つたままもぞもぞしていたので声をかけたのだが、何やらひどく驚かれた。

「小便か？ なら待つてからその辺で済ませてきたらうだ？」
「ち、違います…」

テオロのあけすけな言葉にエルルウは頬を赤くしながら否定するが、それなら理由はなんだろうかとハクオロは内心首を傾げる。

「ん？ んじゃ『デカイ方か？』

「もうつ、どうしてそうなるんですか！」

「いや、妙にソワソワしてつから、てつきつ…なあ？」

それにしてもそのセリフはギリギリアウトだと想いつよ。

言葉には出さずにいるとオボロが軽い調子でテオロの疑問に応える。

「違つてオヤジさん。きっと長い時間ウマ（ウォブタル）に乗つてたせいで、股や尾の根本が痛くなつたんだ」

ああ、なるほど。僕も村で初めて乗つた時はお尻が痛かつたなあ。

オボロの指摘に鈍い男一人は納得する。
喉元すぎれば、といつもので平気になつてしまえば以前の苦労は忘れてしまう。

「こいつは慣れてないと結構辛いからな。俺もガキの頃には経験した」

「あ～、なるほどなあ」

「そつ、もう、一人で変なこと言わないでくださいー。」

「別に恥ずかしがることでもないだろ」

「恥ずかしいんですねばー！」

恥ずかしいものなのかな？ 痛いなら遠慮しなくとも、言ってくれれば休憩はさむのに。

「痛い？」

「え！？ あ…う…だから… や、その…」

ハクオロは心配して純粧に聞いたのだが、それでも恥ずかしいエルルウははいともいいえともつかない声をだす。
女の子だしウマに乗りなれてなくとも恥ずかしいことはないの。
とハクオロは少しずれたことを思つた。

「まあ確かに、貴重なウマを乗り物として使つのは滅多にねえからな」

「だから…」

「俺も得意とは言えんな。小回りがきかんし、あまり無理すると痔になつたりするみたいだしな」

反論を無視して続けられる会話に思わずエルルウはオボロを睨みつける。

「う…う…」

さすがに言わないと気がいいと気付いたオボロが口をつぐむ姿にハク
オロは苦笑しながら

「じゃあ、ちょっと休憩しようか

と提案した。

「あ、あの違います。ホントに違いますから」

「あのね、僕が疲れちゃったの。エルルウより体力がなくて情けないけど、休ませて欲しいな」

「…はい。わかりました」

慌てて否定するエルルウにっこり笑つてお願いすると、エルルウはやはり少し恥ずかしそうにだが頷いた。

ウマから降りて集まり、それぞれ適当な場所に腰をおひす。

「……」

「な、なあにアルルウ？」

ずっと無言だったアルルウは座らずにエルルウをじっと見つめ

つん

「あぐつー！」

とエルルウのお尻のあたりをつついて逃げた。

「いりあー！ アルルウー！」

叫ぶが痛いのか立ち上がらないエルルウに、アルルウは済ました顔で離れた場所に座りこむ。

「うへ、もう！」

文句を言いながらお尻をさするエルルウ。

あれ、隠してなかつた？ 普通にさするの？
と思つたが、つっこむのは止めておく。
誰もむやみに數から蛇を出したくはない。

「どうぞ若様」

ドリイとグラアがオボロに水筒を渡す。
いつ見ても一人は息がピッタリだ。行動と思考もそつくりなのだと
本人が言つていた。

じゃあ例えばじゃんけんしたら、あいこしか出ないのかな。

ハクオロは全く関係ないことを考えながら、オボロが飲んだあとに
水筒を受け取り回し飲みをする。

「目的地までは、あとどれくらい？」
「あと少ししたら森をぬける。そこからもう少しあよい行つたといふだ

水筒を空にしたテオロが答える。

「おにーちゃん」

アルルウがくい、とハクオロの袖をひいた。

「どうしたの？ 蜂の巣でも見つけた？」

「アレ、なんかヘン」

半分冗談半分本気で振り向くと、アルルウはびしと一点を指差す。

「アレ？ 変つて何が…」

見えたものにハクオロは言葉を切る。アルルウが指差す先には、もうもつともなくあがつていぐ煙があつた。

「ありやーの先の集落辺りだな… 何燃やしてんだ？」

氣楽なテオロだが、ハクオロの心中ではテオロとは真逆のことを考えた。

まさか…

「兄者…確かにあれは変だ」

オボロも氣がついたようだ。そつ、ただの焚火にしては、勢いが強すぎる。

「みんな休憩終わり！ 行くよー！」

言つがはやいかハクオロはウマにまたがり駆け出す。

「おい、アンちやん！？」

テオロたちも不思議そうにしながら慌ててそれに続く。

もしかしたらあの煙の下では最悪の事態が起こっているかも知れない。

だが……もし本当にハクオロの予想通りの最悪なら、それは有利に働く可能性が高い。

ぎり

思わず最悪すら計算にいれた自分に腹がたつてハクオロは唇を噛んだ。

まだそうと決まつたわけじゃない。ただの焚火かも知れない。ただの考えすぎで杞憂かも知れない。

杞憂であればいいとハクオロは願いながら、ウマを飛ばした。

近づいて村の全貌が見えるにつれ、ハクオロたちは表情を険しくする。

「これは…」

入口にたどり着くころには大きな火は消えていたが、燃やしつぶされた村は建物の残骸や肉の燃えた嫌な臭いでこみあつていた。

「う、うう…」

「… 誰かいののか…？」

うめき声に近寄ると煙の奥から人影が現れた。
しかしどんなに見ても、人影としか言いようがない。
もはや手遅れなほど焼かれたそれは、男女の区別も難しい。

「…」

まだ力があるのか一歩踏み出し、そのまま人影はかくくりと人形が落ちるように倒れた。

息がないのは明らかで、近寄ることさえ躊躇われた。

「酷い…」

エルルウが小さくもらした声は、全員の心内を表していた。

そう、これは、あまりに酷い。

「…、エルルウ、下がつて」

「え…あ」

だからハクオロは、勢いを徐々に無くしていく煙の向こうから現れた軍勢を睨みつけた。

「てめえらつ！ お前らがやつたのか…？」

オボロは現れた軍勢・ウマにのつたベナウイたちに睨みつけながら問いかける。

「やうだとしたら、どうだと言つのです？」

「大将…？」

ベナウイの平坦な聲音にオボロたちはますます怒氣を強くするが、若干慌てたような疑問系の呼びかけに、ハクオロはついと視線を向ける。

筋肉質の大男・クロウはベナウイとは違いありありと感情を浮かべている。それは困惑だ。

「貴様あつ」

「やめろオボロー！」

それを察したハクオロは一瞬疑問が頭をよぎるが、すぐに頭を切り替えて激昂するオボロを制する。

今は、「考え」としている場合ではない。

ハクオロはじつと、ベナウイを真つ直ぐに見る。

「今一度問います。降伏する気はありませんか？ 今なら命だけは私が保証します」

ずいぶんと、甘い言葉だ。もしかすると彼は本氣で言っているのか
も知れない。

だが仮に言つ通りにすれば極刑は免れないだろう。
未だ反乱の意を示していないこの村が全滅させられていることから、
國の方針は明確だ。

彼一人が何と言おうと変わりはしないし、何より・

「悪いけど、それはできない。」

今更だ。今更、武器を下げるなんてできるはずがない。
後戻りなんて、始めから誰も考えてはいない。

「僕は信じてくれる人にはできるだけ応えてあげる性分なんだ。よ
つて、君の提案は却下だ」

にやりと不敵に笑うハクオロ。それにベナウイは皿を細める。

「でしょうね」

それは静かで沈痛だが、どこか喜色の混じった肯定だった。
彼の心境はハクオロにはわからない。ただ始まる戦いに、武器を構
えた。

「ハクオロさん、アルルウが…っ」

今にも互いに飛びかかりそうな間際、小さく囁かれたエルルウの言
葉にハクオロは視線だけ自陣に走らせる。

アルルウ…ああもうどこ行つたあの不良娘…!!

「アルルウは大丈夫。なんたって主が付いてるんだから。それより
君は僕から離れないで。いいね？」

「つ…はい」

アルルウは心配だが、ムックルがいるのだ。最悪逃げるくらいは容
易い。

エルルウもそれは理解しているのか神妙に頷き、身構える。

「作戦会議は終わりですか？」

「…まあね」

氣付かれて待つていたようだ、全く持つて、舐められている。

「そうですか。では…参る!」

ベナウイの一言と共に、全員が動き出した。

「お前は俺が倒す！」

「あなた程度の腕ですか？ 甘いですね」

オボロの言葉にもベナウイは冷たく切って捨てる。

「甘いかどうか、試してみる!」

オボロは怒りを抑え込みながら力をこめて誰よりも早く突撃する。
しかしふたナウイよりも先にオボロの前にクロウが立ち塞がる。

「どけっ テクの棒!」

「なんだと鳥ガラがつ!」

軽口を叩きあいながら、オボロは剣を交差せせる。

「あなたは、僭越ながら私がお相手しましょ!」

「そりやあ、光栄、だつ」

各々、自らの役割のもと戦いが始まり金属音などが鳴り響く。

かくして始まつた戦いは抵抗を余儀なくされていた。
それはある意味当たり前で、むしろ軍属に対し即席反軍にしてはよ
くやつてゐる方だろう。

しかし、それでは足りない。

その時 -

「グルオ――――ツ――！」

咆哮が場を支配した。

あまりに巨大で豪快な雄叫びに剣撃が止み、一瞬場が静まつた。

そして次の瞬間

ドシャツ -
-イン

「おに～ちゃんの敵、やつつける

崖の上から飛び下りて小さく地鳴りをたてながら、ムックルにまた
がつたアルルウがど真ん中に着地した。

「グオ――！」

アルルウの小さいながらも力のこもった言葉に応えるように、ムックルは吠えると近くにいる兵に襲いかかる。

濡れないかぎりは無敵とかすムックルが口より小さなウマに負けるはずもなく、騎兵は数を減らしていく。

さらに相手の殆どが騎兵だったのも幸いした。

ムックルという森の主の存在に人間は勿論、ウマはより顕著に怯えを露にし、足並みを乱したのだ。

「お、お、そりゃあ、反則だろ」

「くつ…引きます！ 下がりなさい！」

思わぬ大物の登場にクロウが焦りまじりに軽口を口にして、ベナウイは即座に反転の指示をだし、

隊列はやや乱れながらもハクオロ側と距離をとる。

アルルウとムックルはそれに睨みつけながらハクオロを守るように近くに移動する。

「貴様、逃げる気か？」

オボロは言葉を投げるが以前のように一人で突っ込みはしない。

「はい。今日のところは失礼します」

ベナウイは静かに、何の躊躇いも未練もなく退却を宣言する。それは引き際を見極めた優秀な大将であることを示している。

しかしそれと同時に、甘いともハクオロは思う。

ハクオロも人のことは言えないが、どうにも違和感がある。

「ですがその前に一つ…二つ、聞かせてください」

引いてくれるのならば、ハクオロとしても異論はない。

十分な距離が空いているのを把握しながら、黙つて質問を促した。

それにベナウイは頷き、ハクオロに問いかけた。

「あなたは、自分のしていることが正しいと信じていますか？」

「当たり前だつ。義は、俺たちにあるー！」

正しくないと空氣を含んだ質問にオボロが反射的に答えるが、ハクオロはそれを手で止める。

「兄者？」

オボロはそれにいぶかしげに呼びかけるが、ハクオロはオボロを放つてベナウイを見返しながら自身の答えを述べた。

「もし地獄ディネボクシといつものがあるなら、僕はそこに墮ちるだらうね」

自虐的とも言える発言にオボロたちは反応したがベナウイはやはり顔色を変えないまま、再び口を開く。

「私は侍大将の一人、ベナウイと申します。あなたの名を、教えていただけますか？」

「僕は、ハクオロだ」

「…その名、覚えました」

「ああ…じゃあ」

「ええ、また戦場でお会いしましょう」

そしてベナウイたちは去つて行つた。

視界から彼らが消え去り、ハクオロは肩の力をぬく。

なんとかなった…か。とは言え、今回は完敗だな。

「あいつらよくも…こんな酷いことができたものだな。兄者、どうしてあんなことを言ったんだ。地獄なら、あいつらこそふさわしい」「でも、あいつらがやつたにしては様子がおかしいとは思わなかつた?」

ハクオロの問いかけにオボロはん?と首を傾げる。

「様子? 何がだ?」

「ベナウイ、だよ。彼が本気ならあんなものじゃない。てゆーか、僕が彼とマトモに戦つて大丈夫なわけないし」

「兄者…そんな堂々と…」

いやー、あはは。まあ、事実だしね。鍛錬はしてるけど、正直まだまだって感じだし。

「それにどちらにしても、こうじうじがないように俺たちは動いてるんだ。なのに何で地獄なんだ」

あー、まー、ね。それは完全に僕個人の問題と言つか…。

「今回のことでの戦局は大きく変わる。今までは傍観してた人も向こうから合流していくようになるよ。なんたって、明日は我が身だからね」

言いながらハクオロは苦笑気味に笑う。

「なんて、こんな惨事も駆け引きとじてすぐに計算に組み込む。こんな僕が、正しいと思つ?」

そしてハクオロはみんなを一瞥してから苦笑を自嘲に変える。

「そもそも、僕が戦を始めなければこの人たちは死ななくてすんだ……そんな僕が、義だなんて……笑っちゃうよ」

「おにーちゃん」

ぐ、とアルルウの小さな手がハクオロの袖をひいた。その、不安そうな顔にハクオロはぽんと頭を撫でた。

「アルルウ……」めんめん、なんか暗くなっちゃったね

あー、しまったなあ。つい弱音を…。

「兄者…、それでも兄者は、毅然としてなきや駄目なんだ」

オボロの言葉にハクオロは薄く笑いながら顔をあげた。

「そうじゃなきや兄者を信じてついてくるやつらに示しがつかない。たとえ嘘でも…兄者は、兄者はつ」

「わかつてるよ、オボロ。わかつてる」

苦しげに言うオボロにハクオロは笑いかける。

「わかつてるから大丈夫。愚痴はこれで最後にするよ。僕には、迷つてる暇なんてないからね」

「おにーちゃん、肩車ー」

「はいはい、お…とど」

せがまれるままアルルウをのせる。

「兄者…俺にとつては、正しいかはどうでもいいんだ。俺は兄者についていく。たとえ間違つてるとしても、兄者にずっとついていく」

「オボロ…」

真剣なオボロの告白じみた言葉に照れながら見回すと、今回着いてきてくれたみんなが、真剣に頷いてくれた。

「ははっ、困ったなあ。僕つてばモテモテだ」

ハクオロは、照れ隠しに笑いながら応えた。

最初から側にいたここにいる人たちにだけは、愚痴を言いたかつた。受容されたかつた。

それはハクオロの弱さだったが、当然のように受け入れてくれた。それがたまらなく嬉しくて、やっぱり迷つての場合じゃないなとハクオロは思った。

「さて、帰ろうか。みんな、待つてるよ」

笑つて言うと口々に返される返事。

それが何となく嬉しくてハクオロはまた笑つた。

商人がやつてきた

「ベナウイはあるにやも」

「は、元元」

煙を吐きながら氣だるげにされた呼びかけにベナウイはすつとインカラ皇の前へと姿を現した。

「おみやあ、叛軍討伐にまた失敗したそつにやもね」

「我が力及ばず、申し訳ありません」

淡々とされる謝罪に、だが無感情なのは知つてるのでそれを氣にした風でもなくインカラ皇はまた煙を吐いた。

「申し訳ないですむ問題じやないにやもよ。侍大将であるおみやあが尻尾まで逃げては、朕が愚民どもに舐められるにやもよ」

そつ言つてふは口と煙を吐くインカラ皇は、しかし言葉ほどの不機嫌さはない。

「いやふ、まあいいにやも。こまじりは愚民どもも、朕の偉大さと恐ろしさで恐怖にふるえてるにやも」

「やはりあれば…あなたの仕業でしたか。何故のような、何の関係も罪もない民を殺すよつた真似を…。国を支えるのは民なのですよ」

「バカを言つてないにやも。国は朕によつて成り立つのであって、愚民どもはおまけにやもよ。あいつらは見せしめにやも。たかが集落一つでガタガタ言つでないにやも」

「しかし・」

「おみやーが不甲斐ないからこゝも。全く、朕の髪にもしもの」と
があつたうどつするにゃ もよ」

ふん、と鼻をならすインカラ皇にベナウイは静かにただ沈黙を返す。
変わらない表情からは、彼の内心は全く読み取れない。

「おお、ヌワングギ。帰ったにゃ もか

ふいにベナウイの背後に視線をやつたインカラは田尻をさげて声を
かけた。

そこにはインカラがいつようこひきひヌワングギが入つてくるとい
うだつた。

ヌワングギはにやにやと笑いながら挨拶をする。

「おひへ、呼んだか伯父貴」

「びひやひヌワングギはインカラに呼ばれていたようだ。

「ふふん、ベナウイ、そんな生意氣なことを言つてられるのももう
終わりにゃ もよ。朕はこのヌワングギに、おみやーと同じ侍大將オムツイケルを任
せるにゃ も。この意味がわかるにゃ もね」

「……御意」

言外に、無用な意見でインカラを煩わせるならば首にする。代わり
はいるのだと告げるインカラに、ベナウイ少しだけ間をあけたがす
ぐに頭をさげた。

そのままヌワングギはくつくつくつと忍び笑いをした。

「 よう、ベナウイさんよ

退室し廊下を歩いてくると声をかけられた。振り向くと予想通りのにやにや笑い顔があった。

「 私に何か?」

「 へへつ、なあ!」。噂によるとすこいぶん苦戦してくるやうじやないか。焼きが回ってきたかい?」

にやにやしたまま近寄ってきて馬鹿にしたように、実際格下だと思つてゐるのだから、ヌワンギは至極楽しそうに嫌みを言つてきた。ベナウイは涼しい顔で流そうとしたが、彼の隣にいるクロウは我慢が苦手な直情型だ。

ぐつとヌワンギの襟首を掴みあげて睨みつかる。

「 あ? なんか言つたか?」

「 ぐえ、な、なんだこの手はよお。」「、腰巾着が、侍大将に手をあげようつてのか?」

体格のいいクロウに睨まれたヌワンギは顔色を変えながらも、精一

杯の虚勢をあげる。

虚勢といつても位は本物だ。ヌワンギはつむり笑いを浮かべる。そんなヌワンギにクロウはますます力をこめようとするが

「やめなさい、クロウ」

己の大将の静止に手を離した。解放されたヌワングギはげほげほと咳込みながらクロウを睨み、また脅し文句を言おうと口を開く。

「部下が大変失礼しました」

しかしその前にクロウが淡々と謝罪する。

「どうも私の部下は子供じみた悪戯がすぎるようです。まさか侍大將ともあろう者があの程度の戯事にムキになるとは思いませんが、どうか許してやってください」

悪戯、戯事というには力の入った態度だったが、そう言われては侍大将になつたヌワングギとしては引き下がるしかない。何故なら彼は侍大将だから。それが今ヌワングギの最もたる誇りだから、引き合いにだされては仕方がない。

「ちつ…せいぜい足元すべれなによつに氣をつけな

ヌワングギは忌ま忌ましげに一人を睨みながら捨てゼリフをはいて去つて行く。

「（）忠告、感謝します」

ベナウイはその背中に形ばかりだが礼を言つが、ヌワングギは聞こえなかつたかのように無視をした。

ヌワングギが角を曲がり姿が見えなくなつてからクロウは大きく舌打ちをして、ベナウイに話しかける。

「あのチンピラに毛が生えたような男が侍大将なんて…。あれじゃ、足軽頭がいいとこですぜ。なあ大将？」

「さて、どうでしょ」「う

てつきり同意されると思っていただけにベナウイの曖昧な返事にクロウは驚いて勢いよく尋ねる。

「まさか、やつが侍大将の器とでも？」

「いえ…ですが、チンピラとあなたは言いましたが、そういう人種は追い詰められるとなにをするか判らないものです。あの瞳の奥の影…気になります」

氣味が悪いようなニヤケ面しか思い出せないクロウには、ベナウイの言葉はピンとこなかつた。それを察したベナウイは付け加える。

「集落をやつたのが、彼だとしたら？」

「まさか…？」

さつと神妙な顔になるクロウに、ベナウイはふと息を吐いて空氣を変える。

「…憶測にすぎませんが。それより、今は他にやらねばならない事があります。クロウ、戦況の報告を」

「ういっス！」

ベナウイの話題転換にクロウは空氣を読んで、あえて元氣よく返事をした。

「あいたた。そんなに突つつかなこでくだせこよ。わやんと歩きますか」

エルルウとハクオロが歩いているとそんな聞き覚えのない声が聞こえた。

そちらに向かい顔を出すと、テオロが線と田の細い、荷物を背にし杖をもつた旅人らしき男を連れていた。

「どうかしたんですか？」

近づきエルルウが声をかけるとテオロはおひ、と応えて男に会図して歩みをとめて立つ。

「ほこつ、キロキロと探るよひしてた怪しげ男なもんでな。
連行するといふだよ」

「そんなん、あつしはただ行商のためにほこつただけですよ」

情けない声で男が反論するがテオロはくつと驕慢にすり笑う。

「だつたつひひ心びるよひな真似したんだつてんだ」

「ですから、ほこつにはよくして貰つてたんですよ。今回も行商ついでに宿を借りよひとしたんですが、中にいれてもられないから番が

変わつて私のことを知らされてないんだと思つたんです、ハイ。中に入りさえすれば暖かい寝床で寝られると思ったのですが……そしたら、あなたたちに占領されたつていうじゃないですか

順序だてて若干芝居がかつたように説明する男に特に不審などいひはない。

「もう勘弁してくださいよ。私はただの商人なんです」「いひ言つてるが……あんちやんどうする?」

泣きそうな声で許しをいひ姿にテオロはやれやれとハクオロに意見を求める。

「せうだなー、じゃあ、どんなものを扱つてるの?」

テオロの様子にハクオロが上の人間であると判断したのかぱつと笑顔になつて男は答える。

「お頼みになられれば、人身売買以外はなんでも扱いますですハイ。」「では、これがよく売れてましたです、ハイ」

ハイ、ハイと癖なのか自分で相槌をうちながら男は背負つている荷物から何か、見覚えのないものをとりだした。荷物からとりだすのには少し警戒したが、武器でもないのでハクオロは首を傾げる。

「これは薬としてつかわれているのですが……」「マポツティの……?」

男の説明がされる前に驚いたようなエルルウの声が遮つた。

どうも知つてゐるらしいが、薬ならば当然か。

エルルウの博識に男は驚いたのかはわからないが声をかける。

「これはこれは、よく」存知で

「彼女は薬師だからね」

ハクオロが得意げに答えるが、何故か顔を赤くしているエルルウはそれにツッコまない。

「他には、こんなのもありますよ」

「これも何かの薬なの?」

「えつと…その…」

「なんでえ、知らねえのか」

さうに出された商品にハクオロが尋ねても、エルルウは照れているように身を視線を泳がせて曖昧な返事をする。それにじれたテオロが聞くとエルルウはむつと眉をつりあげる。

「知つてます!」

「じゃ、なんでい」

「それは…」

薬師として商人より知識がないと思われるのは嫌なのは強く言ったエルルウだが、再度問われるとやはり口を開ざした。

なんだろ? エルルウが知らないとは思えないけどなあ。

ハクオロが首を傾げていると男が説明をした。

「これは海にすむヘラペッタという生き物の……ですな。精力剤と

して効果は抜群です、ハイ」

『……』の部分で急に声を潜めたので聞き取りづらかつたが、どうやらオスの性器のようだ。

なるほど、エルルウが口を閉ざしたわけがわかった。薬品として扱うにしても言いづらかつたのだろう。

そんな初さが可愛らしくてハクオロは少しだけ笑った。

「おひとつどうですか？」

「ダハハ、今度試してみつか・イデ、イテテ、なにすんだ」

男に勧められにやけるテオロに恥ずかしいのか口をへの字にしたエルルウが背中を殴る。

「そちらの田那も如何ですか？ そちらのお嬢さんも一晩寝かせなくなりますよ」

それを見て男は今度はハクオロにふってきた。エルルウは真っ赤になりながらハクオロを睨んで威嚇していく。

「うーん、魅力的な話だけど、どうやら彼女にはまだ早いみたいだからいいよ」

「そうですか、残念です」

エルルウを見ながら答えると、エルルウはますます顔を赤くして怒っているのか単に照れているだけなのか区別がつかない。

あとで機嫌をうかがつておじつと決めて、ハクオロは表情を正して男に告げる。

「とにかく、ここはいついく場になつてもおかしくないんだ。す

ぐに立ち去つた方がいいよ

「そんな旦那、御冗談を。でしたらなんでこの娘や、あの娘のよつ
な可愛い女の子がいるんです?」

男の言葉に視線をやると、ヒヒヒヒヒアルルウが近寄つてきていた。

「おに～ちゃん」

「アルルウか、どうしたの?」

相好を崩して頭を撫でると、その手にすりよるよつよひりと瞬
をならしながら抱き着いてきた。

「妹さんですか、可愛いですねえ」

「せうでしょうとも」

兄馬鹿全開で答えるハクオロをスルーして男はアルルウに話しかけ
る。

「こんにちは、お嬢さん。飴をどうです」

笑顔で飴を差し出されたがアルルウは男をじっと見てからハクオロ
の後ろに隠れた。

「あら?」

「気にしないで、アルルウは人見知りなんだ」

「そうですか。しかしくさ場になるというのは本物に冗談ではな
いのですか?」

「そうだよ、この娘たちは…まあ、色々あるんだよ。とにかく、無
関係の人を巻き込むわけにはいかないからね。あなたはすぐに離れ
た方がいい」

「はあ……」

不承不承頷く男に、確かにこの状態は少しおかしいんだろうなあとハクオロは思いながら、男のために少量だが水と食料を用意させることにした。

「すみませんねえ」

男は恐縮しながら水と食料を受け取る。

「道中気をつけてね」

「はい、ああ、そうそう」

挨拶をして歩きだした男は、だがすぐに何かを思いだしたように振り向いて2、3歩ハクオロに近づき、小走りに声をかける。

「お礼に少しばかり忠告を……」

「忠告?」

声が小さいので顔をよせながら尋ねる。男ははい、と答えて動いた。

「これです」

「 -ツ！？」

「んグツ、なんだ？」

何の前触れもなく男から強い殺気が発せられ、ハクオロと遅れてテ
オロが声をあげる。

なにつ、この背筋に突き刺されるような冷たい悪寒は。空気が凍りつ
いたような感覚…まさか…

突然の殺気に負けないようぎりと歯をかみしめながら男を睨みつ
けるが、男は飄々とした態度を崩さない。

「無用心です、ハイ。もし私が刺客でしたら…既にあなたのお命、
頂戴しておりますよ」

「お前は…」

「動かないでください。既に間合いでありますから」

男が手にしていた杖が二つにわかれ、その隙間からは鈍い光が漏れ
る。

仕込み杖かつ。

旅をするのに杖を持つのは珍しくないので氣にもとめなかつたが、
まさかこの男が敵だとは気づかなかつた。

ハクオロは己の油断に舌打ちしそうになるのを抑え、男の一拳手一
投足を見逃さないようにしながら尋ねる。

「僕を…斬るのか？」

「いえいえ、先程も申し上げました通り、少しばかりの忠告を…つ
とと」

ふつと殺氣は消えて驚いたように男は杖をさげて手をあげた。

「あ、あの、お嬢さん。何もしませんから、後ろのそれを、引っ込めていただけませんか？」

男の視線を追つて振り向くと、アルルウを頭にのせたムックルが牙を向いていた。

「ヴルルルル…」

低く唸り声をあげる姿にひええと男は先程の殺氣が嘘のように情けない声をあげた。

「これはいけませんです、ハイ。私はこれで退散させていただきますです、ハイ」

そつと男は何か道具を出した。カツと一瞬光に目がくらむ。

「ぐー」

瞬きして視界が戻るとすでに男は消えていた。

「いない…逃げたか、つと」

ぽふつと腰から足にかけて抱き着いてきたいつもの感触に反射的に頭を撫でる。

アルルウはうへへと声をあげながらぐりぐりハクオロの体にほお擦りする。

「『めんね、いつも心配かけて』

しかし、あの男は一体なに者だったのか。わからない。
ハクオロはテオロに頼み、これからも怪しい人間がいたらすぐに捕まえるように全体へ指示を出した。

日が沈んだ夜、ハクオロを悩ませた細い男が闇に身を隠しながら現れた。

それ待つていたベナウイは顔をあげて尋ねる。

「『苦労です、チキナロ。それで如何でした?』

細い男・チキナロは笑いながら答える。

曰く、面白い、人を惹き付ける魅力をもつ人だ。と。

ベナウイはその報告を無表情のまま聞きながら、頭の中で反復する。

「約束のものです」

「お代は確かに。毎度ありがとうございます、ハイ。詳しい内容はこちらを『』覗ください」

チキナロは報酬と引き換えにベナウイに書簡をひとつ渡し、再び暗闇へ姿を消した。

ベナウイは一人になり、書簡を開きながら一人ごちた。

「ヒトを惹きつける、ですか…」

言葉は誰の耳にも届かなかつたが、ベナウイ自身に重く沈んでいつた。

それがどういう影響をもたらすかは、誰も知らない。

商人がやつてきた（後書き）

久しぶりの更新です。

ほんつともうお待たせしてすみません。

ハクオロが絡まないところはあまり変えられないで辛いです。

とにかく次は9月中にまた更新します。 ゆっくりですがまた定期更新できるようがんばります。

つまく言えない

ハクオロを筆頭にこの皆における要となる者たちが頭を付き合わせ、今後のこと話し合っていた。

「ユタフ、エップカラ、サン、ワッカイ… 今日だけで4つの集落が集まりましたね」

集まつた血判状を見てお茶を配つていたエルルウが感心したように言った。

ハクオロらの傘下に加わりたいと、指示に従つ血を血判状に誓つて屈強な男たちが他の集落から次々に集まつてきている。

これはやはり先日、無関係な集落が焼き払われたのが効いているのだろう。

それを思い少しだけ雰囲気が暗くなりかけた。

「兄者、いま戻つたぞ」

が、タイミングよくオボロが戻ってきたのでそれは免れた。オボロが席についたのを見てハクオロは氣合いをいれて声をあげる。

「よし。じゃあみんな聞いてくれ」

現状、悲しんでいる暇はない。

國を相手取るためにには圧倒的に人手が足りないのだ。

それが今回のことでのハクオロを中心とした集まりはもはや単なる一揆の群集ではなく革命軍と言えるほど規模になり形になってきた。そこでついにこちらから攻めることになった。

といつてもいきなり都に攻め込むわけではもちろんない。さらなる軍強化のため関を落とそうというのだ。

「現在の戦況を表すとこうなる。これを有利にするのに邪魔な関所がいくつかある」

ハクオロは大きな地図を広げ、皆に見えるように自國の中をいくつかの駒を並べて示していく。

「特に邪魔なのはこここの、タトコリの関だ。これさえなんとかすれば分断されていた集落と連携が可能になる。

通行料を巻き上がるための関だからそつ強固ではないけど、増援されると厄介だし手の内が読まれても困る。

だから多方に陽動を仕掛け敵兵力を分散させ、その間に本隊が防壁を破壊するという策でいこうと思う。

何か質問がある人は挙手を」

一通りの説明の後、顔をあげてハクオロが問い合わせるが誰も手をあげない。

よし、と一つ頷いてハクオロは皆を見回して口を開く。

「決行は明朝の日の出だ。始めつ」

「応つ」

ハクオロの掛け声に皆声を揃えて応え、解散となつた。

「…ふう」

一人になつたハクオロは地図を片付け、ため息をついた。

明朝からなので起床はいつもより早い。早めに体を横にしておいた

方がいいだろ？

武具や馬の準備は済んでいたはずだ。いつでも大丈夫なように備えてきた。今の伝令が全員に伝わるのに一刻もあれば十分だろ？
頭が冴えているので、軽く見回つてから寝ることにした。

「あ…」

部屋を出ると途中に退室していたエルルウがいた。少し氣まずそうだ。ひょっとしてハクオロを待っていたのだろうか。

「エルルウ…時間ある？ 少し話さない？」

「…はい。大丈夫です」

「よかつた。じゃあ、僕の部屋でいい？」

「はい。お茶を持って行くので、先に行つて下さい」

「うん」

エルルウは少し暗かつた。明日の話を聞いて感傷的な気分になつているのだろうか。

なんとなくエルルウの気持ちはわかる気はしたけれど、わからない気もした。はつきりと言葉では言えない。

とりあえず話をしよう。

のんびりと自室に向かうとけめいビヘルルウと戸の前で会流したので、戸を開けて促した。

室に入り一人何となく窓際に並んで座った。

「どうぞ。まだ熱いので氣をつけて下さいね」

「ありがとう」

湯呑みを受け取りそつと口をつける。熱かったが我慢できないほどではない。飲み込むと胃があたたくなつてほう、と息をついた。

「お疲れですか」

「ん、まあね。でもエルルウもみんな頑張ってるんだから僕だけサボるわけにはいかないしね」

「…明日、行くんですよね」

「うん。聞いてた?」

「…すみません」

「別に謝ることはないよ。エルルウが聞きたいなら会議に参加しつついい。参加するのは自由だよ」

「いえ、そういうわけにはこきませんよ。私には戦うことによくわかりませんから」

わかるとか、意見を出せるとか、そういうことは関係ないんじゃないかとハクオロは思う。

今ここにいる全ての人が話を聞く権利がある。疑問を口にする権利がある。でもその全てに説明し耳を傾けていては時間がかかりすぎる。だから順位をつけてまとめ役をつくり話が効率よく伝わるようになつている。

でもエルルウが望むなら、ハクオロはいくらだつて話をする。納得するまで話したい。

「言いたいこと、本心とか、いくらだつて言つていいんだよ。僕らは家族なんだから」

エルルウが何かに思い悩んでいることは確かだ。一目でわかる。エルルウも、知られているとわかっているのだろう。観念して口を開

いた。

「……本当のところ、私はハクオロさんたちに怪我をしてほしくありません。それは、一番思います。今更やめられないのはわかっています。ただ…少し、苦しいです」

「……うん、ごめんね。苦しめて」

「……違います。私が、悪いんです。こんなこと言つてもハクオロさんの負担になるだけなのに…。ハクオロさんが優しいから、言つちやいました。気にしないで下さい」

「いーや、気にする。僕がエルルウを気にしないわけないっしょ」

顔を伏せて謝罪するエルルウにハクオロはまことひら明るく笑つて、お茶を飲み干した。

「……」

空の湯呑みをエルルウに向けると、ゆっくりした動作でお茶をいた。

「僕も、早くこんなことやめたいよ。だから、ちょっとだけ待つて。すぐに平和にするから。理不尽のない世界にするよ、きっと」

「…………はい」

エルルウは悲しそうに笑つた。

エルルウが望んでる答えはハクオロにはわからなかつた。こんな言葉ではないとは思つたけど、どうすればいいのかわからなかつた。エルルウはハクオロに傷ついてほしくないと言つたが、ハクオロはエルルウにこそ傷ついてほしくない。

「約束するよ」

「？ 約束、ですか？」

「うん」

湯呑みを置いて小指だけたててハクオロはエルルウに向けた。

「指切りしよ」

「……」

黙つたまま戸惑いがちにだされた小指を強引に自分の小指とからめて、顔をあげたエルルウとハクオロは真つすぐに顔を見合せた。不安そうな、儚げなエルルウの表情に胸が苦しくなる。

エルルウにそんな顔をしてほしくない。笑ってほしい。こんな時に無茶な願いだと思いながらもハクオロは願い、小指に力をこめた。

「僕は絶対に生きて君の隣にいる。ずっと君を守る。約束するよ」

「……ハクオロさんは、ずるいですよ」

「そうかな」

「そうです」

エルルウは少し息を吐いて、苦笑した。さつきの無理のある笑みよりずつとマシだ。満面の笑みには程遠いけれど今はこれでいい。

「ゆーびきーりげーんまーん、うつそつーいたーら、お詫びにずっとエルルウの下僕になるよ」

「ふ…なんですかそれ？ どちらもハクオロさんに不利じゃないですか」

「そんなことないよ。どちらもエルルウと一緒にいれるよ」

「…本当、ハクオロさんはずいですね」

「ずるでもいいよ。エルルウが少しでも笑ってくれるなら。エルルウはいくらわがままを言つても無茶や愚痴やハツ当たりをしてもい

「……全部許す。笑つてくれたら、僕は満足だよ」「……ばかですね。なに、言つてるんですか」

エルルウは複雑な、泣きそうな笑い顔で言つた。彼女が今なにを思つているのか知りたいと強く思った。

「そうだね。なに言つてるんだろう。でも本気だから、忘れないでね」

「……ハクオロさん」

「なに?」

「明日、早いんですから今日はもう寝た方がいいですよ」

「え、う、うん。すぐ寝るよ」

「はい、おやすみなさい」

「……おやすみ」

エルルウはさつとハクオロの湯呑みだけ置いたまま部屋をでていった。

ハクオロはそれをぼんやりと見送つてから、湯呑みを口に運んで外を眺めながらエルルウのことを考える。

少しは気が紛れただろうか。あんな約束は気休めにすぎないかも知れないが本気だ。少しでもエルルウが思い煩うことが少しでも軽くなればいいのだけど。

この戦いが始まつてからエルルウは時折陰を見せる。
仕方ないことではある。いつ人が死んでもおかしくない状況で面白おかしく心から楽しんで生活できるわけがない。むしろエルルウは強い方だ。

それでもやつぱり心配だ。

彼女はハクオロにどれだけ心を開いてくれているのだらう。きちんと支えられているんだろうか。

ハクオロではトウスクルと同じほどには到底届かない。彼女は今、誰かに頼れているんだろうか。

ハクオロには大丈夫だよ、一緒にいるよと気休めの願いを口にしてあげることしかできなかつた。

もしかしたらもつと傷つけてしまつたかも知れない。だから急に立ち去つたのかも知れない。

もつとうまく言えたらエルルウを元気づけられたかも知れないのに。そう思い、失敗したなとハクオロはため息をついた。

「うまく言えない」（後書き）

かなりぐだぐだ会話です。

エルルウは自身でもどうにもならないけど現状が不安で暗くなったりして、ハクオロはそれを察しています。なにを言えばいいのかはわからないのですが放つておけないのでとにかく話しかける流れです。

原作でのハクオロはうまく言えないことはうまくかわしたりしますが、この話ではど真ん中に突っ込んで行きます。理論整然としない話し方をしたりします。

本当はこの話で闇を落としてる予定だったんですが何故かこうなりました。

敵の思惑

部隊の半数を引き連れたクロウは先行して敵を追っていたが、森を進むとあちらこちらへ分散し、しかもまた別の敵が出て来るので標的を見失つていらいらとしながらウマを止めて立ち止まつた。

「クソ・厄介な所へ逃げ込みやがつて。 いう足場が悪くちや、思うよつに動けやしねえ」

カカンツ -

自分へ向けられた数本の矢を軽く弾き、そちらへ視線をやるがすでに敵は移動している。

こちらへダメージはないが、先程から今の様に互いに決定打もなく手応えのないやりとりにクロウは舌打ちをする。

「チツ。 テメヒら、玉あぶら下げてんなら、隠れてないでひとつと出て来やがれ！！」

木々の向こうに挑発を投げ付けるが返つてきたのは沈黙と弓矢だ。

「か～～ツ、鬱陶しい！！」

それをたたき落として收まらない苛立ちを声にする。

「落ち着いたりどうです、貴方らしくもない」

追いつき後ろから声をかけてきたベナウイと部下たちに、クロウは振り向きながら逆立てていた眉をおろす。

「大将、そりや分かつてやすがね。いつもチヨコマカされたら苛々もしやすぜ」

「まさかここまでとは…正直、驚いています」

「あ？ あー、確かに奴らがここまで大きくなるとは思いやせんでしたが」

ベナウイの言葉にクロウは頷いて同意を示す。

敵の腕前自体は大したことはない。一体一なら絶対に傷一つなく勝利できるし、部下も同じだ。

にも関わらず手こずっているのは相手の数だ。連携を組み、あちらこちらからと攻撃を仕掛けてくる。一つ一つがたわいない攻撃とは言え、弓矢を無視してくらうわけにもいかない。そうして気をとられてしまい、今だ敵殲滅は敵わない。

しかもそれはここだけではない。出陣が下った時でさえ複数ヶ所で同時に反乱が行われていた。

おそらく示し合わせて行うことでのちらの兵を分散させているのだろうが、一力所にこれだけの手数を割けるのならばかなりの勢力だ。もしかすると、人数はもはや軍に匹敵するほどかも知れない。いや、むしろ、それ以上に？ 軍でも皇の横暴さに反感を持つている人間は少なくない。何人か、軍を止めた人間がいることもクロウは知っていた。

「いえ、勢力もそうですが。驚くべきことは、これ程までに統率がとれていることです」

しかしベナウイは軽く、肯定して否定した。

森は静まりかえつていて、まるでベナウイ達しかいないかのようだ。時折やつてくる矢のみが敵の存在を表している。

「通常、軍勢の急速な拡大は兵を鳥合の衆にしてしまいます。にも

関わらず、彼らの動きは熟練のものを思わせます

敵はクロウの挑発にも全く反応せず、今もベナウイ達は固まって立ち止まるところ、絶好の隙を見せて、いに襲い掛かってこない。淡々と、相変わらず位置を気取られないようにと四方八方から狙っている。統率のとれた、方向性が一貫した動きだ。

「合戦を知らない民にそんな真似が出来ると思いませんか？」

「叛軍の、あの野郎ですか！」

嫌そうな顔をするクロウに、ベナウイはふうと息をついて誰に言うでもなく言葉を続ける。

「ハクオロ…、甘く見るつもりはなかったのですがその考え方自体、甘かったようです」

表情の起伏に乏しいベナウイだがクロウにはそこから深刻そうな雰囲気を見て取り、やれやれと大袈裟に肩を竦めながら辺りを見回して話題を変えた。

「にしてもあいつら、チョコマカ逃げ回つてばかりで、ホントに戦う気があるんスかねえ」

「戦う気が…あるのか？」

クロウが何気なく言つた言葉がひつかかり、ベナウイは繰り返す。それにクロウたちが視線を向けるがベナウイは応えず、しばし沈黙してから顔をあげた。

「なるほど。そういうことですか」

「なんスかい、そういうことって」

呴くようなベナウイの言葉に皆、疑問顔になり代表してクロウが尋ねた。ベナウイはふ、と息をついてから視線を厳しくしながら答える。

「囮ですよ、これら全部か」

「匂い！？ まさか、これ全部が…」

「おそらく別の狙いがあるのでしょ？ これはそこから皿を逸らす為の陽動です」

ベナウイの何でもないよう言つた言葉を理解した瞬間、クロウはぐわっと皿つきを鋭くして歯を剥き出した。

「糞がつ、騙してくれやがったか！」

「問題は何に対するの囮なのか…。これだけの戦力を囮にするとなると、そんな大規模な行動は… 精々、閑を落とすくらいしか… しまった！」

クロウの激昂を横目にベナウイは顎に手をあてて考えこみ、すぐに顔をあげた。その顔には珍しく、部下にもわかるくらいに焦りと驚きが込められていた。

「タトノツの闘… つ、だとすれば今なら十分間に合います」

独り言のように囁こながらクロウを反転させたベナウイは部下に指示を飛ばす。

「敵はタトノリの闘を襲撃していると思われます。そのまま後方から挟み撃ちにして、一気に殲滅させます」

そして言つが早いかウマを走らせた。

「応つー。」

クロウは大きく声をあげ、笑みを浮かべながら部下を引き連れクロウを追いかける。

走りながらベナウイは距離とウマの速さから時間を計算する。叛軍の行動はこぢらの陽動とは時間をずらして行われるはずだ。今ならまだ、艦が乗っ取られるまでに間に合つはずだ。皆に常駐する兵の数は少ないが、恐らく敵もそれより少し多い程度だろう。ベナウイ達が加われば戦況はひっくり返る。

ビッシュます、ハクオロ。

心の中でひつそりとベナウイは届くはずのない言葉をハクオロへ投げかける。

囮と気づかれるのが、少しばかり早かつたようですね。このままで貴方は終わりですよ。

「…」それで、終わりなのですか

ぽつりと誰にも聞こえない声量で言葉が零れた。それには自覚していないなかつたが残念そうな、悔しそうな成分が含まれていた。

…」今までなのですか？ これで、終わりなのですか？

ベナウイは胸中で答えるこない質問を繰り返した。

「予定通り、攻撃を開始したそうです」

「頃合いだね。よし、行こうか」

伝令の言葉を伝えるエルルウに、ハクオロは立ち上がり促す。エルルウはそれに着くが俯き気味に沈黙している。

「エルルウ」

「はい」

ハクオロが名を呼ぶと少しだけ顔をあげて返事をするエルルウ。だけどやはりその顔は暗い。

何か、言わないといけないと焦燥感に駆られる。だけど何を言えばいいのか、わからない。

「危ないから、僕から離れるな

「…はい」

結局無難な言葉になってしまった。でもエルルウは少しだけ、気を遣つたのだろうけど、微笑んでくれた。

それにハクオロはにこっと笑って前を向いて気合いをいれた。

「よし、出陣だ！」

そして頭を切り替える。

誘導部隊が全て出たならば時間的にそろそろ、囮だと気づくはずだ。
いや、あの男ならもう？ どこまで引っ張れたかも問題だ。
とにかくタイミングが重要だ。頼むぞっ、テオロ！

ハクオロは皆の先頭を切つて、目的の闇まで駆け出した。

「 -ッ、止まりなさい！」

異変にいち早く反応し強く手綱を引きながらベナウイが鋭い指示を
出した。

それに素早く部下は従う、が、最も勢いよくベナウイのほぼ横近く
を走っていたクロウは一瞬遅れた。

慌て手綱を引こうとしたクロウは、しかし自らもベナウイの判断原
因に気づき反対にウマの腹を蹴つ飛ばした。

ドガガツ ガラガラガラ

ベナウイらの頭上、一つ上の崖つぶちから大小様々な岩が落ちてき
たのだ。

砂埃をたてて視界を埋めつくすほどの崩落はあまりにタイミングが良く、明らかに人為的なものだ。

「クロウ、クロウはどうです！？」

ベナウイは一瞬だけ頭上に視線をやつてから、すぐに砂煙に向かって声をあげる。

徐々に砂煙が収まると高くまで積みあがつた岩石の山が表れ、通行はもちろん様子を伺うこともできない。

「イチチ、大将、ここでさあ！」

向こう側にいるクロウが大きな声で無事を報告する。

「なんとか無事つてとこです。ですが、やられましたね」

クロウの無事に安堵しつつベナウイはこの後について考える。この道が最短コースであり、関へ向かう為に不可欠な道だ。その道は塞がつてしまつた。あらかじめわかつていたことなら迂回も可能だつたが、今からでは時間がかかりすぎる。

「ええ…これでは私たちが行くには時間がかかってしまいます」「なあに、すぐそこです。ちょっとくら一人で行つてきますよ」

クロウはさらりと、散歩にでも行くような気楽さでそう言つてから、笑みを浮かべた。

「なんですが、ここまでコケにされたのは初めてで、ちょいとばかり頭に来てやしてね」

笑つたまま、声を変えた。陽気な軽い声から、重く冷たい聲音に。

「本氣で殺りやすぜ」

「…こいでしょ」

その滅多に聞けない静かな強い怒りの込められた声に、ベナウイは一人でも決してクロウが死にはしないだろうと判断して許可をした。またクロウなら、どんなに感情に流されてくるように見えても状況を正確に理解して時には撤退することもある。だからベナウイは安心してクロウに許可が出せた。

「セリヤアー！」

クロウはベナウイの許可を聞くや否や返事を返す間も惜しげどばかりに掛け声をあげ、ウマを走らせた。

それを聞き、ベナウイは反転して部下たちに撤退することを告げた。クロウが持ち帰る情報を待つ以外に今は手はない。

もはやベナウイらは間に合わない。

敵はベナウイが囮だと気づいて、この道を通ることも承知していたのだろう。そしてまことにその通りになつた。

「ふふ…お見通しどこうわけですか」

ベナウイはさっと、部下に気取られないよう口角をあげた。

敵の手の平で躍らされるだなんて、なんて滑稽なことだろうか。あわよくばこの落石で兵を負傷、または兵力の分散まで狙っていたのだろう。そしてまんまとクロウは分離させられた。クロウであったのは、むしろ幸いだ。

これほどまでに叛軍に手こずるようになるなんて誰が予想できただらう。

ベナウイは自分でも明確な理由はわからなかつたが、おかしくて堪らない気持ちになつた。

不敵な笑みを浮かべたベナウイは、付き合いの長いクロウが見ても驚いただろう。それほどに、珍しい表情をしていた。

敵の思惑（後書き）

何とか年内にできました。
全然話が進まないのに一話分になってしまった。文章増やしそぎか。
なんとか今年度中には城を落とさせる予定です。

タトコの関にて

夜明けの少し前、暗く静かな山道を遮るように建てられている大きな門を持つタトコリの関。そつと闇夜に紛れてハクオロ達は関所に近づき戦闘準備を整えた。大きな、といつても越えられない程度のもので関所の規模としてはそれほどの大ささではなく、見張りも一人という少ないものだ。

「 つー？」

ハクオロは小さく合図をするのに合わせ弓兵が矢を放ち、その二人を貫いた。

「がー！？ て、敵襲つー！」

腹部を負傷した方は地に膝をついたが、腕に刺さった方はよろめきながらも立つたまま見張りの役目を果たした。

見張りの声に一拍遅れて警報の鐘がなる。

「チツー行くぞ！ 陣形を崩すな！」
「応ッー！」

敵が出てくる前に号令を出し、一斉に突撃する。オボロを筆頭にする先頭がいち早く辿りつき、関所の上方の小窓が開き弓が降る前に門に丸太をぶつけてこじ開けた。

先手の成功に雄叫びがあがり、さらに皆が我先にとばかりに門をくぐつて関に突入する。

「ぐつ」

「怯むな！ 利はここちらにある！」

それと同時に小窓が開き、弓先が降り幾人かが倒れる。すかさずこちらの弓兵に撃たせ、それに怯んだ隙に兵と共にハクオロも関所へ走りこんだ。

ムツクルは器用に弓も避けて行くのでアルルウに心配はしないが、自分の後ろのエルルウには別で、ハクオロは扇を開きながら視線をやる。

「つは、はつ」

緊張が早くも息があがっているエルルウに、ハクオロは空いてる手で彼女の手をひいた。

「えつ」

「離れるなよつ、エルルウはこれが終わってからが本番だからなつ
は、はいつ」

叫び声や唸り声が上がる喧騒の中でエルルウは氣丈に大きな声で返事をした。それに少しだけ、場違いにハクオロは微笑んだ。

本来なら連れてくるにしても先程の待機場所で幾人か兵をつけて待たせるべきなのだろう。

だがハクオロは自分がいない時にエルルウの身に何かあつたら何で考えたくもない。

何てことはない。ハクオロはただ、自分の手で彼女を守りたかつたのだ。傍にいてくれることを選んだ彼女を、誰より傍に置きたかったのだ。

むろんそれはアルルウに対してもだが、彼女にはすでにハクオロより頼もしい護衛がいる。

「行くぞっ、勝利は目前だ！」

背中を向けて言われたハクオロの言葉に、エルルウは頷きながら手を離し、いつのまにか整っていた息を吐いて動き出した。

かなりの数を他に回したとは言え人員が豊富なのでこの関所を制圧するに十分な数を揃えた。さらに陽動へと応援にでも出ているのか想定より敵は少なかつた。

今だ数人の負傷者はでたものの死者のいない。すでに半数を撃沈させ勢いもある。

このまま問題なく制圧は完了する、と思わずハクオロも確信に笑みをつくつた瞬間、ハクオロたちが突入したのとは反対側の門に人影が現れた。

「ダアアツー！」

「ぐあつー？」

その人影は雄叫びをあげながら近くの兵（ハクオロ側の）に切り掛けた。

その力強い一撃に力尽きた屍は地に伏し、それにやられそうになつていた敵兵はあわやといつとこひで助かり、救助者を見て喜びの声をあげた。

「クロウ殿！ 応援に来てくださったのですねー？」

「おう とは言え、俺一人だがな。それに…」

じろりと周りを鋭い眼光で威嚇して、犬歯を剥き出しにして凄惨な笑みを浮かべるのは巨体な怪力の持ち主でベナウイの部下クロウだ。

やつかいな相手の登場にハクオロのみならず全員が動きを止めて敵と距離をとった。

「ちいとばかり遅かつたみてえだな」

少なくなり負傷した味方の姿にクロウは軽い調子で言いながらハクオロに向いた。それに反応してオボロが素早くハクオロとクロウの間へと移動し睨みつける。

それを見てクロウはやれやれとオーバーに肩をすくめた。戦場の空気が少し和らぐ。といつても今にも飛び掛かる状態から口うらの指揮官が動くまで警戒体制になつたまでだが。

じりじりと、現在自動的に指揮官になつたクロウの元へ残つた少ない兵が近寄つていく。

「一人で行くなんて大口叩いちまつた。大将になんて言い訳すりやいいんだか」

「お前は…」

「おう、俺はクロウだ。覚えててくれや」

「あの男はどこだ！？」

「あの男？ ああ、ウチの大将か。なに、わざわざ大将が出るまでもないってことだ。にしても坊主、ずいぶんウチの大将にお熱みてえだが、少しは腕えあげたのか？」

からかう様に笑うクロウにオボロは構えを崩さないまま睨みをさらにはきつくする。

「いつまでも、あの時のままだと思うな

「ほほう？ んじゃ、見せてもらおうか。ウチの大将が出るまでもねえ。俺一人で十分でい！ 行くぜえ！」

「それはこっちの台詞だつ！」

カツと刃と刃が弾きあつ音^{ヒツイ}がして、それを皮切りに再び兵は取つ組み合い戦場の音がなる。

弓兵は他の援護に忙しい。ハクオロはエルルウが戦場から少し離れた隅で味方の治療をしているのを確認してからオボロとクロウに近づいた。

「ガルルウツ」

アルルウを乗せたムツクルが加勢とばかりに跳ねるようにこつちに来る。

「おらあつ

「くつ」

クロウの力任せにも見える攻撃にオボロは流しきれずに思わず距離をとる。

「おらあつ、怪我人はとつとと下がれ！」

しかしその僅かな隙にクロウはウマの機動力を生かして味方に突撃するようにして襲いかかる刃を返り討ちにした。

「うぐつ！？」

「負傷者は下がれ！ 一人でかかるな！ クロウと距離をとれ！」

「弓兵！」

「はつ！」

「あらよつ、と」

肩を切られた味方を下げるハクオロが声をあげると待機していたよう

に『兵の矢が複数クロウへ発射された。しかしクロウは軽く落とす。が、そんなことは想定内だ。

ハクオロは素早くクロウの前方に踊り出す。それに合わせてオボロ、ムツクルもクロウに向かい牙を向ける。

「よう、あんたにはまんまとやられちまつたな」

「でも完璧じゃなかつた。半分はベナウイの読み勝ちでドローかな」
クロウだけが来たと言つことはベナウイが気づくのが少しだけ、一人は通つてしまふくらいに早かつたと言つことだ。単にスピードの問題かも知れないが。

とにかく、クロウというパワーファイターを死人なしに倒せるほど余力はない。一番体力のあるムツクルならあるいはわからないが、アルルウを乗せているのに無理はさせられない。

「？　はつ…やつぱあんたは危険だよ。ウチの大将と同じくらいになつ！」

クロウは一瞬不思議そうな顔をしたがすぐに不敵な笑みを浮かべ、得物を振り上げた。

「おらおらおらー、死にたい奴からかかってきやがれー！」

「ハア・ツ」

「つと。イチチ、少しばらをあげたかい」

オボロの攻撃に腕をかすらせ、クロウは終始絶えない軽口を叩きながら数歩ウマを下がらせた。

彼の妨害により残つて敵のさうに半分ほどはすでに逃げてしまった。ハクオロ達はどうしても脅威であるクロウを無視して動けないので半ば仕方ないことではあるが、それでもたつた一人に手をとられてしまふことはとても容認できることではない。

「今日は分が悪い。この辺で引き揚げるとするかね」

「待てつ、逃げられるとでも思つているのかー！」

「そりよつと」

「・ツ」

背を向けるクロウにオボロは飛び掛かるが軽い掛け声と共に繰り出される強力な斬撃にオボロは思わず飛びずかる。

「んじやな

「アイツー！」

素早く戦線離脱して門をくぐつて遠のく背中にオボロは眉を逆立てて歯を食いしばったが、すぐにやめてハクオロを振り向いた。

撤退するクロウの姿にオボロ以外は勝利の雄叫びをあげ、武器を放つて歓喜した。

ハクオロは苦笑しながらオボロに近寄り、お疲れ様と労つた。

「兄者…」

「やられたね。まんまと時間稼ぎに付き合わされたわけだ。勝つには勝つたけど、素直には喜んでられないね」

まあ、死人がなしどうのは個人的に大収穫だ。それに当初の目的は達成した。

「ま、とにかく勝ったんだ。これで戦況は大きく変わる。僕は手当てを手伝つてくるからオボロはテキトーな人に門の損傷具合とか、中とか、あと…えーっと」

「安心しろ、兄者。ちゃんと言われた通りに書いて残してある」

「ありがと。じゃあ諸々、手筈通りよろしく」

「おう。兄者は体力がないからな。休んでくれ」

「冗談でしょ。女の子だけ働かせるなんてごめんだ」

懐から木簡を取り出したオボロと別れ、ハクオロは隅で怪我人を診ているエルルウの元に向かう。

気が抜けて急に疲れがきた。

「おに□ちゃん」

「おす、アルルウ。お疲れ様。よく頑張ったね。偉いよ。ありがと

う」

お疲れ様、というとアルルウはムツクルに乗つたまま伏せの姿勢をとつたので褒めながら頭を撫でてあげた。

「んふ□」

嬉しそうだ。とても可愛い。ただ、伏せなくてもアルルウの頭は撫でられたことは主張しておいた。

確かに乗つてるアルルウとはそんなに頭の位置変わらないけども。そこまで小さくないよ、わかる?

「んー、ん」

聞いているのかいなか生返事だったがアルルウはいい子なので
聞いていると思想たい。

物欲しげな顔をしていたのでムツクルの頭も撫でると嬉しそうに鼻
をならした。大きくなつてもこうして見るとムツクルは可愛い。

猫科でよかつた。僕猫好きだし。

「さて、アルルウ。エルルウの手伝いに行こつか
「ん」

頷くとアルルウはぴょんっとムツクルから飛び降りて、たたつとエ
ルルウに向かつて駆け出した。

身軽なのは知つてゐるけど、元氣だなあ。

「ムツクルは隅で休んでな
「ガオ」

ムツクルを行かせて、ハクオロはそつとエルルウに近づいた。

「エルルウ、何か手伝うことある?」

「あ、ハクオロさん。じゃあ、水を汲んで来てもらえますか?」

「了解」

返事を一つしてハクオロは頷いた。

タトハツの関にて（後書き）

このペース、だといつ完結するのかわからんね。
遅くてすみません。

戦闘シーンは苦手です。

エルルウの立ち位置悩む。ゲームだと回復要因で一緒にいるけど、
実際は衛生兵は後ろの方で手当して、戦場のど真ん中で薬ぬらない
だろ。よく知らないけど。

あと有り得ないかも知れないけど今回では死人はいない設定です。
ていうか、死人出てたらその知り合いは勝つても手放しに喜べない
気がするんだがアニメとか皆喜んでるし。どのくらい死んでるんだ
ろ。

ヌワンギ、進軍

「ベナウイはおるにや もー」

「お呼びでしょつか

インカラ皇の怒鳴り声による呼びかけに普段と代わらぬ平坦な声で返事をしながら、ベナウイは皇の前へと進み出て膝をついた。

「よくもしゃあしゃあと朕に顔を見せられたものにや もー。おみやあ、また尻尾を巻いて逃げ帰ってきたそつにや もな」

インカラはぶはあとキセルの煙をベナウイに向けて吐き出していくから吐き捨てるよつて言つた。

「我が力、及ばず」

「その間にもヌワンギはチヒンマを制圧したにや もー。おみやあのぞのザマはなんにや も」

「チヒンマ? あそいは、反乱に加わっていない集落ではありますか?」

得意げに、比べてベナウイを嘲笑つよつて言つたインカラの言葉に、ベナウイは思わず顔を上げていた。

その反応すら楽しむようにインカラはぶふうと煙をはきながら笑う。

「ふふン、厄の芽は小さこ内に摘むに限るじやも。見せしめに皆殺しへさせたにや もよ」

「……」

唇をきゅう、ヒ一文字に引き締めてベナウイは鼻から息を吐いた。

空氣を震わせる」といふことで怒鳴つやつになるのを堪えた。

「何をしたか…理解しておいでか?」

それでも、尋ねる声が僅かに震えるのは止められなかつた。

「こやも?」

「御自身が何をしたか、理解しておいでか!」

不思議そうに首を傾げるインカラに、ついにベナウイは声量をあげるのを止められなかつた。眉を潜めてベナウイは辛そつて、感情を抑えるため目を閉じた。

しかしインカラはそんなベナウイの態度に笑いを漏らす。何もわかつていな。皇が全てだ。国は全ては皇の物だ。

「朕が何をしようとも、朕の勝手にやもよ」

「否!…」

インカラのその考へに、ベナウイは強く呟つた。間違つてゐるとい、はつきりと叫ぶ。

「國の基盤は民。民無くして國は成り立ちません。民を蔑ろにする國に明日はないでしょ?」

勢いを沈め、ベナウイはいつものように平坦な声でそう続けた。インカラはその迫力と言葉に、息を飲む。しかしそれと同時に腹の底から怒りが沸いて来た。

「あ、おみやあ…朕に明日がないといいたいにやもか」

「御身がそうお思いになるのでしたら…そなのでしょ?」

「つ、つかあがるにやもー。」

怒りのせいで言葉を吃らせながら、インカラは立ち上がった。

「今までおみやあの武勲に免じて言わしておつたが、この恥知らずの恩知らずめ！ 今度といつ今度はもう我慢ならんにやも……」

鼻息荒くわざうまいと、近くにいる兵士を呼び寄せる。

「誰ぞ、誰ぞあるこゝも」

「」の狼藉者を牢へ引つ立てるにやも！」

ベナウイは侍大将だ。部下も多く、若い兵の殆どは憧れ、尊敬する。何より誰もが、インカラの行動を正しいとは思っていない。それ故インカラの命令を受けた兵士も戸惑つた。

「ええい、おみやあも朕に逆らひやせん！」とか！？」「しかし……」

しかしインカラの命令が正しいか正しくないか、ここにおいては関係がない。インカラは皇であり、その命令は絶対だ。

「いえ、そんな -
「どうした伯父貴」
「おお、ヌワンギ」

そこへ表れたヌワングに、インカラは嬉しそうに声を上げた。そして落ち着いたのかまた腰をおろして煙を吸い、吐いた。

「ふはあ。このベナウイガ、恩知らずにも朕に明日がないなどと吐かしあつたわ」

それにヌワンギはにやにやと、笑みを抑えられないほどばかりに謔を吊り上げながらインカラに近づいた。

「ハツ、そいつは許せねえな。いくら侍大将といえど皇である伯父貴へのその言葉、許せるモンじゃねえなあ。おいテメエ等、さつさとその下衆をふん縛れ。それとも、テメエ等も一緒に首をくくるか、ああ?」「ハハツ!」

追い立てるようなヌワンギに惑っていた兵士は慌てて返事をした。
こつするしかないのだ。皇に逆らうことなど、許されないのだ。

「うひひ…」

促す兵士にベナウイは黙つて従つ。いつもはベナウイにもわかつていたのだ。覚悟をしていた。抵抗し、困らせるつもりはない。「伯父貴。後はオレに任せて、偉大な伯父貴は安心してくつろいでてくれ」

「こやも。後のこととはヌワンギに任せることや もよ」

自分に従順な甥の言葉にインカラは機嫌よく頷いた。

「……」

ベナウイは薄暗い、格子の向こうにある松明のみが光源の中でも静かに腰を落ち着けていた。

まるで外と代わらぬ、いつも通りの態度だった。

「…クックククク」

しかしそんな普段通りのベナウイも、格子越しに上から見下ろすヌワンギにとつてはとてもなくおかしい、優越感をそそられる姿だった。

「ざまあねえなあ。これがあのベナウイ様のなれの果てか」

「……」

「へッ、フヌケて言い返すことも出来ねえか。テメエはもう終わりだ」

くつくつと笑いながら、ヌワンギは背を向けた。

「後はオレ様に任せで、ここで干物にでもなってな」

「……」

ベナウイは何も言わない。立ち去るヌワンギに視線を向けることすらなかった。

「へへへ……」

一人、廊下を歩きながらヌワンギは声をもらした。愉快でおかしくて堪らない気分だ。

何もかもがうまく言つていて、全て順調に思えた。

ヌワンギは明るい未来がすぐそこまで来ているのだと確信できた。

もつすぐだ。もつすぐオレが皇になる。誰も刃向かえない絶対者になる。そうなれば、エルルウもオレを認めるようになる。

エルルウ、もうすぐお前がオレのものになる。

オレにはもう、オマエだけだ。

オマエを手にいれる為なら、何でもしてやる。何だつてな…。

「クク… ククククク」

笑いはしばらく、止まりそうにない。

カンカンカンと鋭い鐘の音が敷地内に響き渡る。ハクオロたちは顔をあげた。

鐘に数瞬遅れて襖が開き、ドリイとグラアが表れた。

「報告します。敵の進軍を確認。その数、凡そ千二百一。」

声を揃えてもたらされた情報に、部屋の空気が固くなる。

「千二百…」

その数に、集まっていた各纏め役である者たちがざわつく。オボロは眉をしかめて舌打ちをする。

「全軍で俺たちを一気に叩き潰す氣か」

「しかし…一気に全軍とは…思にきつたね。ベナウイはもつと慎重なやつかと思ってたけど」

「いえ、敵将はヌワングギです」

会議中で固くしていった口調が乱れたハクオロの独り言に、ドリイがさらに情報を付け加えた。

「！？」

部屋においてお茶汲みをしていたエルルウが耳を立てて反応する。それを感じながらハクオロは一度口を開じてから、開く。

「そうか…」

大軍で一気にというのは単純だが、悪くない手だ。数の差が歴然であるほど効果が期待できる。ただ、少しばかり遅い。こちらも人員を増やしていく、逆に向こうは減らしている。

それに、ベナウイならば気づいただろうが、使い所を間違えている。単純で誰でも思い付くからこそ、陣地であるこここの対策はすでに済ませている。千二百は多いが、慌てずに対処すればイレギュラーでもない限り乗り越えられる。

「静まれっ。指示を出す」

ハクオロは立ち上がりとびわつく衆に向かって声をあげる。途端静かになる人々な、ハクオロは矢継ぎ早に指示を出す。

「第一から第六群、西門より迂回して奴らの背後を叩く。」「衆は左右より援護。敵を挟むまでの間は本隊が城門を死守する」

そこまで一気に言つてから視線で確認する。もはや人々の目に戸惑いはない。

「出陣る（である）ぞ」

ハクオロの静かな始まりの合図に、咆哮が応えた。

「エルルウ
「つ」

お茶をさげているエルルウに声をかけるとびくりと尻尾を震わせた。そのわかりやすい反応にハクオロは少しだけ頬を緩めた。

「な、何ですか？」
「大したことじやないよ。エルルウはいつも通り、僕の側にいてね

つてだけ

「あ…はい、わかっています」

「ああ、それと…ヌワンギのこと、どう思つ?」

「つ…どう、とは?」

あえて二つ目に本題を持つてきたけど、あんまり効果はなかつたらしい。エルルウは目に見えてびっくりと反応した。

「質問を変えようか。僕らは勝つよ。彼をどうしたい?」

「……わ、わかり、ません。だいたい…私の意見なんて、どうだつていいいじゃないですか。大将はハクオロさんで…私はただの雑用です」

「そうかな、僕はそう思わないよ。薬師ほど大事な役職もそういうね」

「……」

俯いてしまったエルルウにハクオロは近寄り、言葉を続ける。

「残酷なことかも知れないけど、僕はエルルウに決めてほしい。ヌワンギのことだけはエルルウに従うよ」

「ど…どうして?」

「ヌワンギは、君の大切な人だったんでしょ? だからだよ」

「……」

「僕が決めてもエルルウはそれに従うだろうけど、僕は君に一片も後悔をして欲しくないんだ。だから決めてほしい」

生かすにしろ殺すにしろ、他人が決めたならいつか後悔する。何せ彼は目に見えて存在するトウスクルの仇だ。

だけどハクオロが一存で殺したなら、他の誰が納得してもエルルウだけは後悔するかも知れない。しかしハクオロが生かしたなら、周

りの反発は大きいだろ？

トウスクルの死はもはやキッカケでしかないが、それでも彼女を慕う者は多くいる。しかしエルルウなら、誰よりトウスクルとヌワングに近いエルルウなら、どちらを選んでも受け入れられる。

ハクオロがエルルウに選択を委ねるのは、ようは彼女に嫌われたくないからだ。とてもずるい、卑怯なことだと思つ。だけど多分、エルルウは彼の生を望む。だからこそ、エルルウにはつきりそう決めてもらわなければならない。

ハクオロはトウスクルの仇討ちに武器をとつたのだ。付いてくれたエルルウとは違う。ハクオロではヌワングを生かそうと言つことはできない。

「……なんで……そこまで、してくれるんですか？」

「その質問は……今更だね。なんでだと思つ？」

「……」

彼女に苦痛を伴う選択を強いるのだって、自分だけじゃなく彼女のためもある。

彼女の意志を尊重したいと、彼女の気持ちを知りたいと、そう思つからこそこんな卑怯なことをしなければならない。

その理由は、今、こんな慌ただしい状況下では言えないけれど。でもいつか、伝えたい。

けしてエルルウたちが命の恩人だからでも、トウスクルの孫だからでもない。もしそう思われるなら、心外だ。ハクオロはそれほど、お人よしではない。

「時間がない。今の質問はまた改めて聞くから、とにかくヌワングをどうするか考えておいて。さ、行こう」

「……はい」

エルルウは小さく頷いた。その瞳は迷いに揺れていたが、それでもハクオロから離れないよう、ハクオロの後に続いた。

メロンギ、進軍（後書き）

ギリギリセーフ。何とか一ヶ月キープです。

最初は「出陣るぞ」までだつたんですが物足りないのでエルルウとの会話追加。ていうかゲームでもエルルウに選択を委ねるなら予め一言くらい言つてしまふべきだと思うんですよね。

ヌワングの最期

「来たな…」

砦の前でヌワングの軍が近づいてくるのを確認したハクオロは振り向いた。

「僕らは橋周辺で敵を食い止める。出すぎるなよ」

あくまで目的は包囲をするための時間稼ぎだ。防衛のための本隊は数は多くないが戦力の要を揃えている。
相手の数があまりにも多いのも幸いだ。一列にこちらへ向かってきているのでまず先頭と戦つ。にはまだ兵の数も少ない。

ハクオロの合図で本隊が橋を渡り、半分はその前で敵を待ち受け、半分は積極的に敵への突撃する。

個別班の編成らしく、兵種ごとに別れてはおらず、『』兵と歩兵がまざり着し先陣を切つてこちらへ牙を向いてきた。

「食らえつ
「ぎやああ！」

弓を避け素早い身のこなしでオボロが兵を倒す。味方の悲鳴に気をとられた瞬間に弓兵にはこちらも弓を放ち、武器を落としたのを見てすぐに兵が突撃する。

全体の数でいくら負けていても、一度に向かつてくるわけではない。余り統率がとれていらないらしくバラバラに攻撃をしかける各兵に向かって複数で攻撃を加えることは、本隊の実力者にとっては容易で

すらあつた。

「クッケッケ、案外しぶといじゃねえか。だがそれも、もうすぐ…」

先頭を走る味方が負傷しても笑みを絶やさないヌワングギは、数故に勝利を確信しているのだろう。

「あん？」

しかし視界の端を霞めた敵兵の姿に眉を寄せた。ただ前にいるとばかり思っていた敵なのに、いつ、横から現れた？

「ハクオロさん、あれ！」

ヌワングギにとつては敵だがハクオロたちにとつてはもちろん味方だ。その姿にエルルウは喜びの声をあげてハクオロに伝えた。

「間に合つたか！」

目論み通り、味方が配置についた。時間稼ぎは成功だ。こちらに有利な陣さえひいてしまえば、多少数で負けようが地の利があり統制のとれたこちらが有利だ。

ハクオロはにやりと笑つた。

「何だあこいつらー？」

それに気づかないヌワングギは、今更になつて辺りを見回しながら四方から現れた敵兵を睨んだ。

「大変です。我々は包囲されております」

「見りや判るんだよ、この糞が！」

ヌワングイの問いかけに慌てながら一人の兵が答えたが、ヌワングイは苛立ちと共に罵倒し、殴りつけた。

「で、ですが…」

「つぬせえ！」

さらには殴りつけ、返事を封じる。

何故もつと早く気づかないのか、のろま、クズが、と罵倒が浮かんだが今は叱責している場合ではない。

「チツ・リハなつたら一日後退して態勢の立て直しだ」

ヌワングイは舌打ちしながら、殴った相手、伝令役に指示を出す。

「ど、どに逃げるんですか？」

「逃げるんじゃねえ！ 態勢を立て直すために後ろを一気に突破するんだよ！」

「今そんなことをすれば被害が…」

問いかに、負けず嫌いなヌワングイは反射的に言い返しながら再度後退を指示するが、伝令役は戸惑いながらも現状を伝える。

四方を囲まれているのだ。元来た道である後ろさえ、敵がいる。それを無理に突破しようとすれば多くの死傷者が出てしまう。しかしそれをヌワングイはイライラしながら問題外だと怒鳴りつける。

「リハにいたら余計に被害ができるじゃねえか！」

囲まれたままでは最悪全滅してしまう。それだけは避けなければな

らない。

「行きやがれ！ 後ろを一気に突き崩せ……」

少しでも負傷者を少なく態勢を立て直すため、早く早くとヌワンギは伝令役を通すのもどかしく大きな声で指示を出した。

それが聞こえた兵たちが反転するが、それを待つほどハクオロは愚かではない。

「鋼の陣！」

ハクオロが声を張り上げ合図を出した。規則正しく並んだ歩兵が剣を振り上げ進軍する。

それを見たヌワンギが率いる兵はその隊列に恐れをなしたか、かろうじて保たれていた並びを崩しててんてばらばらに逃げ出した。

「ぬな……っ」

自分の命令に絶対だと信じていた兵の我が身しか考えない脱却にヌワンギが驚きの声をあげる。

「槍の陣！」

構わず彼らにあげたハクオロの声に槍の歩兵と騎乗兵が構え、ヌワンギらに向かつ。

「ま、て、てめえら何処行きやがるー」

怒鳴りつけるも、先程まで隣にいた兵さえヌワンギに構わず逃げ出した。

命令に従つていては確実に交戦しなければならない。それより自分のことだけなら武器も捨てて走れば逃げ切る可能性がある。ヌワンギを信頼し、命令をさき、~~せわしつゝする~~兵は、誰もいなかつた。

「ま、待て…」

小さくなつたヌワンギの命令は、ただでさえ自分の命を優先する兵たちの耳には、届くことすらなかつた。

「……」

ヌワンギの小さくなつた姿を、エルルウは見つめたまま口を結んだ。何も、かけるべき言葉はなかつた。先程ハクオロにされた問いの答えは、もうでている。

「え、エルルウ…」

エルルウの視線に気づき、ヌワンギは無意識にその名前を口にしながら、見つめた。

その表情は固く、かつて口に向けられた柔らかい、ヌワンギが好きだった笑顔とは似ても似つかない。

「へッ！ てめえが… てめえがいたせいで… っ」

エルルウにそんな顔を向けられた事実は辛く悲しく、ヌワンギはエルルウの隣に立つハクオロを睨みつけた。

ハクオロさえいなければ、エルルウがいるのは自分の隣だったのに。

ヌワングにはハクオロが全ての現況に見えた。ハクオロさえいなければ全てがうまくいったはずだと、憎々しげにハクオロを睨む。

「殺してやるぞ！　てめえだけは何があつても殺してやる…」

あまりにも大きな声だから、それとも別の理由でか、僅かに震える声でヌワングはハクオロに怒鳴り、味方もなしにハクオロに向かつて走り出した。

「ハアツ

「がつ」

しかし、いち早く反応したオボロの手によりたやすくヌワングは地に膝をつけさせられ、剣は地面に落ちた。

「へわつ、じんな苦が…！」

悔しげにうめき声をあげるヌワングだが、それに応える者はいない。

「敵、撤退してゆきます」

ドリイとグラアが声をそろえて報告するよつこ、ヌワングの味方であるはずの兵たちはすでに半ばが撤退している。

「逃げる者は追うな。もつ勝敗はついた」

ハクオロの命令はすぐに全兵へと伝令される。
幸か不幸か、ヌワングの配下にあつた者の殆どが大きな傷もなく帰還していった。

国にとつてヌワングを含めた数えるほどの兵は大きくない損失だろ

う。しかし、ハクオロたちにとつても死傷者なく軍を退けたというのは大きい。
数で負けているハクオロたちは、深追いしてまで兵力を減らすことはできないのだ。

「お…オレ様の…オレ様の軍が…オレの…」

散り散りに逃げて行く兵に、ヌワングギは絶望に声をあげ、脱力する。味方は一人もおらず、敵に囲まれ、もはや反撃はもちろん、逃げることさえ叶わない。ヌワングギはもはや抵抗を諦めた。

「最後は見捨てられちまつたかい。こうなると哀れなもんだな」

テオロはその姿に、怒りと同情が混ざったかのような複雑な表情を浮かべながら固い声で遠回しにヌワングギを責めた。

「く…く…く…く…く…様あねえなあ、まつたくよ…」

ヌワングギは気が触れたかのように唇を吊り上げ、笑い声をあげて自嘲し、しかし今だ敵意の消えないギラギラした瞳で周りの人間を睨みつける。

「殺れよ… さあ、殺れってんだよ!」

「覚悟は出来るようだな」

「待て」

自棄になつたかのように叫ぶヌワンギにオボロが剣を取り出しだすが、ハクオロはそれを止めた。

攻めてきた敵の大将だ。オボロの判断は正しい。だけど、エルルウの意見を仰ぐというのがハクオロにとっては一番正しく感じるのだ。

「兄者、何故止める」

「エルルウ、どうしたいか、決めた?」

「……」

睨んでくるオボロを無視し、ハクオロはエルルウに尋ねた。
エルルウは黙つたまま、後ろから前方へ、ヌワンギの目の前へと、姿を表した。

無表情なエルルウにヌワンギは一瞬顔を引き攣らせたが、すぐに自虐的な笑みになつて声をあげた。

「どうした、笑いたきや笑えよ。婆があんな事になつてオレを恨んでんだる。惨めな姿を見て、さぞ氣分がいいだろうな!」

「!」

パン、と音がした。ヌワンギは何が起つたのかわからないのか、瞬きを繰り返した。

「…あ?」

エルルウがヌワンギの言葉に怒りで眉を逆立てて、ヌワンギの頬をひつぱたいたのだ。

ヌワンギと見つめあつて数秒、エルルウは我慢の限界がきたかのように無表情から一転、くしゃりと顔を歪ませた。

「バカ…どうして、どうして判つてくれないの。私、何もいらなかつたのに」

場は静まり返り、皆が二人を注視していた。エルルウを止める人間は誰一人いない。

エルルウは震える声で、ヌワンギへずっと伝えたかったことを吐き出した。

「綺麗な服も、高価な飾りものも…贅沢な暮らしなんか出来なくつたつていい、貧しくつたつていいのただみんなで一緒に暮らして、少しだけ幸せがあれば…それだけでよかつたのに…」

「な…」

ヌワンギは驚愕に目を見開きながら、エルルウの言葉を聞いていた。

「ヌワンギだつて、昔はそう言つてたの…忘れたの？ そんな不器用だけど、純朴で優しいヌワンギが…好きだった」

言われて、ヌワンギはを昔のこと思い出す。昔、エルルウと歩いていたころ、彼女は確かに俺の言葉や行動に笑いかけてくれていた。

エルルウは堪えきれなくなつたのか瞳を閉じた。涙が一筋こぼれ落ちた。

「どうして…ヌワンギの、馬鹿あ…」

「お、オレは……オレはただ、お前と一緒に……お前を、幸せ……
「そんなの……幸せなんかじゃない。全然……幸せじやないよ……」

ヌワンギはエルルウを幸せにできるのは権力を得た自分だけで、お金があれば幸せにしてあげられるのだと信じていた。なのに、エルルウはそれを真っ向から否定した。

「……。じゃあ、オレは何を……何やってたんだ」

信じていたことを否定され、まるでヌワンギは地面が崩れしていくかのように思った。何がどうすればよかつたのか。今更後悔しても遅いのはわかっていたが、後悔せずにほいられなかつた。

「……」

うちらしがれるヌワンギの繩を、エルルウは黙つて解いた。ヌワンギははっと顔をあげた。

「え、エルルウ……？」

「恨んでなんか……ないよ。恨めるわけないじゃない」

ついにエルルウは嗚咽をもらりし、涙も隠さず、泣きながら、ヌワンギを見つめた。

「あの時、ねばあちやんのこと、『バアちやん』って、言つてくれたのに……恨めるわけない……」

「……」

「それなら……ヌワンギ」

永遠に、よみがへだ。恨めないけれど、また一瞬にいるなんてできない。誰も認めないし、エルルウ自身、何のわだかまりもなくすな

んてできない。起じたことはなくならない。失われた命はもう戻らない。

ヌワングギも、それがわかった。エルルウと生きるにはできない。
彼女にかける言葉ももはやない。

ヌワングギは黙つて立ち上がつた。

ハクオロたちは誰もヌワングギを止めない。誰も、エルルウの行為を咎めない。

ハクオロは用意しておいた、少量だが食料などが入った包みをヌワングギに渡した。

「ヌワングギ、達者で」

「……ああ。……俺がこんなこと言つのは、筋違いだろ？が……エルルウを泣かしたら、許さねえからな」

「ああ、任せられた」

ヌワングギはハクオロの言葉に小さく笑うと、髪を後にする。とても敵とは思えないほど、静かにヌワングギは見送られた。

夜、荒野にてヌワングギは腰を下ろしていった。

「エルルウ……」

名前を呼ぶと胸が熱くなつた。

そういえば、最近はずつといらいらするばかりで、純粹にエルルウのことを思つてはいなかつた。

忘れていた。エルルウのことを考へるとヌワングギはいつだつて温かくなれた。エルルウのためなら強くなれた。

そんなことでは当たり前だつたのに、忘れていた。

「オレは……この戦をやめるよつ、頼んで……いや！ 何としてもやめさせてみせる！」

小さく誓いをたてる。

今日はここで野宿をして、数日かかるが都に戻れば、何とかなる。相手は叔父とは言え、父親と同じく俺を使い捨てにしか思つていなうだろ。だけど血縁なのは本當だ。最悪、あいつを殺してしまえばどうにでもなるはずだ。

「それがお前への、せめてもの……」

穏やかな顔でヌワングギは夜空を見上げた。その瞬間、弓がしなる、するどい音がした。

「……？」

何かがぶつかつたような衝撃に上体が揺れた。視線を下げる。

「何……だ？ 何か……刺さつてやがる……」

胸から「」がのびている。理解ができない。

「なん…で？」

視界がゆがむ。ヌワンギは体の制御ができないことに気づいたが、なすすべはなく、地に伏した。

複数の足音がして、目は見えなくなつたが囮まれたことを知る。

「見ろよ、こいつはかなりの上玉だぜ」

「…悪く思うな。俺達はただ、お前たちにとられたものを返してもらつてるだけなんだからな」

ヌワンギの格好から、国軍であるとわかつて襲つたらしい。おそらく襲撃した集落の生き残りだらう。

ヌワンギが殺したのはトウスクルだけではない。数えきれないだけ殺した。だから数えきれないだけ、恨みに思う人間がいる。

「無駄口叩いてねえで、とつと身ぐるみ剥がすの手伝え。分け前減らすぞ」

「おい、まだこいつ生きてるぜ」

「ほつとけ、どうせもう助からねえよ」

「おい、確かにこいつ、侍大将じゃねえか？」

「ホントかよ！？ だとしたらツイてるぜ。コイツの首を叛軍に持つてけば、褒美ががっぽりだ」

「そしたら、こんな生活とはおさらばだ」

まだだ。まだ死ぬわけにはいかない。自分のせいで戦が始まり、人が死んでいるのだ。自分が、戦をとめなければ。それがヌワンギに

できる精一杯の償いだ。償いきれるとは思わないが、やうなばならない。

「ハ…ルル…」

手を伸ばす。だけど、もう遅い。ヌワングギはどこにも行けない。

空を切る音がして、ヌワングギの意識は途切れだ。

メロノギの最期（後書き）

タイトルがネタバレですが、これくらいならありますよね。
今回も何とか間に合いました。

皇都侵攻

ヌワングギが率いた先の戦いにより、敵軍は統制を失い、波にのったハクオロ軍は破竹の勢いで勢力を広げて行った。

国の三分の一を制したころにはもはや優劣は明らかであり、各集落だけでなく藩主や豪族までもが様々な思惑のもと、傘下に加わっていた。

そしてハクオロたちはついに皇都へと侵攻を開始した。

その時、ベナウイはいまだ皇居の地下、薄暗い石造りの牢屋の一室で静かに目を閉じていた。

そこに一人の足音が近づく。

「むかえに参りやしたぜ、大将」

「……」

目の前に来て声をかけてきた部下、クロウの言葉にベナウイは目を開いた。

クロウがここまで来る許可があるのはずもなく、彼がここにいるだけで、すでに平常時ではないことが伺えた。

「戦況はどうなつてますか?」

「あいつの指揮する第二軍は敗退。ほぼ壊滅状態となりやした。あいつ自身は戦死か、それとも……何れにせよ消息は不明」

ヌワングギがどのようなやり方をしたのかはベナウイにはわからぬが、指揮力は短期間でつくものではない。彼が負けたこと自体は驚くこともない。

「叛軍は現在、ここに向かつて集結しつつあります。早ければあと数刻で戦になりますぜ」

「聖上はどうなさりますか？」

「……髪の手入れの真つ最中」

ベナウイの問いにクロウは少し嫌そうな顔をしてから、ふざけるような軽い調子で答えた。

「最近抜け毛が激しいもんで、念入りにやつてやす。誰も邪魔するなと言つてやしたぜ」

「そうですか……」

「いつそのこと、このまま永遠に・と、こりや失礼」

ベナウイの視線は特に咎めるものでもなかつたが、彼の主義を知るクロウは失言と思い途中で止め、牢屋の鍵を開けた。

「全軍、出陣します」

「大将、本当にいいんですかい？」

出るなり言われた言葉に、予想はしていたが尋ねずにはいられなかつた。

「気付いてるハズですぜ。この國にはもう、護るべき価値は何もないって」

「そうですね。もはやこの國の崩壊は必然でしょう」「だったらどうして。大将なら、どの國だって高く受け入れてくれやす。いや、大将さえその気なら・」

「クロウ、そこまでです」

「……出過ぎた真似を」

わかつていてなお見捨てない。クロウはそれを理解はしても共感はできなかつた。だが他人の主義を否定することは傲慢であるとは知つていた。彼が最後までこの國に仕える武人であることを選ぶなら、それを否定することはできない。

「あなたの心遣いは感謝します。ですが、それでも私はこの國の侍大将なんですよ。私には、この國と運命を共にする義務があるのです」

「ですがね…」

「全兵に伝えておいてください。『劣勢となつた場合、すぐに投降せよ』と」

「大将、まさか…」

「行きましょう。これが最後の戦いとなります」

「……」

歩きだしたベナウイに一瞬、なんと言おうかと苦悩した。だが彼の颯爽とした背中に無粋なことを言つのは躊躇われた。

「うひつス。一丁、ハデにやりやすかい」

「なのでここは一つ自分らしく、何も考えずに笑うことにして。なに、難しいことではない。ようは最後まで大将についていけばいい。最後まで彼の右腕でいる。それだけだ。」

城へ門を突破し、門外からも別部隊が侵攻し敵兵力を分散させ、ハクオロたちは中央を真つすぐに本丸へ向かっていた。

しかしその途中、道の真ん中を遮る巨体に足を止めた。

「やつと来たかい。待ちくたびれたぜ」

悠々とやう言つて獰猛に笑うクロウ。ベナウイの姿はいなーいが、恐らく他の兵はいるだろう。武器を構えて警戒する。

そんなハクオロたちにクロウは距離があるとは言え、武器を下ろしたまま話し掛ける。まるで友人のように親しげに。

「」の前は悪かつたな。途中で抜け出しちまつて。まあ、お詫びと言つちやなんだが、今日は最後まで相手するから、それで勘弁してくれや」「僕らとしては、出来れば相手をしてほしくないんだけどね」

恐らく勝てるだろ？。しかし余分に時間を使つし、無駄に消耗してしまう。最近は姿を見なかつたが、やはり避けられないか。

ハクオロの本音まじりの軽口にクロウははつと笑う。

「馬鹿言つちや、いけやせんぜ。それじゃ失礼つてモンだし、第一…つまらんだる？」

一カツと、無邪氣といえるほど豪快な笑みを浮かべてクロウは大きな刀を掲げた。それを合図に、兵が出現する。数はそう多くなく一個隊ほどだがそれはこちらも同じだ。

「さあ、始めようかい。どちらかの息の根が止まるまでなあ……！」

クロウの叫びに似た始まりの合図で、一斉に走り出す。飛び交う弓矢をかい潜り一番乗りに敵兵にたどり着いたのはオボロだ。

しかし一人目をぶつた切ったところで、クロウがオボロの斬撃を受け止めた。

「「」を通すわけにはいかねえな」

「なんとしても通る！ そして奴を…倒す！」

余裕ぶつたクロウの態度にオボロは眉を吊り上げ、ギリギリと刀に力を込めた。

クロウはそれをかわして、巨体から想像つかない素早い身のこなしでオボロより一足遅れていたハクオロに向かつた。

「「」あんたさえ討ち取れば、この國は助かる！」

「…本当にそう思つてているのか？」

「冗談でさ…だが、それでもやんなきやならねえんでい…！」

その気迫に思わず尋ねるとクロウは戦いの最中だが僅かに口角をあげ、そう答えるながら剣を振り上げた。ハクオロはそれを転がるよう避けた。

単体の兵力ではこちらが上だ。今もドリイグラアの弓矢が、テオロの斧が、ムツクルの牙が敵の数を減らしていく。

途中から気付いているが、敵はある程度の怪我をすれば降伏をしていく。もちろん手加減できるものでもないので一撃で致命傷となる場合もあるが、多くが生きたまま降伏している。殺すより手間がかからず精神的疲弊もない。クロウさえ何とかすれば、疲労も少なく突破できる。

「オボロッ」

「応つ」

「ふう・やれやれ、負けちまつたか…」

クロウの得物は手から落ち、オボロとハクオロ、そしてドリイに弓先を向けられてようやくクロウは動きを止めた。

まだその気になれば命と引き換えに相手の大将に傷をおわすべからならできるだろ。しかしそここまでして忠誠を表したい皇ではないし、この戦は負けが決まっている。ならばいづれこの大将が皇になろう。ぶざまにあがいてまで一矢報いたい相手ではない。

それに敬愛するベナウイが認めた相手なら負けても恥ではない。なのでクロウは潔く負けを認めた。

利き腕を深く切られていたが、それでもクロウは痛みなどないよう苦笑し、その場に座りこみ、あぐらをかいだ。

「ホレ、持つてきな」

そして手刀でトントンと首を叩く。降伏すれば助かるだろうが、例え負けが決定しようが自ら命乞いをする気はクロウにはなかつた

し、それが兵を率いた責任だとも思っていた。
しかしハクオロは武器を下げた。

「いらないよ、そんなもの」

「おいおい、そんなモノはないだろ。相手の首を掲げるのが武人と
しての礼儀だろに」

「生憎、こつちは武人じやない。そんな礼儀に付き合つ必要はない
よ」

そう言つて悠々とクロウの横を通りすぎたハクオロにクロウは頭
だけ振り向いて問いかける。

「生かしておいて、後で背後から斬りかかれたらどうするんで?
「つまらないことを言つね。そんな男が、武人の礼儀なんて持ち出
すか?」

「……」

「みんな行くぞ」

負けを認めた。認めた以上、これ以上じつりつする気はない。し
かし、拘束すらしないというのか?

「そんなに死にたければ、自害でもするんだな」

驚くクロウに通りすぎざまにオボロが吐き捨てるよつた。言つた。
あれだけ殺すと息巻いていたのに、あっさりとクロウを放置した。
後を続くように他の男たちもクロウを置いて行く。

「……」

そこに、エルルウが近づいた。当たり前だが暗い顔をしている。

恨み言でもあるのだろうか。

「なんスかい？」

「……動かないで下さい。傷の手当をしますから」

「お、おいおい。信じられんことしなさんなつて。このまま嬢ちゃんを人質にするなり、首をへし折るくらいは簡単に出来るんですぜ」

エルルウは答えるながらクロウの傍に屈み、薬箱を開けた。淡々と準備を始めたエルルウにクロウは仰天しながら注意をする。拘束しないだけでも驚きなのに、まだ戦をしてる最中だというのに敵兵の手当をするなんて常識外れも甚だしい。

けれどエルルウはクロウに構わず手当を開始した。クロウは困惑しつつもそれを受け入れたが、顔にはありありと不可思議だと書いてあつた。

「もう……人が死ぬのは見たくないの……」

クロウに答えたのか、それとも自分に言い聞かせてているのか、エルルウは独り言のように小さくそう言った。

「……」

クロウは口をつぐんだ。何も言えなくなつた。クロウは鬪うことは好きだが、何も人殺しを好んでいるわけではない。死ぬことを覚悟したが、死にたいわけではない。それでも敵の命をそんな風には思えないし、思われるとは予想していなかつた。

「終わりました」

「……じや……どうも」

ずいぶん手慣れているようで、素早く丁寧な手当だった。出血も止まり、動かしても平気だ。

なんならもう一度戦闘に参加できる程度には、手厚く手当をされてしまった。

「旅だった後は残される人がいること、忘れないで下さい」

エルルウは立ち上がり、それだけ言うと頭を下げてから立ち去った。また他の怪我人でも探しに行つたのだろうか。

「お……」

その背中に思わず声をかけようとしたら、だけど言葉は形にならなくてクロウは頭を搔いて天を仰いだ。

「大将…ホントに、負けちまいやしたよ……」

単なる戦つた勝敗だけではない。気持ちすら負けてしまつた。だけど何故か、悪くない気分だった。

「……」

ふと、何気なく視線を戻し、振り向いた。

「あー!?」

白と黒の猛獸がいた。思わずのけ反つた。

「……」

森の主ムックルとそれに跨がる少女アルルウがじつとクロウを見ていた。

感情の読めない無表情な少女と獸の瞳に、まさか食われはしないと思いつつ逃げ腰になる。そもそも森の主が何でこんなところで少女の乗り物をやつているんだ。

「な、なんですかい、小さな嬢ちゃん」

「傷は舐めると治る」

「はあ！？」

「舐めてあげる」

つまり姉と同じくクロウの手当をしようと申し出してくれているらしいが、舐めるとはまた動物的な。少女に舐めさせんくらいなら自分でやるし、だいたいすでに治療済みだ。

「い、いや、そいつあ嬉しいが…」

「ムックル」

「ヴォ」

「あ？」

少女の呼びかけに従順に反応した森の主がクロウに顔を寄せ、舐めた。

「ぐがつ！？」

ぎつぎつとした鱗のような舌が、かすり傷の上をなぞりあげる。

「デ、デデ、レ、」「イツか、」「イツなのかー！」

少女に舐められても反応に困るが、痛い。これは普通に痛い。し

かも無理矢理止めようとしても力で敵わない相手で、下手に手を出したら思わず腕を噛みちぎりかねない。

べたべたとよだれにまみれて、痛いのもあるが何だか情けない気分になつてくる。

「舌が痛エ、生臭エ、おいかじつてる、かじつてるつて！」

皇都侵攻（後書き）

間を空けすぎてるせいいかどんな文章だったか忘れてきました。話に違和感とかあつたら、指摘お願いします。

読んでくださいありがとうございました。

何故かクロウ視点みたいになりましたが、別にクロウ好きじゃありません。一番好きなのはカルラです。

メインヒロインはエルルウですが…。

なんつーか、原作沿いすぎてつまんないです。日常なら主人公の個性だせますが、シリアスシーンは変えられないから仕方ないんですけど。

とりあえず城とつたら第一部完つてことで一回完結にします。しばらく凍結つてことで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5027c/>

おさなくあるもの

2011年9月14日12時31分発行